60
637

始

越藩福井醫史
及
醫人傳

笹岡芳名著

6
63

60-637

釣雪漁史 笹岡芳名 著

越藩福井醫史及醫人傳 全

其五拾弐册

醉香室刊行

大正
10 7.25
内交

自序

凡そ文章を著して之を後世に遺さんほどの者は先づ筆を執るの初めに方り史實の明確ならんことを期し後學の惑を起さしめざらんを要す世には文章家といふ者あり或る材料を蒐集しながら己が掌中に揑ね回し事實ならぬことをも實(マコト)しやかに吹聽して權勢に阿る者尠からず讀者をして其絢爛なる文辭に眩ぜしめ眞の事實は却て五里霧中に埋沒さるゝ事往々にして是あり

更に思ふ書を公にせんほどの者は數多き材料に就き假名遣熟字を校し脈絡を追ひ系統を立つるの識見なかる可からず識見の伴はざる文章は其材料いかに豐富なりと雖も之を編するに當つて玉石混淆の嫌を生じ讀者をして寧ろ侮蔑の念を抱か

しむるに至り僅に著者に對して其材料を集め得たる勞苦に同情せしむるの他著書としての權威を疑はしむるに至らん

現代醫學の益〻精緻を極め病源の發見せらるゝもの日を追うて繁く細菌學の進歩となり組織學の闡明となり西歐の學術を輸入して以來醫學は實に他の學術を超越して最も長足の進歩を遂げ歐洲列國の醫學に比して甚しき遜色なしとさへ誇稱せらるゝに至りたるも其源由する所果して何れに在りや

松平春嶽侯は幕末に於ける名君の一人にして其藩學を刷新し夙に泰西醫學の講習を奬勵したる結果は維新當時に於て多くの名醫を輩出し醫學が明治大正の今日長足の進歩を爲したる根柢たらざるなきを保す可からず

始めに奥村良筑あり淺野道有ありて其蛹を作り後ちに笠原良策及び橋本綱紀・綱常の兄弟あり岩佐純ありて愈〻光華を放ちたる我舊藩の醫史が日本醫學史の或頁を賁飾す可き理由ある事を疑はざる可し

則ち現今醫學のかゝる長足の進歩をなしたる所以のものは鎖國攘夷の説に眩惑したる當時の日本に在りて我が越藩が泰西醫學の講習を諸藩に先ちて奬勵したる先見の明に負ふ所少からざる可し彼の薩・長二藩の武力と政權とが維新當時の諸藩に優越したるが爲に今尚ほ帝國政治史の上に其權力を保有するが如く彼と此とは政治と學術との差別こそあれ維新當時に於て諸藩に優越したる我が藩の醫學が後來進歩の端緒を開き得たりと云はんも必ずしも不可なりとせんや

我等人類の十中八九は隨意に自己の耳殼を動かし得べきものにあらずされども往々にして自ら己れの耳殼を隨意に動かし得るの人あるを見る是に據りて徴するに耳殼の周圍に存在

する或種の筋肉は今こそ其運動機能を消失したりと雖も悠久なる進化の道途を溯源するに及ばゝ一箇の筋肉も他動物に在りては運動的機能を有する筋肉たらざる無きを保す可からず今日十分の進化を遂げたる人類の身體には到る處悠久なる進化の跡を語る可き徵證ある可きなり

今日十分發達したりと思はるゝ醫學の狀態にも維新當時の名醫が心血を濺ぎたる研究の餘瀝を藏せずとは言ふ可からず

遮莫余が此小史は寸暇を利用して不十分の材料の中より書き集めたる者なるを以て醫學てふ大形態の一筋一肉の由來する所を詳しく研竅し得べからざるは勿論のこと動脈血の脈打ち流れて少しも淀まざる識見の高邁と顯微鏡下に於ける血清の史實判斷とは我が謭陋の才の以て盡す能はざるを憾みとするのみ

寛永の諺人烏丸光廣卿が予が愛藏する或人の諺の撰集に奥書して　一つ二つひろはぬ珠もものこるらむ我かおろかさの袖のせはさにとことわられたる人誰か遺漏なからん我が袖將た隘し名珠の遺られたる豈に一二にして止まらんや當さに世間博雅の士の是正に待つ所ある可きなり

大正十辛酉年龍集五月五日

"Hinter dem Berge wohnen auch Leute."

"Beeter nooit te beginnen, als niet te voleynden."

凡例に代へて書いつくることゞも

一　越藩福井醫史及醫人傳は共に余が明治三十年福井縣尋常中學在校當時夏稿を興し春季休業暑中休暇を利用して徒歩渉獵せし收獲に基礎を置き後ち補訂せしものにかゝる而して四十一・二・三年余鸚軒先醒の皮膚科學草稿を書きたりし頃の夏は多く鎌倉に在りき一日午後四時頃と覺ゆ由井ケ濱邊をそゞろありきしたるに偶ゝ富士川游先醒令兒の海水浴に伴ふて在り雜談數語の後ち主宰せらるゝ刀圭新報に何にくれとなく寄稿を乞はる則ち諾して一度之を掲げしこともありき

一　是より先き二十餘年間稿を替ふること幾度なるを知らず又此間幾多の艱難障害に相遇し時には之を火中に投ぜんと思ひし事さへありきそは種々の原因あらんも一には自分の淺慮にして事志と副はざること多きと二には明治四十年余尙鄕に在りし頃在京福田菱洲越前人物誌を出版すとの噂を聞き余の著と相似たるものならんには余の此の業は中止すべきかと考へ私かに其內容を瞥度開度思ひしが遂に菱洲に會して此志を語るの機なかりきかくて四十三年か四年か菱洲其著成り人を以て余が濱町の鳩居に其一部を寄贈し來りしかど余は出來上りし上は覽るの要なし寧ろ同種の書とするも余は予の稿によりて目的を達すべしとなし特に醫學の方面に力を致すことに決心して愚にも其寄贈を謝絕し同書を返戻したりき菱洲必ず記憶に存するなるべし今よりして之を思へば自ら恥づること深し而して余が越前人物誌を通覽せしは特に菱洲に東を飛ばして一部を購ひし大正四年冬恰も刀圭新報に金津醫人傳を掲げし後の事なり故に一言之を辨ず

一　余幼時家兄と共に父より夏季土用に入れば曝書を命せられ時に月餘に涉ることあり有體に申せばうるさかりしもの甚だ多し而も卷を開くの朝よりも之を閉ぢて本箱にキチン〳〵と揃へて納めざるべからざる夕を厭ひき若し斯くせざれば忽ち父が癇氣に觸れたり依つていや〳〵ながら毎年之を行ふ中に古書に趣味を持ち幾分國語漢文の修養を得

たるなるべしさる程に父は病床の人となりしも余は中學校に入り家兄は歴史由緒なる我家醫業の絶えんことを慮れて父命により東京に出で長谷川泰の濟世學舍に入りて醫學を修めつゝありたり余は福井の叔父天谷家より中學に通ひ父病中は五里餘の野道を土曜日に至れば放課後風の日も雨の日も雪の日も嵐の日も蓑笠に身をかため歸省して父の病床に侍するを常としたり一日近く死を悟りし父は特に余を枕頭に呼んで云へるよう我死すとも兄には歸國の要なし學成らずんば死すとも歸るべからずと申し遺すべし汝能く古書を讀み文學を好むも弟たり心を飜して醫業を學ぶべし何となれば弟は必ず家を他に立つるの覺悟なかるべからず果して然らば醫とならば何れの地に在るとも一家を立つることを易かるべしと云ひ遺し數日にして父は逝き給ひぬ

一　その後余は暑中休暇に至れば自ら曝書を續けたり而して中學上級生たるに隨ひ教室に於て國語漢文の熟字出所を質す時余は時々左繡を用ゐて之を引き先生と議論したる事ありき又常に白文の家書を用ゐたり曾て國譯書を手にせず爾來先生より特別の寵遇を受け作文・漢文・國語等の得點はいつも百三十點を附せられたり而して一日先生一生徒の質問に答へて曰く標準點は百點を滿點とすと雖も笹岡を百點とせば君等は皆落第點を附せざるべからずと過褒固より當らずと雖も悉く是れ曝書の德にして又亡き父・祖先の遺書ありし德なり余が此の小著亦淵源遠く父祖の業に在りしを顧み敢て玆に泣記す

一　終りに蒞み恩師東京帝國大學教授醫學博士土肥慶藏先醒及私淑せる文・醫學博士富士川游先醒に對し滿腔の敬意を表すると共に岡山醫學專門學校長心得兼教授醫學博士舟岡英之助氏が多用中直ちに余が問に應ぜられたる厚意と又醫學博士矢尾板四郎君・岩國中學校長文學士滋賀貞君其他幾多の畏友より名利を趁はざる余が此事業に對し久しく同情と激勵の辭を辱うしたる事を深く感銘し併せて同鄕の人三秀舍主島連太郎氏が幾んど義俠を以て印刷を諾せられたること及び同舍員山本與三治氏の勤勉に對し玆に記して謝意を明にす

大正十辛酉年五月五日

引用及參考書目

一・筱岡氏・松平啓運記寶永元年甲申初夏以早筆寫之　二・同山口記　三・松平家系圖　四・土井家系圖　五・小笠原家系圖　六・有馬家系圖　七・間部家系圖　八・本多家系圖　九・寛永系圖　一〇・八十一難圖　奥書　一一・加島近信著・皇朝醫史　一二・玉雲軒文書　一三・大月文書　一四・筱岡玄察稿・梅花無盡藏　一五・灰谷文書　一六・千滿嘶　一七・越藩醫人墓誌　一八・奥村文書　一九・淺野休眞墓誌　二〇・丹羽仙庵墓誌　二一・高野眞齋著・眞齋鷄助　二二・奥村良齋著・東齋雜筆　二三・三輪東朔說伊藤大肋記・刺絡見聞錄　二四・山脇玄侃著・東門漫筆　二五・淺田惟常著・皇朝名醫傳　二六・奥村先生功德碑　二七・近世畸人傳　二八・淺野系圖　二九・適所田中先生行狀碑　三〇・東皇太一跋橘文幹・越前國餘錄　三一・雪のかきよせ・建碑葛藤談　三二・七面堂碑　三三・雨宮文書　三四・山本文書　三五・明霞五雲父子筆塚　三六・矢島立軒著・立軒存稿　三七・淺野文驥君墓誌　三八・土肥慶藏稿・石渡宗伯　三九・土肥慶藏稿・武生文學談片　四〇・池田冬藏著・解剖圖譜　四一・妻木陸叟稿・天橋立道の記　四二・秋陽先生墓銘　四三・三國直準序・雪齋運金圖譜　四四・細井徇著・四診備要　四五・同詩經名物圖解　四六・橋本海量君墓表　四七・魯齋秦先生墓誌　四八・新建成器堂記　四九・橘曙覽稿・志濃夫廼會歌集　五〇・橋本左内稿・館務私記　五一・半井文書　五二・半井南陽墓表　五三・白翁笠原君碑銘　五四・竹内渭川院文書　五五・

渭川院竹内正幹之墓　五六・柳陰記事　五七・吉田拙藏稿・竹内麴園先生墓誌　五八・雨宮敬次郎述・過去六十年事蹟　五九・筱岡文書　六〇・鉉臺石塚先生傳　六一・景岳會編・橋本左内全集　六二・福田源三郎著・越前人物誌　六三・敦賀誌　六四・若越醫談　六五・福井縣醫學會記事　六六・武生鄉友會誌　六七・松平康莊・松平慶民共營・春嶽文庫　六八・富士川游著・日本醫學史　六九・笹岡芳名稿・越藩醫人傳　七〇・笹岡芳名稿・夢物語に就て石原愛軒を說き及び其橋本景岳との交態を敍す　七一・笹岡芳名稿・夢物語の後に附記して更に醫人としての橋本景岳を傳ふ　七二・笹岡芳名稿・安政四年福井藩醫學及醫政大變革　七三・笹岡芳名稿・萬延元年キュンストレーキ最初の購入者たる福井藩の醫學に就て　七四・J. L. Pagels, Geschichte der Medizin. 1915

註、以上は僅かに主要なるものゝ一部分に過ぎずして口碑及び斷簡零墨の類に至りては數百種以上に達せり然れども繁を厭ひて悉く他を略することゝはなしぬ

"The child is father of the man." Longfellow.

越藩福井醫史及醫人傳

目次

自序……一
凡例にかへて書いつくることども……一
引用及參考書目……一
第一章　越藩福井醫史……一
第二章　越藩醫人傳……三五
第一節・一・福井醫人傳……三五
谷野一柏……三五　岡本一抱子……三九
三崎安指……三六　岡部高伯……四〇
大月景秀……三六　本山桃齋……四一
横井玄節……三七　三崎道庵……四一
大月壽齋……三七　馬淵亨庵……四二
安見祐軒……三八　妻木陸叟……四三
山澤榮順……三八　妻木敬齋……四四
伊藤坦庵……三九　關明霞……四五

山本五雲……四五　大岩主一……七八
石田一惠……四六　宮永欽哉……七九
池田復堂……四六　益田宗三……七九
小島良琢……四七　半井仲庵……八三
小島貞勝……四七　橋本綱維……八五
山室東柯……四七　笠原白翁……八八
山室松軒……四八　内海玄高……九〇
橘　立庵……四九　村上三亭……九〇
松下眞山……五〇　舟岡周伯……九〇
松下秀山……五一　魚住格……九一
松下昌和……五一　岡部養竹……九四
前田葉庵……五二　高桑實……九五
勝澤青牛……五二　石塚雙鹽……九六
細井東陽……六〇　橋本綱常……九八
花木淡齋……七三　岩佐純……一一三
橋本長綱……七五

第一節・二・松岡豎人傳……一二八

岩佐陽雲……一二八　幸山浩齋……一二九

第一節・三・金津豎人傳……一三四

筱岡玄察……一三四　正山二逐……一五四
淺野休眞……一四六　正山二芳……一五五
丹羽仙庵……一四六　井代養珀……一五六
丹羽嘯堂……一四七　井代澹齋……一五七
淺野碣石……一五〇
淺野嵩山……一五一

第二節　大野豎人傳……一五八

松邨九山……一五八　林雲溪……一六一
雨森牛南……一六〇　中村岱佐……一六一
土田龍灣……一六〇

第三節　勝山豎人傳……一六一

秦魯仙……一六一

第四節・一・丸岡豎人傳……一六五

竹内壽庵……一六五　竹内西坡……一六七
青木峯行……一六六　竹内麴園……一七〇
藤田天洋……一六六　土肥淳朴……一七一

合屋文仲……一七四　一　堀江藏信……一七四
第四節・二・三國醫人傳……一七四
杉山豫齋……一七四　田中靖齋……一七五
杉山節齋……一七五
第五節　鯖江醫人傳……一七六
西島俊菴……一七六　一　土屋得所……一七八
第六節　府中醫人傳……一七九
奥村南山……一七九　齋藤策順……一九八
三井養安……一九〇　奥村良竹……一九八
田中必大……一九一　山崎良元……一九九
石渡宗伯……一九三　渡邊靜庵……一九九
安田一溪……一九七　生駒耕雲……二〇三
齋藤寛輔……一九七　前田松閣……二〇四
第七節　敦賀醫人傳……二〇六
富野鳴謙……二〇六　伊吹東恕……二〇八
最里公濟……二〇七

第三章　夢物語に就て石原愛軒を說き及び其橋本景岳との交態を敍す……二一一
第四章　夢物語の後に附記して更に醫人としての橋本左內を傳ふ……二三一
後序に代へて日本醫人倫理學を論ず……二三七

越藩福井醫史及醫人傳

目次終

土肥醫學博士來翰

十八日附貴書拜讀越藩醫史及醫傳御出版の御心組に御座候趣多年の御丹精不空我學界を益する多大なるへく欣喜不過之候序文の儀は委細承知致候先頃より花柳病豫防協會の發起同講習會の開館等學會に引續ての混雜其間には又拙著性病學の印刷に追はれ彼是と長閑なる三春を夢中に空過致從つて御返事延引御諒恕是祈り候明日は快晴に乘じ久々にて骨休みに郷里の先塋渡邊松本兩氏を請じ函山中に櫻櫻の筈に御座候出發前急ぎ貴酬迄草々如此に御座候　頓首

四月二十三日夜於本學士の結婚祝宴より歸りて

慶

從岡學兄

侍曹

拜啓……

中學時代に文學者たりし貴兄が今も其の趣味を持續せらるゝを見て愉快に堪へず且つ欽仰の至りに御座候何卒福井藩醫史及醫人傳は御完成のほど奉祈候元來此事業たる我が同郷出身者に於て貴兄を措て他に適任者を求むべからざるものと斷言するものに御座候……足羽川の九十九橋が先年半石橋なりしを改築せし時橋柱が河底の大盤石と共石なりしに人々初めて驚きたりと聞き及候が今日の新文明特に醫學の如きは遠く德川時代の先哲が努力の基礎の上にあるは猶此橋柱の下に大盤石の控へ居るが如き感有之候……

本校にも舊醫書多少有之候一度貴兄又は富士川博士の御覽を得て新發見もあらば愉快に存候……

（釣雪庵毒語・その念七　滋賀文學士よりの來柬）

越藩福井醫史及醫人傳

後學　笹岡芳名　著

第一章　越藩福井醫史

我が越藩福井の醫學は今を距る百拾有八年前に始まる此以前に於て醫學あるも取らざるなり蓋し多少志を茲に致せし者ありと雖も特に記して以て世に傳ふるべきほどのもの無きに似たればなり抑も文化元甲子年藩主松平治好公の時始めて藩醫長嵩山淺野道有なるもの　醫は生民の基なり一日を忽にすべからずと唱へ公に建議して醫師の子弟に對しては醫學研究の方法を設けんことを企てたり公其企てを嘉して直ちに之を容れしかば翌年二月同僚勝澤一順・妻木榮輔に諮りて更に藩廳に請うに醫學所を設立せんことを以てす是亦其の容るゝ所となりしを以て直ちに三上町（現・松ヶ枝上町）淺野道有の自宅を以て假講場に決し茲に六月二日開館するの運びに至れり時に藩主治好公よりは特に醫者濟世之基而仁之方也云々の訓示を垂れ濟世館と名く則ち當日開館式を擧げ併せて先師の祭典を行ふ其祭文左

の如し

祭先師文

神祖勃興于參統一天下以後數百年于今兵戈不起人民寧一海內治安和及四誇朝貢者重譯而至仁澤益滋貨具於是富九穀實是豐於是自王公大人至士庶人唯養生保壽爲要乃醫藥之事大行貴重日加良相良醫更無甲乙矣吾越前今公有爲仁意

尊世子之時乞朝代

尊父公一再入覲觀政襲封之後濟世之意益深賑救窮民賞勞孝順自節食飲愼起居欲永躋壽域

上以孝事

尊父公下以爰臨黎庶民嘗示言醫事者濟世之基而仁之方也學淺技拙則一毫之差遂致千里之謬豈可不務哉甲子之夏侍醫長臣某等進言曰醫者生民之基非所可忽也開場講學督責者則可矣哉諸有司可于其言乃上聞

公亦大善之下　令日下居成之懋哉侍醫長臣某等拜承之與醫員某等謀而修繕堂爲講學之所依

公之示言拜譔濟世之二字曰濟世館某々等從事其事土木之功不日竣焉乃選六月二日記講集會者如雲

從此億萬年亦復如此則學博術神起廢肉骨可生而望又足報謝

公薦意於濟世之萬云乙丑六月朔盛陽張謙乎濟世學館謹祭祀炎帝越人長沙醫員某等謹歌曰

宏哉炎帝教民藥七十二毒不遺是嚼公非常人術神醫爲誰學出長桑飲上池水洞視方醫三法曰吐下汗滴方于古論傷寒

文化乙丑六月朔醫員某等拜讀之

按ずるに當時の醫學は未だ漢方にして其學ぶ所は傷寒論・金匱・溫疫論等を講習し兼て實地藥劑調合を自得したるに過ぎず既にして同六年十一月一日に至り治好公には特に土居の內即ち今の福井市實永上町五十一番地に學館屋敷地を賜り特殊の學館を設けて專ら其機關に充てんことを命ぜらる則ち領內醫師の役銀及び藩醫の據金を以て直ちに工を起し翌七年六月七日學館新に竣功し名けて濟世館と稱す其掲ぐる所の扁額は實に白川樂翁公の揮毫に係る現今尙ほ冠するの木額則ち是なり此額裏には次の文句を記せり

文化庚午盛夏濟世館成矣扁之以濟世館三字乃大執政白河侯兼越中守源公筆之本藩謁者中根衆諸刀之侍醫淺野文驥所得乞也

又樂翁公上書の寫として淺野家傳來に附するもの左の如し

已丑夏四月文驥從駕於東都以故聞濟世館創業巨細事於輔佐元老白河侯侯有感因自書濟世館三字以賜之、越國侍醫長尙藥管醫學事淺野文驥拜受之。

又文化二年乙巳冬刑罪有之段相聞候に付月番御目附町奉行は於評定所月番淺野道有乍序口達申

候近々刑罪有之御沙汰承知罷出候醫學所出精之醫輩腑分申度に付如先例被仰付可被下云々との願書を覽るに既に　先例の如く云々との辭有り據つて尙ほ以前に於ても解剖を行ひたるの證左たるべし只今日其記載の詳かなるもの無きを憾みとするのみ爾後文化十一年より天保十一年に至る二十有七年間に於ては和蘭解剖の擧頻々として記錄に存せり就中趣味を有して力を玆に致したる者を仙庵吉田良全と爲す蓋し仙庵は鍼醫を以て名ありしも當時醫學者としては寧ろ其名擧がらざるの事情あり惜むべきの至りとす左に文政年間に於ける和蘭解剖記錄の一篇を揭げん

女屍解試略次

序例

文政十一年歲戊子に次す九月二十二日官男女の囚若干を刑す因て其屍各一を請て小山谷火葬の處に於て之を解く半井仲庵・內海玄高其事を總管す妻木榮輔學監を以て參預す細井玄篤解剖の事を主管す男屍は平野玄蔡・妻木敬藏刀を執る有賀玄雄・橋本春藏之を助く女屍は岩佐玄珪刀を執り半井玄仲・村上三亭之を助く愿も亦與る辰より事を始め酉に至て終ふ其間大小の節目儀例載て籍簿にあり濟世館に藏す故に此に惟解剖に與る所の事を記して其餘は一切にこれを略す記する所事物遺脫文辭野朴これ愿が不才なると生平未だ內景の學をまなびざるの致す所なり然れども或は西に取り東に補はゞ亦以て文飾するに足るべし然れども事如此なる時は大謬誤なしと雖反て浮夸にわたるに似たり故に一事一語惟目檢する所を記して他に求むることをなさず

篇中處々見る所に隨て其物の色彩を記す然れども斬餘の死屍血盡く去て動靜二脈の類盡く萎縮し血色總て盡く意ふに其本色を去ること愈遠からん一臟一器官能の事に至ては天機の妙造化の祕蘭人と雖畢竟推側を免がれず故に篇中闕て論ぜず門脈乳糜の類記せずんばあるべからずして而して篇中論じ及ぼさゞる者多し蓋し淺學不文筆意の如くなること能はざるに因ると雖亦失血の餘軀筋脈萎枯互に相混じ易し故に强て疑はしきを記して反て其實を失はんよりは知らざるを知らずとするにしかざるがためなり

篇末所擧の圖魚住某所模なり形の大小色の濃淡つとめて其眞を得ん事を要す然れども動靜二脈色を異にし腸胃の形縮法に從ふの類蓋し已むを得ざるに出づ觀者以意逆志て可なり

文正十一年十月　　醫官　勝澤一愿識

右圖は精細を極め設色燦然現に一卷として春嶽文庫に珍襲せり

是より先き文政二年六月及び天保三年九月に於ては藥品會を開きて醫師及び其子弟の供覽に備へたり念らに其見聞を廣めしめんとの希望に出でたるものゝ如し降て天保三四年頃に於ては福井藩西洋醫學の輸入者としての大岩主一同七年には牛痘苗の輸入者として忘るべからざる白翁笠原良策等京都に出て小石元瑞・日野鼎哉・新宮涼庭等より蘭學を享け歸來時の藩醫長仲庵半井保及び橋本長綱等と共に

大に歐學を唱道皷吹する所あり則ち天保十一年に至つて醫風全く一變す時人呼んで之を日野風と稱するに至る既にして弘化二年に及び笠原良策時の藩主春嶽侯に請願して痘苗を支那に獲んと欲したり蓋しジェンナーが種痘法を發明せしと云ふ事の我邦に傳はりしは支邦より入りしものにして卽ち良策嘗て引痘全書(支那より渡來)を讀みて大に感じたるを以てなり然れども時期尙早の下に暫く其志を達することを得ず

當時醫生の修學醫師全般の願屆等は總て學館總管(御醫師)に於て處理したるものにして町村醫の開業異動も亦學館を經たり卽ち學館は宛も一藩醫政の府たるの觀ありしに似たり學館の前身たる醫學所なるものゝ醫事上に關して他に及ぼしたる勢力の一般は左に據りて知ることを得んか

覺　書

一相願候て開業致し候上は剃髮又は惣髮に相成り俗名相改め候儀勿論の事に候猶ほ又以後等閑に相成り申す間敷樣急度相守申すべき事

一片手醫者竝に出療治の儀は從來御禁制の事に候然る所近來兎角等閑に相成り他所他國より入込み候て自藥家方抔と唱へ世上治療致し候者有之を以て以後左樣の者有之候はゞ惣樣醫學所へ相達し申すべき事

一御免しの上開業致し候者といへども其內僞藥を用ゐ厚利を貪り候者有之候はゞ仲ケ間寄合ひ吟味の上嚴敷く申付け以後相愼ませ申すべく候其の上聞入れ申さず候はゞ是亦訴へ出申すべき事

一盲人共藥治の義は兼て御禁制の所近來醫師同樣の振舞致し候者有之かに相聞き候不屆の至りに候以後愈堅く停止たるべき事

一此の度其の者に於て年番を立て諸事締り方取扱ひ候樣改めて仰付けられ候上は猶以て以上の條條嚴重に相改め以後年番に相當り候者は年々正月姓名相認め醫學所へ指出し申すべき事

醫　學　所　印

弘化四丁未年八月

而して藩醫は一般諸士の規方を遵奉し町醫は町役所の配下に隷屬し町村醫の開業者は藩醫の門下生にして其成業を認められたる證書を要す又業體精熟の輩は特に拔擢して帶刀を許され或は　御通りかけ・御目見え等の階級に列せらるゝの特典あり藩醫に於ては仲ケ間に於て書物講・解剖講なるものを設けて臨時其用を辨ずると共に購入書籍は總て學館に納付し爾後舶來の歐書にして高價の物は時に藩主より交附されたるものと覺ぼし

嘉永元年に至りては侯卽ち曩の笠原良策の請願を容れ幕府に請うて痘苗を外國に需めんとせらる何ぞ圖らん幕府に於ては此擧を以て痴人の夢と冷笑したるも春嶽侯ゆゑ遂に聽許するに至りしと云ふ吁上に名君春嶽侯あり下に達識良策あり以て當時國禁なる牛痘苗を手に入れ天下萬民の病苦を救濟せんと欲したるに出づ則ち藩に於ては同年二月更に種痘所を設けたり蓋し越藩福井に於ては是より先き一

時痘瘡の大流行を來し良策の如きも其妻子三人悉く本病に襲はれて死亡したるに鑑み遂に此發願を起したるものゝ如し然れども痘苗を獲んと欲して容易に獲べからざるの事情あり良策苦心慘澹の結果遙に痘苗を外國に獲んとし先づ長崎に到らんとす

その時の口占に歌二首あり

我君の命かしこみ路とほし心つくしの旅のそらかな

たとひ吾いのち死とも死ぬましき人を活さむ道ひらきせん

途次偶〻舊師日野鼎哉を京都に訪ひ久濶を敍して談此事に及ぶ蓋し良策之を獲ざれば再び歸國せざる底の覺悟ありしが如し事の顚末に至つては嘗て大阪市種痘歴史を編める松本端氏の記載領る正鵠を得たり則ち其一端を錄す

笠原良策氏は元來京都醍醐卿殿家來・蘭學醫日野鼎哉氏の門人なれば長崎へ發向するの途次先づ京師に入り師家の安否を訪ひ此行の別を告げたり日野氏怪んで其行の眞意を尋ねられたるに初め其實を語らず談次牛痘苗の事に及び日野氏の詰問に由て今般痘苗輸入の君命を蒙りたることを告げたるに日野氏拍手して大に悅び云はるゝには濟生の大事業洵に結構なることなり余嘗て長崎遊學の時より長崎代官手代にて唐通辭役頴川四郎左衞門氏號春池に懇意なれば此人に依頼すれば事容易ならんとて其紹介狀を認められ歸路必ず立寄り吳れと約束せられたり笠原氏は之を懷にして出發するや日野氏は直に一書を認め大阪在住の弟日野葛民・親友緒方洪庵の兩氏に大事件あり至急相談致したしと記載したり兩氏大に驚き卽夜淀川夜船にて上京しければ日野氏は二客を閑室に引て云はるゝに特に兩君を呼寄せたるは他事にあらず實は從來希望する所の種痘苗の儀なりとて笠原氏の長崎行を話し就ては此歸途必ず立寄ることを約束し置きたれば其際是非分苗を依頼せんが爲めなりと兩氏大に悅び我輩の希望を遂ぐるは近きに在りとて種々相談の上何分京都は王城の地なれば人體に接種することは畏れ多く且つ其筋の許さぬ所ならん故に大阪にて接種續苗の用意肝要なれば兩君は豫め其準備を成し置き笠原歸京の節は急使を以て報ずべければ直に上京せられよとの手筈を定めて兩氏は歸阪し直に其準備に取り掛れり

牛痘苗輸入の事は幕府の許可既に春嶽侯に下りたるも無屆にて種痘し後に奉行所より面倒なる事起りては頗る難儀なりとて緒方氏の懇意なる當時派利キの天滿與力荻野七左衞門氏に相談に及びければ同氏も喜悅し拙者も大贊成なれば公邊の事に就ては可成的盡力致す可しと安心なる返答なり又小兒招集に就ては頗る困難にして當時日野・緒方兩氏は人望ある大家なるも始めて牛の痘瘡を種うる事なれば宛も愛兒を犧牲に供するが如く思ひて容易に承諾することなく漸く親戚朋友及び出入の者を諭して今や遲しと笠原氏の歸京を待ち受けたり

笠原良策氏は多數の時日を經て遙に長崎の頴川氏を訪ひ春嶽侯の依囑書を長崎奉行に提出して痘

苗輸入の斡旋を依頼したり其頃和蘭船は毎年二隻渡來の條約にして此時折惡敷く來り居らず且つ唐船も亦た既に去て其再來は帆船なれば期し難く去來常に多數の日子を要することなれば遂に一月餘も滯在して待ち受けたりしが潁川氏は氣の毒に思ひ拙者に委托せらるれば必ず痘苗を手に入れ京都大阪へは幸便多ければ確乎なる人物に托して京都日野氏へ送附すべきに由り徒に日月を消費せらるゝも無用の事ならんと歸國勸告に從ひ空く歸京し日野氏に謝して歸國したり日野氏は待ちに待ちたる甲斐もなく限りなき失望を以て早速大阪へ通知し鶴首して唯々長崎の通信を待つのみなり

其後數月を經て長崎潁川氏より或人に托して痘苗入の小包京都日野氏方に到著したり

痂皮一瓶八顆に一書を添ふ其書に云蘭醫門尼幾苗を度す效あり既に數兒に試む其驗皆法の如し此苗は家孫に接して得る所のもの其未だ乾收せざるに乘じ之を剝して以て贈る其必效を保し且つ越に傳ふるに便すと崎の京を去る二百四十里にして遠し十日にして至る速かなりと云べし是れ實に嘉永二己酉秋九月十六日なり（白神除痘辨略）

是に於て同氏の喜悅限り無く早速越前に急使を發して痘苗著を報じ且つ上京を促す又大阪へは豫約の實行近接する旨を通じて笠原氏を待つこと一日千秋の思なり笠原氏は急報に接するや豫ねて期したる事なれば即日出發晝夜兼行數日にして著京しければ日野氏其成功を祝して厚く之を饗應し一面急飛脚を馳せて大阪に通知したり

大阪日野・緒方兩氏は宛も大旱の雲霓を望むが如く待ち焦れたる急使に接したれば天へも上る心地にて即時に京都迄籃輿を飛し偶然相會したるものゝ如くし談次分苗依頼に及びたるに笠原氏頭を振りて承知せず先般君命を奉じて遙々長崎に下りて今日漸く手に入りたる痘苗を未だ復命もせず途中に於て勝手の處置致しては或は切腹致さねばならぬも計り難し是れは師命と雖ども遺憾ながら御斷り申上る然しながら一應歸國復命の上にて分苗するならば實に易々たる事と存ずるとて毫も承諾の色なければ一坐互に顏見合せ失望の體なりしが日野鼎哉氏重ねて云はるゝに其儀一應尤もなれども是れ其一を知て其二を知らずと云ふものなり如何となれば余の聞く所に依れば痘苗は其經過時日餘り久しきに過ぐれば或は沈痼して其效力を減退せしめ或は腐敗して用に適せずと云ふことなれば其許今より歸國して復命の上緩々用意する間に益々日數を經て或は無效に終ることなしとも限らず夫れ故に今茲に其一半を分ち一日も早く兒體に種接ぎ置かば萬一其歸國の後其效力を失ふことあるも當方の新鮮苗を貴國に送るは實に容易の事なり然らざれば若し全部無效に終らば再び海外より之を取寄せねばならぬ是れ頗る難事ならずやと笠原氏手を拍て大に悟る所あり直に之を快諾したり是に於て大阪日野・緒方兩氏は其半を持ち歸り豫て準備したる古手町大和屋傳兵衛宅の離れ坐敷に於て始めて之を兒體に接種したり是れ即ち本邦種痘館の嚆矢にして大阪

種痘の濫觴なり

前文の如く分苗を得たること及び大阪に於て始めて兒體に接種したることは嘉永二年九月十六日痘苗到著後數日の出來事なるも記錄書なければ日附不明となれり安政五年四月二日奉行所への除痘館答辯書に笠原良策嘉永二年十一月七日態々當地へ罷り下り分苗致し呉れ候とあるを見れば公然世に發表したるは即ち同年十一月七日なり故に此日を以て開館日とし毎年祝宴を開き明治六年迄持續したり左に除痘館答辯書を掲げて參看に供す

乍恐口上

先月二十七日種痘御觸渡之儀御訴訟奉申上候處今日御召之上右始末御尋に付左に奉申上候

一痘苗傳來之儀は去る嘉永酉年蘭人持渡に相成候事にて其以前松平越前守御願立被成唐土え御註文に相成候内右之蘭人持渡り候に付右御用掛長崎唐通詞穎川四郎左衞門より其痘苗を越前守樣へ差上度京都日野鼎哉方迄差送り候儀に御座候右は越前守樣御手醫師笠原良策と申もの右鼎哉門人に有之鼎哉は又穎川四郎左衞門に豫て入魂に有之候故之手續に御座候

右鼎哉方へ右良策呼寄京都にて種試み仕候趣承及候て緒方洪庵・日野葛民兩人申合罷登り良策に痘苗乞請度旨申入候處未御國表へ不持越事に候得ば大切之痘苗に有之候事故萬一絶苗に相成候時之御用意之爲に此方より可相願旨被申聞同年十一月七日右良策改て態々當地へ罷り下り分苗致し呉候儀に御座候將又此度御願奉申上候種痘所壹ヶ所に仕市中有志之醫師集會爲仕度奉存候儀は勿論漢方西洋方之差別なく唯仁術之志有之醫師は無心置小兒召連出席仕候樣いたし度存意に御座候尤も仁術を主と仕候事故謝物等貪り候儀は毛頭無之困窮之ものともに施物遣し候ても種痘致し遣し度念慮に御座候

安政五午年四月二日

御奉行樣

堂島新地中三丁目
播磨屋二三郎借家
醫師　山田金江㊞

白神除痘辨略中の種痘濫觴と實際相違之辨

敍上の如く痘苗到著は嘉永二年己酉秋九月十六日にして僅々數日の後笠原氏君命を奉じて痘苗受領の爲め上京の時祕密に分苗せられ而して其分苗を公然發表せられたるは十一月七日にして笠原氏續痘苗御用意の爲め再び君命を奉じて上阪したる時なり白神除痘辨略には笠原良策君命を奉じて越より來る此時穎川氏の苗已に數十兒に開花すとあり惟うに其實に反するが如し蓋し日野氏は笠原氏の面目を保たんが爲め其祕密の分苗事實を記すること能はざるなり如何となれば該苗は春

嶽侯より江府の疏崎鎭の嚫ありて笠原氏其使命を奉じ之が爲に穎川氏より侯に獻上せし所のものにして決して日野氏に私贈したるものに非ず然るに笠原氏の上京を待たずして猥りに之を消耗すること縱令師弟の間と雖ども之れあらざればなり

乃ち知る良策は穎川四郎左衞門の言に從ひ詮方なく一度嶺に歸國したるも嘉永二年十一月初め日野鼎哉より著苗の報に接し折柄の深雪を冒して京都に到り日野鼎哉を介して痘苗を携へ歸りたるを而も歸藩の當日良策自ら豫め購ひたる自宅の隣家に於て直ちに之を小兒に接種したり是れ福井藩に於ける種痘の嚆矢にして又前述の種痘所たりし者なり其京都より歸國の際には醍醐殿下より殊に懷紙一枚と五節扇子五握を賜りたる豈に故なしとせんや翌三年に至りては藩廳に於ても益〻種痘の普及を奬勵し愛軒石原甚十郎を擧げて種痘係とす（第四章・夢物語を揭ぐるに就て石原愛軒を說き及び其橋本景岳との交態を敍す參照）則ち更めて同六年十月下江戸町服部某の屋敷を以て除痘館と爲し一般士民に之を施行するに至りき爾後府中・敦賀・鯖江・大野・勝山・丸岡・金津・三國等を初めとし隣國大聖寺藩・金澤藩其他の諸藩よりも當該藩名を以て分苗或は傳苗を請求し來りしかば方規を嚴格にして是等を承諾する所となれり然れども此分苗及び傳苗に關しては四方誹謗の聲囂しく良策をして孤立して四面楚歌の中に干戈を揮ふの思ひあらしむ一日江戸に在りし半井仲庵に贈るの詩は其消息を知るに足れり

獨守孤城揮干戈　時々四面揚楚歌　官軍已去三千里　只有上天雁字過

余は斷言す當時良策が此擧たるや風雲を震撼して乾坤を一堵する底の事業なりと揚言して憚らざるを蓋し吾人岐黃の道に盡す者の天職として其右に出づる者他に多く是有らざればなり左中將藤原忠順及び正三位有功が良策に與へたる國風も亦之を證して餘蘊なしと謂つべし

こたひ白神痘てふ事を得て世にしき千萬の人のうれたき事をのそかむわさのかしこきを賀して

左中將　藤原　忠順

日の本にあなかしこくもしきそめしいさをやよゝの寶なるらん

笠原良策かこたひのよろこひの歌とてよめる

正三位　有　功

八千矛の神によしあるこしの人にまもりますらしくすりしの道

序に記す白神痘の語源は羅甸語のパクシーネの當字にして種痘を行ふの初め上つ方に於ては牛痘の牛字を忌みたるに由る

顧みるに嘉永二年には一面に於ては醫方醫界の厄年とも稱すべき時代にして所謂當時の漢方家と洋方家との競爭軋轢は頗る激烈にして其結果幕府の醫官より閣老阿部伊勢守に强請して左の布達を發せしむるに至りき

布　達

近來蘭學醫師追々相增し世上にても信用致候もの多く有之哉に相聞候右者風土も違ひ候事に付き御醫師中蘭方相用候義御制禁被仰出候旨其意堅く可相守候

但し外科眼科等外治相用候分は蘭方參用致候ても不苦候

己酉三月十五日　　阿部伊勢守

又

近來西洋學盛に相成世上新奇を好み蘭學好之輩深く其學術研究爲さるもの迄蘭書を取扱俗を驚す積りも有之由相聞畢竟元來蘭書和解之儀者恣に相成候に付き右樣之義有之如何之事に付き元來蘭語之儀者飜譯に依り其事柄を解し得る事右樣如何之飜譯致し若し一途に其說をのみ信じ候なる心得違之者有之候得者向後如何なる弊を生じ間敷とも難申其上醫書にても同樣之儀に候依之以來持渡りし蘭書不殘書銘長崎奉行所へ書出させ奉行所より免許之分者世上に流布致し不苦候旨申渡候間向後右書上殘にて蘭書を取扱候か又は私に飜譯致候者有之に於ては其書を取上げ當時急度可及吟味候に付て者萬石以上の面々海岸守衞心得之爲め蘭書飜譯爲致候向も有之哉に付右之書銘相認一應老中へ屆出飜譯出來之上者一部天文方役所へ可差出候

幕府に於ける此方針は獨り越藩福井に於てのみならず他藩にも影響を及ぼし遂に西洋醫家の一頓挫を來すの傾向を有せり然れども我福井藩に於ては更に是等に意を介する所なく盛に蘭方醫學を研究して之を採用したるのみならず漸次西洋化するの色彩を帶ぶるに至れり

除痘館の濟世館へ合併したるは安政二年正月にして是より藩廳直轄の面目大に加はるに至る而して種痘は初めより與料たるのみならず冬期の如きは痘苗維持の爲め其痘母の選に當る者には手當料を附與せられ痘苗を製して之を他に輸送するの他は悉く人より人に傳殖するの方法を講じ四季間斷なく施行したると共に館內に於ては殊に荒子一人を使役したり右合併の眞相及び藥園の存在せる實況は左に據つて知るを得べし

一安政二年卯正月九日除痘館の件此の度醫學所へ御附屬仰せ付られ候旨御聞番本多修理殿月番加藤道庵へ御書付を以て申し渡さる同二十三日除痘館引渡相濟む然る所舊來の醫學所は隘さに付此度夫れ〳〵示談の上講堂東の方へ四間に九間臺所共夫れ〳〵一間斗建出しこれある外に五間に二間半の長屋新規出來其の他廊下所々雪隱二ヶ所右同斷但し以來館內破損の節は此の度御建足し竝に新規出來の分は上より修繕これある筈其の外舊來醫學所の分も疊建具斗は上より御修覆成し下さる筈に相極む右御普進三月下旬出來

一右に付き是迄醫學所在來の藥園相潰れ候に付き右代地御泉水屋敷內に於て西北の隅東西十三間斗り南北七間斗りの地拜借仰せ渡さる

一同年五月是まで醫學所定渡人幸助儀以來除痘館御用同所人兼務致すべき旨申し渡し候樣長谷部

甚平申し來たる最も月に晝飯十づゝ被下由

當時醫學所に於て教授に當る者は時の先輩之に任じ二・六・八の日を以て講義を行ひ其科目の主なるものは傷寒論・金匱・瘟疫論・本草綱目等漢方醫學に加へて和蘭醫學としては解剖・生理・病理學等なるも未だ原書・飜譯書共に甚だ乏しく孰れも謄寫の苦を嘗めたり又稽習日と稱して治療法策問を行ふ而して其の教員には藩醫は勿論町醫にも相當の手當料を給したりと雖ども多くは名譽職の體なりき更に藩士にして歐學志願者は皆來りて茲に醫籍外の書を讀む者亦甚だ多く其の勢ひ侮るべからざるものありき

安政二乙卯年六月には明道館を創設して醫師の弟子をして先づ是に學ばしむ

明道館之記

明道者明此道也凡天下之事物莫不各有當行之理所謂道也若夫父子之親君臣之義則是也善道者雖人性固有不待外求自其非生知之資苟學而不明之氣稟所拘勿欲爲蔽而不能由於夫當行之理也恭惟上古

神聖建極垂統

列聖繼明以照四方道之明亦無以尚而又資文教於漢土以贊我

神武於是此道愈明

皇化遍敷黎庶時雍四夷賓服所以實祚與天地無窮者豈偶然哉中世以降此道漸衰異端乘其間

皇化不振禍亂相踵矣而我

東照宮天縱英武又明斯道以弘濟屯難內尊

皇室外攘夷狄遂置天下於泰山之安

百有餘年于此不亦烈哉吾祖淨光公親其胃而而雄武之資以佐基業受封此土也藩屏于

國家然治平之久夙移安逸俗趨功利

予嗣守祖先之遺緒恒懼不堪其任而況於方今有洋警之急豈當不慨然盡力矣故今設此館與士太夫講明此道推以及衆庶文武相資政教致倫理整正上下誠　幾塞藩籬萬一之責報

國家無窮之恩以不整

祖宗之業云爾

安政二年乙卯月日　　源中將　慶　永　記

註　右は橋本左內或は前田藩儒の筆にせしものならんか

既にして安政三年に至りては嘉永二年蘭方醫家の制裁を受けたる者漸次解除さるゝの機運に至りしかば洋學教授として先づ江戸の坪井信良を藩に召抱ひ同四丁巳年には市川齋宮を聘し宮永欽哉は兼て京阪に出でゝ新宮・緒方・杉田・箕作等を歷訪して專ら蘭學を修め歸藩直ちに醫書の他砲術・練兵・航海術等の原書を飜譯するところあると共に同年二月二十七日本多修理より御醫師へ對して左の布達め

り

醫道の儀は專ら仁愛を旨とし廣く及講習學術厚修行可致事勿論に候處後來家業の事故修行邊の事も自己了簡に爲相任被置候に付近來區々等閑の姿に相成家傳家學に事寄せ少壯の面々迄も修行體に怠り候樣も相聞候に付已に舊冬も被仰出有之事に候得共尙又厚く和漢の醫制御穿鑿の上別紙の通可致修行旨仰出候依之以來死後達の節跡目の者竝に代替相願候節忰共醫業の階級文學の差等別紙の趣を以て遂一可被御達候萬一心得違ひの樣有之學術共不宜候節は昨年被仰出候跡目の者格祿御降減可被仰付候條左樣相心得旨被仰出候

別紙

一子弟八歲に相成候はゞ明道館へ入學爲致學問修行可爲致事

一子弟十三歲より濟世館へ差出醫學研究可爲致事

一小學・四書・五經・素讀達者に相成傷寒論・金匱要略・醫範提綱・解體新書素讀相濟候者繭生と名けゝ之を初級と致候事

一素問・靈樞・難經・千金方・同翼方・外臺秘要方・瘟疫論・外科正宗・竝內科撰要・熱病論・病因精義・醫療正始・三方和蘭藥鏡・遠西名物考・病學通論等習讀相濟み傷寒論・金匱要略・醫範提綱等辨講辨疑致候者之を進業生と唱候事

一進業生に相成候上年々差出候治按宜敷三歲相續き甲科に當るもの之を成業生と致候事

但進業生に相成候上原書學心懸翻譯・授讀等出來候者は治業の甲乙に不拘成業生に相成候事

一成業生に相成候上心懸宜敷て學問治術共愈相進由相聞候者は之を得業生と名付夫々重き醫官にも御使被成候事

一每月稽症會へ相詰醫學所へ集會致し醫業案病症細密に相認差出し相互に處方相定候て教授役に論談を乞候事

右稽症會の節逐一甲乙を記し置き歲末に至り年中の甲乙を寄せ算定の上銘々殿最相定其趣可申候事

一每年歲末奧醫師以下町在々の醫者に至迄年中療治致候病人の姓名竝に大症劇甚の治療按其の病の經過發生の次第逐一明白に相認め月番御匙醫師へ差出申可事

右病狀記月番御匙醫師受取候上其餘の御匙醫師共一統醫學會へ集合甲乙殿最を論判し其趣詳く可申達事

右之通御醫師へ可被申渡候

蓋し幕府の震駭察するに餘りあり果せる哉安政五年七月に及び幕府は遂に迷夢を曉り久世大和守をして凡そ醫師たる者は一般に蘭方をも兼修せしめんと欲し左の布達を發するに至れり

一和蘭醫術の義先年被仰出候趣も有之候得共當時萬國の長たる所を御採用被遊候折柄に付奥醫師中にも和蘭醫術兼學致候て不苦候事

安政五年七月三日　　久世大和守

乃ち福井藩に於ける醫制の大變革は苟も醫師の子弟たらん者は八歳に至れば明新館に入學を命ぜられ十三歳以上に至れば濟世館に入つて醫學に從事せしめらるゝに至りぬ又生徒階級には得業生・成業生・進業生・繭生の等別を分ちたること右の如し

而して經國の大才景岳橋本左内も亦出でゝ京阪及び江戸・佐倉・長崎等に醫學を修めたるも永く醫籍に留まるを惜まれ（第五章・夢物語の後に附記して更に醫人としての橋本左内を傳ふ參照）春嶽侯之を擢でゝ藩政に參與せしめ文武の道を擴張すると共に醫學進歩の基礎を闢くに當つて其功績尠少ならず降つて萬延元年に至り長崎に養生所を設けて醫術直傳習の事あるや福井藩よりは學館生純岩佐又玄・弘田代萬隆・淺野恭齋・益田宗三等藩主の命を受けて之に赴き大に研學する所あり實に蘭醫ポンペ Pompe 聘用時代に屬す此年彼の人體紙型キュンストレーキを購入す是れ蓋し當時舶載三箇の一にして時價八百兩を以て藩廳に購ひたるもの現今猶ほ濟世館に之を藏す次で魚住格・吉田貞庵等も亦藩命を以て長崎に赴き獨醫シーボルト Siebold に就きて虎列拉其他を研究する所あり萬延二年即ち文久改元十一月十三日には男女兩體の解剖を行ひ其男體は町醫師に下賜の恩命あり是れ町醫たる者に對して公に和蘭解剖を行はしめし嚆矢とす慶應元年に至りては橋本綱維・綱常・高桑實外二三名の學生をして長崎に赴かしむ時宛も蘭醫ボードイン Bauduin 聘用時代に屬す同二年には更に義軒有賀琢二外五六名を長崎に送りて前修學生と替らしめ以て明治維新に至る是より先き慶應三年には岩佐純始めて濱町に治療所を新築して一般の治療に從事す是れ福井に於ける病院の萌芽たり而して舊藩當時市内の醫師は藩醫・町醫各三十名餘にして郡部醫師は總て當時の御匙醫の總括に洩れず毎年幾許の金圓を納附せしめ以て濟世學館費の幾分を負擔せしめたり

要するに文化元年より天保の末年に至る四十年間は漢方醫學の隆盛と和蘭醫學勃興の兆潛める者にして醫校新設の爲に苦心され淺野・勝澤・妻木の徒其の中心人物たり是より安政三年に至る十四年間は旺んに洋方醫學を鼓吹擴張して半井・大岩・笠原の輩堅忍不拔の精神を以て事に盡したるものと謂ふべし

宜なる哉明治元年戊辰奥羽の役には藩醫・町醫擧げて軍に從ひ負傷者の治療に就ては福井藩醫は全國諸藩に比して嶄然一頭地を抜くの名譽を博したる豈故なしとせんや此間醫學所教授には宮木典常之を擔當し同二年五月醫學所は藩の學校管轄に屬し從來濟世館に總括せる任務は茲に全く解除さるゝに至る

明治二己巳年三月には明道館（安政二年六月創立）を改めて明新館と稱するの議あり同三年二月には

醫學所たる濟世館を初め病院種痘所等を共に西本願寺別院内に移したりしが終に五月二十二日明新館と稱して醫學所を城内明新館に合併す實に今の福井中學校の存在する敷地にして又同校の前身たり

明新館記

從二位行權中納言源朝臣慶永撰

明治二年己巳三月余以二母病一歸二省於越一偶聞營二黌舍於城内一名以明新。甚喜焉雖レ未レ知二其所一以名一請試言レ之夫明新之爲レ義也大矣大學曰明二明德一新レ民明德體也新レ民用也體立用行則萬化自レ此出矣方今遭二皇室隆盛之運一余叨沐二聖恩一汚二重職一日夜欲レ注二心於此一舉レ賢用レ才沐二聖天子新レ民之治化一然取舍失レ宜其不レ如レ意者頗多矣因念レ欲レ新二斯民一先在二乎明二德德明則體立體立則用行而賢才自舉矣以レ是治レ之以レ是撫レ之以レ是教レ之以レ是養レ之天下嚮レ化萬民自新明新之爲レ義豈不大矣哉此其所二以名一豈徒然群下其勉レ旃

別院内の病院は專ら當時貧民救助を主とし副へて一般患者の診察を容れたり醫學所教頭は半井保にして病院長は橋本綱維なり病院の萌芽は前に敍したるが如く岩佐純の濱町に經營せし私宅診療所に基けるものなるも純は公務の爲め他出して其志を達するを得ず幾ど存在を認めざるの觀ありき而して明治三年の秋季には郡部に輕度の腸窒扶斯とも稱すべき流行病を發生したるを以て橋本綱維二三の醫員を派出し次て藩廳は該醫員の希望を容れ一の收容所を設け之を養病院と名け市の内外の貧困患者を收容して藥餌を施すの機關とせり漸くにして醫校及病院の必要を自覺したるを以て之が擴張を圖り歐醫招聘は從來庸聘の語學及理化學教師と同樣たらん事を請願すること一再ならず一方に於ては一時の趨勢たる醫師の自宅診療を禁止し同時に病院は其支院を設けて玆に醫師の勤務するの制を布けり即ち支院たりしは橋南には孝顯寺一ヶ所を置き橋北には三部に分ち西部院を成覺寺に東部院を鎭德寺に南部院を蘆田十郎表屋敷に置きぬ四年廢藩して足羽縣となるに際し病院は西別院を出て丶藩主より改めて受領せる士族屋敷に移ることゝなりぬ即ち初めは蘆田屋敷の跡に次ぎには外記樣町酒井屋敷跡に轉じ各支院は漸次獨立するに運びしも永續する能はずして終に是等の支院は閉院するに至り新に福井病院を置き高桑實院長たり而して當時は何れの方面に於ても會社組織の流行したることゝて醫校病院も亦此風に襲はるゝの奇觀を呈したるも五年二月には現今縣立せる佐佳枝上町の福井病院裏東の方民政局の跡へ移轉し維持費として藩主より下附の資金及び郡村醫師或は賣藥家より徵收する金員を以て之に充て八年八月に至る却て就く六年二月には足羽縣を廢して敦賀縣に併せられたり其八年九月敦賀縣に於て公立學校と改稱し縣令を以て醫師全部の試驗を受けしめ醫師免許・醫術從前通り等の證書を授與し多少の淘汰を行ひたり次て十月敦賀縣を廢して石川縣と成るに及び指令して公立學校に病院を合併し十年四月醫學校・病院等の經費は總て縣稅より資出するに至り校長兼病院長として馬島健吉の赴任するに及び其建築に著手し翌十一月竣工して醫校教場及醫局を樓上に充て診察室及び病室を樓下に設

くるとゝなしぬ當時各郡には醫務取締を置きて醫事衞生に參與せしめたり同十二年に於ては縣下一圓虎列拉の猖獗を極めたるを以て適宜各處に避病院を假設したるも施政の方針變更して醫學校は乙種と成るに至り幾許を經ずして廢絶するの運命に陷れり然れども同十三年には濟世會を組織し同業者の學術研究を行ひたり時に春嶽侯には深く前人の功績と勞苦を記念せんが爲め岩佐純・橋本綱常・半井保等に與へて醫事沿革及び後學の肝銘すべき所を敎ふる者あり亦以て箴と爲すべし

余熟思するに自往昔醫學術の盛に行はるゝや舊藩の右に出づるものあるまじと想像せり第一幕府を始大抵專宋代以來の後世を主張して其法を尊敬し漢代の古法を頻に嫌忌し傷寒論をも手に把る事を欲せざるなり舊藩醫はこれに反對して單純なる古法を用ゐるなり第二未開化の時世に當り醫員小山谷に來集し斬刑に處せらるゝ人體を腑分けす即今の解剖なり素り疎漏拙劣にもせよ此擧行あるや滿足すべき楷梯進步の始めにして他國の及ばざるべきを信用せり

舊藩醫の漸々進步するの原因たるや元來藩習として他國に留學するを欲せず偶ゝ其心志ある者他に抑遏せられて不果者多し慨すべき事ならずや然るに岩佐國手の亡父壽安翁橋本國手の亡父春藏（後彥也）其慣習を看破し顧慮せずして紀州華岡隨賢に從ひて門生となり外科を修行す匡輔氏の祖父山本正伯翁は眼科を土生氏に學び妻木敬齋翁は本草學を修むこれよりして藩醫陸續西京に遊學するもの多しこれ實に感佩すべきの事にして藩醫が他人と知識を交換するの權與なるべし

聞く處に依れば於福井醫學所を建設するや淺野嵩山翁參政に建言し經許可創立せり文化年間治好君の代なり此館を名けて濟世とす我實家大伯父樂翁侯の揮毫せし濟世の扁額を揭ぐ天保年間醫員の請求に應じ垣一方の三字の扁額を授與す該館の概況を玆に記載す

聞く處に據れば天保八酉年頃笠原白翁先生醫術は古法を廢し阿蘭陀の學術を學ぶに若くはなしと新に發明したるよし依之京都小石氏等の弟子となり嘉永年間牛痘の事に就て日夜勉勵刻苦盡力桑田氏等に就て質問研究し於福井の種痘の行はるゝや白翁の先鞭たり

半井南陽翁は予が師友と仰ぐ人なり白翁と懇に切に蘭字學術を擴張するを日夜協議し奮發勉强竭心盡力醫員進步するを熱望す或はキニーネ一罎を高價にて買上るを請ひ或はヒューヘランドの原本を熱望し中根雪江に甚しく迫る雪江其志を嘉し予に請ふて一本を授付す翁欣喜歡躍の至りに堪へず此事を回想すれば翁の容姿眼前に現はるゝなり翁等建言し岩佐國手を始め醫員を長崎に派遣しポンペに就て學ばしむ其後橋本景岳・師友及綱維先生等大に奬勵し藩醫の學術に進むや最可驚開明に至れり是南陽翁と景岳親友等の功勞と白翁の苦辛豈淺ならんや此恩光を消滅せずして後世に醫員にまで輝かさん事を予は常に翹望するなり南陽翁の日夜心を醫術に注ぐや誰も及ばざる所なり翁知命を超へて長崎に到り蘭翁に學ぶ事數月これを以て翁の深厚なる心志を推知すべし

前記の如く諸先生の日夜盡心勉勵の積勞と功績によりて岩佐・橋本等の傑出なる者を生じ其他藩

より醫員明治十三年の今日にまで進歩して開業するもの多し此醫術醫學ばかりは他邦に讓らずして實に歡喜の至に堪へざるなり

濟世の二字は最大の貴重にして人間缺くべからざるの需要の具たり需用中最要用なるものは以醫第一とす今般岩佐・橋本及半井等大に奮發し盡心力該京阪福井に於いて舊藩醫と結合し一社會を創立し濟世會と名づけ互に智識を交換し昔日諸先生の遺志を繼ぎ彼等の功績と勞苦の名譽を永世に輝し消滅せざるの方法を設くと云ふ慶永常に熱望する所の本意を今日に暢達する事を得て欣然に堪へざるなり創立はやすく守成はかたし益勉勵刻苦し飽まで永世に保續するの確乎たる志を遂ぐるの膽力を强固にし半途にして止む等のことなく開明の進路に昇るべきを望むのみならず昔日諸先生の恩光後にまで輝きて其功勞を消盡せず加之岩佐・橋本及半井先生不容易該盡力を水泡に屬せざるは醫員の要務なり予もとより醫學術を知らず然れども玆に一言の婆情を述ぶ釋迦に說法の譬喩に似たりと冷笑するものあるべし醫の要たるや思無邪と精義入神の二語は實に服膺せざるべからず又云ふ醫は政府に似たり人生の一命を死活するの貴重なるものにして患者を療するや最懇親の情なくんばあらず又云ふ何の事業にもせよ意志固我の四字を解除するを勉め驕傲の心一たび起れば人望を失ふのみならず實に醫術にても降下するや無疑蓋棺蔵まで修業心の怠るなく勉强して止まざる者は朝日の昇るが如し又云ふ皮相の事を止め眞に互に懇切親睦の情を以て互に忠告し互に知識を交換し互に相贊助して研究するを何よりの快樂と思ふ事肝要なり假令知識を交換するも會社を結構するとも互に嫌忌する等の情毫も心に發するならば瓦解は在眼前此婆言は國手又現今の醫員に向てこれを吐露するにあらず後進の徒に向て聊か鄙衷を陳するなり玆に此舉を喜奬する記念として庸愚の文を呈す意有餘辭拙に請毫恕せよ　敬具

明治十三年四月六日第二火曜　　正二位　松平慶永

岩佐・橋本・半井先生大人足下

明治十七年に至りては更に保健會を創立し主として衞生事項を唱導攻究せり時宛も內務省より衞生局長の始めて來縣するあり大に此舉を贊し益々發展したるも同十九年には保健會の事業は擧げて濟世會に讓る事となりて其終りを告げ濟世會は幻燈を應用して通俗衞生演說等を行ひて衞生思想の普及を圖れり同二十年四月には新に學館を寶永上町五十番地の二三に建設し之を濟世學舍と名け舍員は當時官廳施政の下に要する醫師組合の成立を容易ならしめ兼て衞生會の創立を扶掖したり而して同二十一年十一月二十九日には大日本私立衞生會支會たるの承認を會頭に提出して其許可を受け會頭には時の長官を以て之に任じ次で郡部には便宜三四の分會を起しぬ同二十三年開催の福井醫學會は大岩主一が弟圓に口授せる蘭方醫學採用當時の舊記を上梓して之を會員に頒布したり蓋し好資料たるを失はず

天保三四年其頃福井に於て半井仲庵・橋本彥也・笠原良策・宮永良旦・山本宗平の五氏にて月に六回

の醫學會あり主一之に入會す尤も漢方醫學研究なり其頃蘭方は漢方よりも遙かに勝りたる事を右會員へ相話すに半井・笠原の兩氏は豫て信仰の事故頻に蘭學修業致度き旨に付き左候はば主一の師家に紹介致すべく旨申談す兩氏意に隨ひ則小石・日野の兩家へ入門の手續を成し專ら蘭學を修行す且つ大患難症の節は容體書を以て小石・日野兩氏に相談を遂ぐる事あり其際半井・笠原兩氏主一義何分福井に於て開業致すべしと頻に相勸められ其意に隨ひ開業したれども半季計りは治療を請ふものは一人も無之只半井・笠原兩氏の相談のみせり其節蘭方の器械にてはスポイト・リンダメ・ニウハチ抔は未だ聞き及び候人無之藥品にてはアヘン・キナエン・セメンシイナ等も見聞候人迚は一人も無之蘭藥竝に器械等望みの節は京都井筒屋忠兵衞と申す者より外にては相整ひ申さず書類も板本の譯書最も稀なり蘭方樞機などいふ三冊の小冊子すら手に入るに苦しむ程にて多くは寫本のみ飜譯有之時は互に寫取り相傳ふ主一四十歳の頃(弘化三四年)扶氏經驗遺訓飜譯出來たりとて小石氏より初卷一冊相廻り主一朝夕三拜九拜讀書致し其後五六年にして相揃ひ申候右遺訓出來候までは蘭醫と申しながらも治療方は銘名隨意に施行致し來り候所右書出來の後は治療方一樣に相成り候將亦譯書のみにては眞の味は取れ申さず此上は原書修行致し度き志望にて四十七歳にして江戸表へ罷り越し杉田・坪井・市川等の三家へ通學專ら修行致し其頃ズウフと申す字引無之ては修行差支もこれあるに付き右三家に依賴候へども賣買には無之に付き無據三家の書生に依賴し寫させ候所漸く二ヶ年にして出來致し候事右は嘉永年代の事にて是より以後は洋學月に歲に開け云々

更に同年十月二十五・六の兩日開會せる第一回福井縣醫學會の席上高桑實の口演せる醫事沿革一班は文化より明治維新に至る福井藩醫事を概說せるもの聊か前者と重複の嫌あるも取つて以て之を錄すべし

舊記に依れば解剖の如きも古くより行はれ既に文化二年十一月には死刑に處せられたる男子一名の解剖を試みたることありて當時之を腑分けと云ふ次ぎは文政十一年九月男女兩體を解剖し天保十年十月には男子一名を解剖したさて文化年度に於て行はれたる解剖の標準は何れの書に據れるかといふに恐くは解體新書之れが標本を爲したものと想ふ此の解體新書は蘭語にてターフル・アナトミーと稱し普魯士の醫學士キュルムス氏の著述和蘭學士チタテン氏の飜譯せるものにて初め和蘭通詞某之を渡來し杉田玄伯・前野蘭化・中川淳庵等の蘭學者の手に由つて安永三年中上木せるもの日本に於て原書飜譯の嚆矢として就中貴重の醫寶たるのみならず當時の解剖は皆之れに則つて施行されたものである文化元年より天保十三年頃までは福井藩にあつては漸々漢文醫學の旺盛を極むる中に於て僅かに西洋醫學の萠芽を發生すべき第一期で此の年間は凡そ三十六年天保九年には春嶽侯福井藩の養嗣となられ同十三年には領内の海岸防禦の爲めに兵士を增置し外寇の警備

を嚴重にさるゝ等春嶽侯に於てもおのづから西洋の事情を承知あるべき機會に進み來つた當時江戸に於ては蘭學大いに開け醫師に於ては宇田川榕庵・杉田成卿・坪井信道・大槻玄澤・箕作阮甫の大家・大阪にては緒方洪庵京都にては小石元瑞・新宮涼庭佐倉には佐藤泰然等蘭方醫學を唱へて西洋醫學の勢力を振つた時節である福井に於ては天保年代より弘化年代の始めには半井保・大岩主一・笠原良策・宮永欽哉等勉めて飜譯書を調ぶる時期に遭遇し宮永欽哉は弘化二年京都の新宮涼庭に就て蘭方醫術を受くべく上京の途に就き後ち嘉永二年大阪緒方の門に入りて原書の研究に從事するに至つた其の頃の洋書として上木せるものは醫範提綱・解體新書・內科撰要・和蘭藥鏡・遠西醫方名物考の數種に出でずして他は大約寫本を傳へたものである

同二十四年九月に至り大日本私立衞生會分會は本會直轄の下に支會となりたるを以て福井市は孤立したり依て同三十三年會議の結果福井市私立衞生會を設け會員九百七十五名に達し其四月八日發會式を擧げ大に發展せんと欲するの域に達したるも次て橋南橋北の大火災に坐して以來公衆衞生の事業は完からざるに至れり却て說く縣立病院に保管せる舊醫學校の書籍器具にして舊藩時代より濟世館に附屬したるもの甚だ多し依て其筋の公認を經て三十六年度に濟世學舍に領收せるものは和蘭字彙外百八十點・紙型人體・醫療器械數十點なり此學舍は同三十二年七月付を以て出願せる定款內務大臣より九月十六日を以て認可され法人登記公告中存在期限は大正八年九月二十一日なり而して濟世學舍として今日まで引續き擧行したる事業は定日の經驗醫談・本館建築・福井縣衞生法規刊行・種痘施行・病體解剖・施療券發行・飲料水檢査・衞生演說・春嶽侯頌德碑建立・痘苗製造・看護學指針刊行等にして現今に於ては產婆及び看護婦養成を以て僅に歷史の片影を留むるこそうたてけれ顧うに濟世學舍の前身は明治十三年に成立せる濟世會にして濟世會の前身は文化二年に創立せる濟世館に基因するものと謂ふべし

之を要するに越藩福井の醫學が當時の諸藩に卓越し明治大正に於ける昭代の醫史を闡くべき端緒たりし所以のものは文化元年の十三代藩主治好公に萌芽を兆し次で天保九年の十六代藩主春嶽侯の之を提撕奬勵し併せて我が史中の諸先哲が能く公侯の意を奉じ一身を擲ちて內は醫黌の創設に盡瘁し外は薄資を以て近くは京都に出で大阪に行き江戸に赴き佐倉に遊び或は遠く笈を負ふて崎陽に臻り研鑽怠らず殆んど身を以て學藝に殉じたる堅忍の志行に因りて胚胎したるものと斷定せざるべからず

謂へらく當時尊王攘夷の論天下に囂々として苟も志有るの士は皆な劒を扼して起たんことを睇へり而して春嶽侯の如きは身大樹の姻親に繫り如も排幕の强藩に應酬し旋乾轉坤の際に處して甚だ身心を勞したるにも拘はらず尙ほ生民愛撫の念を釋てず有爲の士をして常に泰西の醫學を講習せしめその奬勵を忽にせざりし用意の深厚なりしことは眞に幕末維新の際に於ける賢君たるに乖かざるものと稱すべし矧んや當時諸藩に於ても刷新すべき事業は一にして足らず或は兵制の改革・財努の整理・藩論の歸趨・數へ來れば男兒劒を撫して趨らんと欲する所のもの前代未聞の秤たるべきに於てをや然るに我が

多くの先哲は千軍を叱咤し萬兵を驅るが如き功名榮達の道を避けて靜かに泰西文明の東漸を暗默の中に豫測したるもの丶如く孜々として醫學の攷究に是れ旃め明治大正の盛運を的むの先驅者たりし心事に至りては誰か同情の懷を禁たざる者あらんや於戲男兒快心の事未だ遽かに一り硝煙彈雨の中にのみ在りと決すべからざるなり

汪洋の流もその源を繹ぬれば葎を潛り石を穿ち巖に激して千屈萬回す今や文運日に隆興し運輸の便發けて四通八達・學藝の淵叢と稱すべき歐洲の業績も二週日を出でずして我邦に入るの情況に在り加ふるに語學の道瞭かにしてその專門の學藝を研究するに容易なる之を往日に比すれば恍として隔世の感あり烏雪當時四境蔽塞の日に方り南船北馬其に艱苦を嘗め以て草萊を開拓し後來の收獲に資せられたる先哲の餘德を追想すれば凡て伊れ立志傳中の偉人たるに恥づるなし便ち我が此小史或は補訂剪裁の誚を免れざらんも亦自ら策つて後來雄飛の材を養ふを得ば聊か以て足れりとなさんのみ

"A book may be as great a thing as a battle."—Disraeli.

> 惟ふに今の人は是れ前人の後人にして又後人の前人たり則ち之を前人に學びて以て後人に施す吾人聖代に生れて家國に竭す所以の道盡し亦此の如き而已（土肥鵬軒）

第二章　越藩醫人傳

第一節・一・福井醫人傳

本稿に於ては福井藩以前即ち朝倉國主時代の人物谷野一柏・三崎安指・大月景秀の徒を含むも順序として玆に掲ぐることゝなしぬ一柏は後柏原天皇の永正九壬辰年七月南學に來る實に今を距る四百十餘年前（一五一二）なり

谷野一柏

越前國主朝倉彈正左衞門孝景京都より一柏を召して侍醫と爲す一柏は嘗て入唐して南京の眞言沙門阿闍梨たり醫術を學び易道に精しく天文元年足羽郡一乘の城下に來り朝倉家に仕へ谷野雲庵と號して還俗す孝景則ち一柏の爲に同郡高尾村高尾寺に藥師堂を建立し僧行基刻む所の藥師如來の像を安置し一柏が校正したる醫書八十一難經俗解を櫻木にうつして此堂に納め醫國救民の爲とす今尚ほ高尾村畠中に二十間に十間の遺跡あり一柏屋舗と稱す其難經奥書左の如し

越前州一乘谷之艮位一里許有山曰高尾其麓有寺人號曰高尾寺寺有堂安以醫王善逝尊像太守日下氏宗淳公俾一柏老人校正熊宗立所解八十一難經經文字白讀而募工錢梓以置於本堂

蓋醫國救民之意歟

岩天文九年丙申九月九日

三崎安指

三段崎安景の男にして足羽郡高尾村に住す祖父は國主朝倉孫右衞門尉氏景の三男弼景なり初め三段崎を姓とす五世安景は則ち安指の父なり天文元年谷野一柏一乘城主朝倉孝景の侍醫と爲るに及んで一柏の嗣子たり時に十八歳卽ち養父より醫法を受け姓を三崎と改め名を玉雲軒と稱し醫を業とす現今猶ほ家傳と稱する賣藥牛黄圓は卽ち當時の傳法なり天正元年八月義景は織田信長に攻められ遂に朝倉氏亡ぶに及び去て京師に出で內經・素問・靈梧俗解・難經等の醫書を講じて醫生に敎ふ時に歳六十慶長十二年十二月七日卒す享年九十五・法名を蓮仙院月峯安指居士と云ふ今尙ほ內經十卷・難經三卷を自寫して三崎家に藏せり

大月景秀

畠山莊司次郎重忠の嫡子秩父六郎重保の裔なり吉田郡志比谷市野々村に住す朝倉掃部の妹霜女を娶り一方の將たり兼て醫術を學び朝倉家軍用の萬金丹の祕方を受く天正元癸酉年一月朝倉家亡ぶに至り北莊に出で館矢町に住す薙髮して名を善隆と改め其十一月八日卒す產前產後の賣藥あり今猶ほ家傳として世人に知らるゝもの是なり福井顯本寺に葬る

横井玄節

通稱前純又は半藏と稱し後ち玄節と改む父横井周義は加州松平筑前守光高に仕へて五百石を食みしも故ありて福井に住す萬治四年五月父の歿後玄節は名醫の譽あり慶安二年福井藩に拔擢され御匙醫たり新知二百石十人扶持下さる元祿四辛未年二月二十九日卒す法名を理性院覺意玄節居士と云ひ淨土宗清圓寺に葬る玄節性短氣にして入門する者無く又養子に來る者無し吉品公之を惜み渥美助左衞門の二男庄八郎を以て嗣とす門人に辻岡某一人あり玄節の意に忤はず業を受けたりと云ふ

大月壽齋

父善隆の嫡男たり幼にして父を失ひ母霜女の哺育を受け長じて長谷部采女入道休樂の女を娶り醫學を研究して其室に入る慶長八年德川秀康の召に應じ大に醫功を樹てたり依て其賞として館矢町に屋舗地を賜り御朱印下附せらる元和四年大火の節家藏の舊記及び朱印共に烏有に歸す然れども松平忠昌の時に至り再び先規に據り御朱印下附せらる慶安元戊子年十一月九日卒す顯本寺先塋の次に葬る嫡男齊

庵も亦醫業を享けて其後を嗣ぐ庶子あり通眞と云ひ大阪に移住し大阪四大家の稱あり其弟道庵は通眞の後を享けて安藝國廣島に移住す又齊庵の弟に仲庵と稱する者あり敦賀に於て醫を業とす而も本家大月家は世々福井に住して現に十五世齊庵たり

安見祐軒

壽碩と云ひ福井藩醫にして鍼術の名醫たり父は紀州侯に仕へたるも故ありて福井に移住し寛永五年祐軒を生めり長ずるに及んで藩主光通公に仕ふ曾て壽仙京師に在りて名聲高し則ち之に就て鍼術を專攻すること五年歸國して召出され表鍼醫と爲り百五石下さる時に慶安四年なり嫡子壽伯に百石嫡孫壽碩に五十石下されしも壽伯江戸に於て大鹽新平と刃傷の事あり切腹仰付らる依て嫡孫壽碩は祐軒の跡を嗣ぎたり歿年孰れも詳ならず

山澤榮順

福井藩の外科醫にして名醫の稱あり吳服町に住し萬治二年八月藩主光通公より諸役免除の朱印を賜る爾來延寶三年十二月藩主綱昌公より延寶五年十二月同綱昌公より再び同樣の朱印を賜はれり

伊藤坦庵

名は宗恕字は元務坦庵は其號なり後ち之を通稱とす又別に白雲山人・不輟齋等の號あり京都に生る祖父は伊藤丹後守宗通と云ひ豐臣秀吉に給仕し慶長年間卒す其子宗淳と謂ふ者始めて京都新在家に在り卽ち坦庵の父たり坦庵幼にして學を好み江村專齋に學び醫術を曲直瀨玄理に修む玄理其人と爲りを愛し己が女を以て是に配す寛文年中醫業を廢して儒となり專ら程朱の學を稱ふ福井藩主光通公之を聘して二十口八百を賜ひ以て儒官と爲す寶永五戊子年二月二十二日を以て卒す實に福井藩儒官の鼻祖たり享年八十有六・法名を坦庵宗恕元務居士と云ひ京極淨土宗大雲院に葬る著書に老人雜話・坦庵集あり

岡本一抱子

一抱子は通稱を爲竹と云ひ又一得齋と號す本姓は杉森氏祖杏園は醫を以て豐臣秀吉に仕へ法印に敍せらる父受慶は半井驢菴の門人にして元和八壬戌年三代藩主松平忠昌公驢菴に書を賜うて召す卽ち往いて越後國高田に仕へ祿千石を賜ひ翌年公に隨うて福井に移住し侍醫に補し法眼に敍せらる二代爲竹は後に默眞瑞寶と稱し半井驢菴の孫に出づ故に又半井を以て氏とす明曆二年七百石を下さる初代爲竹の男知菴は卽ち三代爲竹にして御暇となり隱居默眞へ三十人扶持を下さる依つて三代爲竹は去つて京

都に移住す岡本一抱子即ち是なり四代爲竹卽ち瑞菴は藩士粕谷傳左衞門の二男にして再び半井姓に復し家督百五十石を受け延享三年奥醫師に列せらる(半井仲菴傳參照)爲竹は累代福井毛矢町に住せり余幼時毛矢町を經て景岳之墓に詣でし時常に爲竹橋を通じて爲竹を追懷せしこと數々なりき橋は僅に一間餘にして石橋たり爲竹は卽ち此袂に住みしものなり抑も一抱子は初め味岡三伯に隨うて素問難經を講じ其高足たり一抱子又廣く諸醫書の諺解を作り專ら世の蒙を啓くを以て己が任とし其著す所の書大に行はる近松門左衞門之を誡めて曰く子孜々として諺解に從事す吾れ後世末學の淺きに因り近きに就き復本書を研究せず鹵莽術を施して氏名を誤るに至らんことを慮ると一抱子大に悟る所あり之より遂に諺解を著さゞりしと云ふ著書には難經・運氣論・原病式・十四經・薛氏醫案・痒洄集・醫學正傳或問・醫方大成論・局方發揮等の諺解あり普く世に行はる

附記　予は一抱子撰十四經絡發揮和解六卷三冊寫本を愛藏す

岡部高伯

諱は快意字は高伯岡部佐左衞門忠勝の七男にして府中に生れ本姓を八野と稱す其祖先は武藏國榛原郡岡部の庄に住せり依て氏と爲す忠勝は元和元年大阪陣の時本多伊豆守先鋒に加はりて戰功あり高伯は醫術を曲直瀨道三の門に修む壯年福井に移住し民の疾患を濟ひ大に國醫の名を博す寛文二年藩主光通公其學殖を愛し醫局に召され眷遇日に厚く祿二百石にて召し出されしが後三百石に加增せり元祿四年七月二十二日卒す法名を壽德院高伯快意居士と云ひ顯本法華宗妙經寺に葬る嫡子養竹惟儼家を嗣ぐて五人扶持を相續す寛保三亥年十月十九日奥鍼醫として名あり祖父は城益と云ひ盲人の鍼醫たりしと云ふ延享二年五月二十五日藩主吉邦公の時新知百石に昇進す又傍ら國風を學べり今其の歌一首を記さん

きのふ越し高根はけふのふもとにて戀の山路そなほはてしなき

三崎道庵

道庵字は篁齋と云ひ父は三崎道友(宗益)母は服部吉左衞門の女なり道庵は福井登町(現・足羽下町)に生れ性學を好み博識にして醫に長ぜり二男宗玄は松平昌親公に徵されて松岡に待醫と爲り二十五石五人扶持を食みて分家す三男は江戸の棊客井上因碩に入りて其四世を嗣げり道庵は享保九年十一月藩主吉邦公二女初姫君の病氣を治癒したる功に依り葵紋附著用を許さる父宗益は元和九年七月十三日國

主秀康公に召され三百石を下さる慶長十年別に三百三十石與力加增ありて六百三十石となれり寛文八年十二月二十一日松平光通公長女布與姫君松平信濃守綱茂侯へ緣組に就き御附醫師となり十ヶ年の永詰を爲す而して歸國の後道庵相續したるも此間業を廢したるに鑑み知行を奉還して專ら家業を勵まんに如かずとなし意を決して町醫と爲たり後日道庵登城して御機嫌を奉伺せしに藩主より舊の如く務めよとの御意あり道庵答ふるに是迄通りにては御受致し難し千石下さらば勤め致すと申しければ藩主御笑ひとなりて此事止みしも後改めて拜知と別段五人扶持を給し侍醫に任ず之より千石坊の名あり享保十八癸丑年五月十八日卒す享年八十有七・法名を橘芳院道庵簞齋居士と云ひ淨土宗安養寺墓地に葬る三崎家は世々玉雲と稱し連綿として今日に至る實に大月齊庵と竝稱するの舊家たり

馬淵亨庵

諱は惟同・楊洲と號す福井の醫師なり父は養眞諱は惟存・松洲と號す寶曆二年六月退休す亨庵即ち馬淵五世を嗣ぐ同八年八月二十二日奥醫師と爲り同十月二十二日卒す法名を達觀惟同居士と云ひ曹洞宗靈泉寺に葬る又國風を能くす其歌

みなと江の蘆間の波は道たえて氷につなくあまのすて舟

草枕むすひかへてもむさし野にいくよかたしくつゆの月かけ

わけつくすくさの葉こしに見えそめてやまもありけりむさしのゝはら

藤川百首の題にて

櫻まくらねさめにむかふいそ山のくもよりもるゝかねそ夜ふかき

妻木陸叟

陸叟は幼名を八十太と云ひ諱は直字は士方・榮輔と稱し秋陽又は宗雲と號し致仕の後改めて陸叟と號す姓は妻木氏家世瘍科を以て藩に仕へ祖父宗雲は家祿百石を食み天明四甲辰年九十一歳にして卒す嗣子宋伯病んで男なし則ち石川玄春の子孝齋を以て養子と爲す陸叟是なり陸叟は寛政三年正月京都に出で稽林由仙・川越大亮に就て瘍科及び傷寒論を學び小野蘭山に就て本草學を修む同四年宋伯の女と婚す七年三月再び京都に遊び十月歸宅す八年藩主治好公の時侍醫と爲る文化二年三月濟世館の創設するに方り學監兼講官と爲り醫經及び本草學を敎ふ而して藩公他出に際しては扈從の傍或は江州伊吹山に或は飛驒高山に或は甲州身延山に登りて本草を實地に研究す偶〻友人と共に足羽山に遊びしに路傍發生の花卉草木に就て悉く其種類效用を說明し一も他の戲談に及ぼさゞりしと云ふ實に藩中本草學の權與たり又居常寸陰を惜み經史百家の書涉獵せざる莫く書庫に入りて二十一史を讀むに飲食二便の他外出せざること五十日以て讀了せりと傳ふ又國風を愛し詠草十餘卷一日千首を行ふこと五回に及べり

と云ふその歌

ひさかたの空のうみにやつゞくらん雲の濱邊によするしら波
かけそめし神代のむかしそのまゝに名さへ朽せぬあまのはしたて
秋の夜のいつくはあれと月かけのすみこそわたれ天のはしたて
風さやくさゝのしのやにふしわひて枕にやどる月をこそ見れ
丹波路や大江の山をこえくれはみやこのそらもちかくなりぬる
山の名のかへるやいつこふるさとに日かすかそへてわれをまつらん

陸叟と號せしは老後茶を好みしに由る著書には春秋精義・論語精義・素問精義・傷寒論精義・本草精義・越州產物志・群書碎錦・秋陽隨筆・其他騰寫の書四百卷あり天保十三壬寅年正月三日卒す享年七十有五・法名を百卉院淸芳陸叟居士と云ふ

妻木敬齋

父陸叟の天保十一年九月二十九日致仕するや嫡子敬齋嗣ぎて侍醫に任じ濟世館講官たり同十三年學監に進む嘉永元年田安一位老公病むに方り春嶽侯に隨うて江戸に到り嫡子元眞を俱うて戸塚靜海の門に入れ瘍科を修めしむ同五年十一月准侍醫長に進み後病を以て致仕し元眞之を嗣ぐ敬齋亦書を能くし歌を好めりその歌

手枕の野邊の春かせ小夜更てかりねの袖にかよふ梅が香

關明霞

明霞名は攀龍字は子雲・臥龍・棲霞の號あり通稱を龍輔と呼び橘宗賢の三男より出でゝ山本氏を嗣ぐ山本氏本姓を關戸と稱せしも故ありて山本に更め明霞に至りて單に關の一號を以て氏と爲す家世眼科醫を以て藩に仕へ傍ら書を能くす享和年中事に坐して免黜せられて家居す次で赦に遭ふや氏を京極と改め京都に淹留して臨池の技を研き天覽を忝うするに至り或は遙に淸人の書を寄せて之を賞する者あり其他奇行多し文政二年九月二十五日備中笠岡客舍に於て歿す享年七十有三・法名を關通院秋達日融居士と云ふ

山本五雲

關明霞の歿後嗣子なし依て長谷川久右衞門の三男を養子と爲す五雲是なり五雲名は文藍字は子靑通稱を正伯と云ひ老後瑞庵と號す五雲に至りて姓を山本に復し專ら醫業に勵み文政年間侍醫に進み幾くも無く侍醫長に陞り天保年間祿百石を賜り家名を揚ぐ安政六年正月卒す享年七十有八・五雲亦書を能

くし歌を好めり

ちりの世をのがれ入ぬる山住に春の心をさそふ鶯

石田一惠

元と下總結城の人にして六世祖祐慶福井藩に移住す一惠性溫厚篤實にして夙に產科を好み長ずるに及んで技益〻熟す文政十一年七月を以て歿す享年六十有四

池田復堂

復堂名は義之字は伯宜通稱を冬藏と云ひ後に通齋又は復堂と號す福井西本町に生れ醫を業とす曾て京都に出で小森挑塢に師事す挑塢同門と議し復堂及び藤田長禎と共に官に請うて刑屍を申受け之を解剖す實に文政四年十二月十六日なり挑塢は解剖敎師にして復堂は其督務たり京師西刑場に之を執行す除籍刑人名は敎道行年二十三歲なり其解剖には一々精圖著色を施し解臟圖譜一卷として梓行せり其奥書を左に錄せん

近世蘭醫之道傳來于皇國而往往有解臟之舉挑塢小森先醒宗其學去冬使門下長池田君請于官而解刑屍余與圖家之事而得密觀焉蓋其爲物非常模寫甚難一依畫法則恐違其眞欲寫其眞則恐違畫法既違畫法則亦復不能得其眞矣於是不得已取於刀畫瞬睨之機以意象之而已請覽客察焉若其不工之咎固所不辭也

壬午春　淡海膽所藩　丹丘伊藤壽

又著書數卷あり傷寒六經圖說一卷・傷寒論詳解六卷・老子解二卷・醫學淵源三卷等 天保七年九月二十九日卒す享年五十有二・法名を速入院圓成居士と云ひ福井眞宗大谷派願乘寺に葬る寺內には男柔行及び門人等の建つる所に係る復堂先生墓を儼存す

小島良琢・小島貞勝

良琢・貞勝は兄弟にして父の名を知策と稱す知策は福井藩茶人にして歌を能くせり知策の父は本多內藏助の臣鹽谷某の男なり而して良琢・貞勝に及び二人者共に醫學を曲直瀨玄朔に修めたるも名を成すに至らずして夭歿す其子良甫・貞紹在りしも醫學を修めず

山室東柯

諱は知顯字は玄順・東柯と號す家世松岡の醫師たゝ而して業餘俳諧詩文を嗜み享保六年十二月十一

日松岡藩主昌勝侯本家相續の時恰も東柯の代なりしかば福井に移住して竪を業とするに至る實暦六丙子年二月十三日卒す俳人として名あり享年六十有四・淨土宗眞照寺に墓あり

山室松軒

山室氏は通稱を知將と云ひ松軒又は松庵と號す福井の竪師たり元と松岡より出づ曾て冷泉爲泰の門に入りて和歌を學び後ち越前國人の古今の歌を撰集して松の下葉と題し之を同志に頒てり其六十の賀に爲泰卿より賜はりし歌

今年より經べき齡は千世の松のさはになれて友と契らむ

松軒の返歌に

仰きてもいや影たかきことの葉の松に契りて千世やかさねむ

かくて七十五歳にして卒す卽ち歌人として其名聞ゆ享和三癸亥年三月十五日福井淨土宗眞照寺に葬る法名を本誓院松譽隨軒居士山室松軒と云ふ

附記　山室氏と予が先代桃李亭魯希曾とは特別懇親の間柄なりしものあり予が珍藏する先代の詩稿・歌稿・紀行・文章等を讀みゆく中其交誼を敍するもの頗る多し依て他日稿を改めて之を世に傳へんと欲するも今序に予が記憶に存する詩一篇を錄せん

壽山松軒老丈六十初度

龍山近接羽江流水碧花明照畫樓爲是丹房開壽域何論海屋更添籌

尙ほ此詩に就ては大野藩竪兼儒官松邨九山の批評有るを以て趣味特に深し然れども餘事に及ぶを以て玆に贅せず

橘立庵

立庵は橘家十九世宗賢の男にして幼名を六之助と云ひ後ち定俊と稱して竪を業とし多才にして傍ら和歌・連歌・俳諧を嗜み又太鼓・尺八の名人なり或時虛無僧來る立庵之を聽き下手な尺八じやこんな事は尻にても吹くと云ひしに虛無僧大に之を怒りさらば尻にて吹てきかせ玉へと責め立てけるに立庵笑を含みこは安き事なりとて其尺八を受取り逆まに尺八の尻に口をあて曲一曲吹くとおもしろく虛無僧驚きて赤面し閉口してすご〳〵と去てける又太鼓の撥を削ることに妙を得京都へ赴く途中旅舍の主人の知れる者撥を所望しければ片撥をけづり片撥は重ねてとて出て行きけるやがて京よりの歸途亦此家に宿りて片撥を削る主人曩に貰ひし片撥を出して之を檢するに其樣少しもかはらず立庵目方を量りて見よと云ひければ秤にかけゝるに二本とも同じ目掛りなしと又其頃町奉行に某の彦左衞門あり人呼んで鬼彦と綽名す立庵氣骨あり足羽神社の神主馬來田敬明と慶松友梅とは友人なれば常に鬼彦に反對したりき彦左衞門此三人を常に邪魔物と嫌ひ居ける偶〻立庵弟三人ありて財產爭の事起り遂に訟訴となりしかば彦左衞門立庵を內牢に入れたり立庵牢中に在りて囚獄日記を書きて政治の不公平を論ず

波の上に沓のあとあり水仙花

の一句を殘して病卒す時に享保十八年十月二十三日なり享年七十有四・法名を透實院橘中了仙居士と云ひ曹洞宗泰清院に葬る

松下眞山

松下眞山名は慶績字は子節通稱を見櫟と云ひ福井の產たり本姓を坂上と稱す二十一歲の時京都に出て松下見林に師事して業を享くること多年見林其篤學を愛し三十一歲の時己が女を以て之に配す依て松下氏を襲ぐ見林歿するの後三十七歲益〻家名を擧げ儒醫を以て縉紳貴族の入門する者多し又常に四方の名士と交游し特に高野穩翁(容齋の祖)・馬來田敬明と親密なりき著書十四種三百卷の他・眞山文集四卷・詩集六卷あり延享三丙寅年九月十九日卒す享年八十・京都內野大雄寺に葬る

富士

清濁判天地中間著此峰白從何代點靑是數州濃全識晴時面半修雨後容蓬萊時有路請試蹈仙蹤

詠鷹

齊野玄霜楚澤氷十分猛氣正騰々目中今已無凡鳥天外常思制大鵬利爪幾經紅血戰奇毛深入白雲層誰言一絕即飜去左指右呼憐爾能

近衞家熙公口授山科道安筆記槐記享保十二丁未年二月五日條・大將樣の和韻あり左に之を錄せん

物外樓詩

物外眞遊物外樓樓頭盡日侍仙遊豈唯佳水名山富八極圍來入寸眸

臺作

主山心水一高樓辭業絕交物外遊默坐逍遙携六合東巒南岳不移眸

大將樣

十二欄干百尺樓山靑水秀對高遊共開筆硯題詩處勝景無涯凝遠眸

松下秀山・松下昌和

名は元明字は昌林・秀山は其號なり眞山の男にして初め僧緣を請ひ後ち山科道安に師事して醫を業とし其名大に高く法眼に敍して良醫の稱あり明和二年九月卒す

秀山の子昌和も亦嗣で醫を業とし法橋に敍す其子充安に至りて嗣子無し則ち家系絕ゆ

前田葉庵

名は時敏字は道通・葉庵は其の號なり父は里庵法眼濟世院と稱し尾張國前田村の人京師に出でゝ儒と爲り九流百家に通ず則ち諸侯高祿を以て之を召すも辭して仕へず葉庵は其の三男たり抑も葉庵は儒を山崎闇齋に醫を山脇道治に修め特に道治の高弟にして醫を以て大に鳴る正德五年福井支封松岡藩主昌勝侯格別の懇望に依りて其の七月十九日儒醫に召出さる既にして侯福井へ移らるゝに及び隨うて福井に移住し寶曆二壬申年十一月八日卒す福井淨土宗淸源寺に葬る法名を理氣院葉庵時敏道通居士と云ふ

勝澤青牛

青牛は通稱を一順・一愿又は單に愿と云ひ醫學に關する記載に於ては多く此稱を用ゐ詩歌文章に於ては其號青牛を以て記するを例とす下江戸町に住す福井藩侍醫にして文化二年濟世館創立に際し素問靈樞を講ず兼て文學に長じ當時文學者と稱する者多く交を訂す故に後人却て文學者として其名を記憶すと雖も而も一藝に秀づる者又多藝に精しく隨うて其人格を沒せざらんことを要す曾て陸羯南が子規言行錄に序したる所の者移して以て予は青牛に擬する者なり則ち其一端に曰く

何か一藝に秀でた人はその藝の爲に全體の人格を掩はれて仕舞つて只藝だけを以て世に持て囃さるゝことが多い例を擧ぐれば細井廣澤といふ昔の書家であるが此廣澤は立派な儒者であつて又立派な政事顧問であつたのみならず廣澤最も武藝に長じ又兵學に通じたのであつたであるが廣澤の始めて文徵明の書風を江戸の眞中に弘めて元祿時代の日本を其筆跡にて風靡した處から今も多くの人は廣澤を徵明流の書風の元祖として又近古第一法の書家として記憶するそれて廣澤の他の長所寧ろ廣澤の人格の全體を知る者は少い廣澤は隨分長命した人であるが何にせよ當時封建の盛んな時で只一藩の抱へ儒者たるに止まつてシカモ太平の世であるから其技能抱負を施すことが出來ずに一世を終つたのである云々

文政十一年十月同僚と共に解屍を行ひし際其記錄を擔當せしが如きを以て觀るも青牛は獨り醫學に於て深きのみならず文筆に秀でたるの證左たるべし著書には初音草其他數卷あり就中初音草は青牛の隨筆にして以て其學殖を窺ひ識見を知るに足る

秋園步月

月色迎人上小欄南園恰作玉京看光尋梧葉疎邊漏影到水流深處寒塵世不須悲白髮碧雲直欲駕

青鸞書童莫怪彷徨久秋思鍊來詩聯安

擁爐讀書

習氣自嘲老未除爐邊隨分惜三餘不知一尺門前雪獨讀十張爐下書

冬夜偶作

半升米外更無求三寸舌頭不說愁點檢生涯吾事是一爐團炭一缸油

竹

已言瘦可治豈獨俗難醫五月十三日一竿六七枝栽當風至路影待月明時偶有故人訪此心應自知

蒔田公弼寄書問愿起居併見示其歸去來詩八首因次其第一首韻答聊以塞責云

十年歸去夕陽村不復故園勞夢魂鷄犬之馴認舊主鄰鄰更告生曾孫竹添幾筍遮山逕柳長數條掩里門吏隱如君從古少詩材祿米兩相存

蚊遣火

夕食たく椎の生柴そのまゝにかやが軒端のかやりにそする

かゝる歌よみたりけるに其後人のおのれを生柴の翁とよぶよしきゝて

蚊やりたく椎の生柴きえかねてうるさかられん我身いつまて

扇

ふるされて骨をあらはす破扇我にさも似て老にけるかな

雨中鹿

降雨におのか涙をこきませてなくらん鹿の聲しくるなり

初雪

人やこんわれやゆかんと思ふ間にかつかつきゆる門のはつ雪

中根雪江かおはの身まかりにけるとし雪江東にありて藤衣けふはしほりつ昨日まて

逢はいく日とかゝなへし手にと詠みけることのありけるを更に思ひ出てよみて遣しける

聲をたにきかて別れし旅衣しほりし袖を又しほるらん

早夏鶯

茂りあふ青葉かくれの鶯にくれ行春のなこりをそきく

新樹

さく花のちるを思へば中々に青葉のなかめしつけかりけり

卯花

古に雪を集めて學ひにし人しのはるゝ雪の卯花

曙覽か後のわさするをり菊の露といふ事を

此比は菊の上にも置あまり我袖さへにぬらす白つゆ

中根師賢か致仕の後植し庭の櫻をみて

國の爲つくしゝ君か眞心のなこりを庭の櫻にそ見る

寄橘憶舊　曙覽追悼

枯てまた生しためしもありにしを香のみのこせる庭の橘

初音草

おのれ今年は七十に一つたらぬ老となりて耳さへうとく世の交ひもえならねば終日なす事もなくて徒然なるまゝに心に思ひ出る事何くれとなくかいつけたるか彼何かしのほとゝぎすを思ひ出しに似かよひたれば其まゝ此草紙の名とはなしぬ（老らくの耳にはうとき郭公思ひ出すこそ初音なりけりとの澤庵和尚の歌を烏丸光廣卿惡して初音僧正同日の談に非ずとのたまひしとなん）

辰の夏　趣の牛翁しるす

年老し父の其の子に妻むかへんとて姿容はいかに見にくしともあれ心たてのよからんをこそと云けり此の父は我子を齊の宣王諸葛武侯のこと思へるにか又我身の若かりし時の心いかにありしや

或人何某は學問するに似氣なき愚かなる人なりと云ひけり傍の人聞て愚なればこそ今迄も學問するなれもし智ある人ならば疾にやむべしと云てけりいとにくし

憂苦は精神を淬くなり勞働は身體を磨くなり學問饑寒は或は淬き或は磨て火候水準礪石の如し

富貴の家の小兒は意の如くなる事常なりたまたま意の如くならざる事にあへば氣屈す故に病氣多

し貧賤の家の小兒は意の如くならざる事常なりたまたま意の如くなれる事あれば氣暢ぶ故に病氣すくなし又富貴の小兒時ありて顚墜打撲にあへば致傷しやすし貧賤の小兒は日々かゝる事にあへども却て致傷すくなし是平生動作になるゝとなれざるとの故なり

言葉にまれ事にまれ物いみ多きは事足れるよりの驕なり故に富貴の人に多くして貧賤の人に少し飢渴に臨みては喪家の食とてもいかで食はざらんこゝゆる時はかた身に贈られし衣類なりとていかで著さらんこればかりの事だにわきまへぬ人は其心のくらき事推て知るべしされど人の上にては千代萬代と祝ひ鶴龜の齡もことぶくは世に交るの禮儀にして物いみするにはあらず殊に病をとひ又は慶賀の爲に人に物を贈るには心あるべきにや

健强なる人は養生あしゝ養生よき人は脆弱なり勤の怠らぬ人に不器用多く才能の人は勤めず故に世の人多く相似たり其内健强なる人の養生よきと才能ある人の怠らぬは名を世にもあげ壽命も保つべし

われ召仕ふ下部に文吉と云し者あり質朴なるさかにておのれが言葉に少も忤ひたる事なし或時の語の序にわが云し事皆よしと思ひてかくは從ふにやと問けるに否左樣には候はず時として是あしき事もおはすれど主なればまげてしたがひ侍るなりと答ふ問ばこそあれ答ふとはさりせばおのれのみよしと思ひ居るべきを

或人花賣る翁を呼び花をかはんとす此色はちらずやと問ければ翁ちればこそ花なれと答ふ其人言葉なくてやみぬ

或人より消息してけふはいとつれ〳〵なり我庵へもさて物語し玉はんやもてなしは豆腐のみなりと言出ける故やがてゆきぬ夕つかた膳を出せしにいとよきまかないなりされど豆腐はなかりし

すこしの物音にも眠を妨ぐるとて家うちの者に足音もさせず物語をもさせぬ人あり又魚鳥の具へものなくては食餌もうまからずといふ人あり又酒氣もからされば夜も寢入がたしといふ人あり息を貧りて金銀をかす人あり是らはたとへ大なる惡心惡行はなくとも徹底聖賢の域は窺ひがたく永劫成佛の緣りたへたりと知るべし

我福井なる本覺寺の老衲語りていはく山王村に茂左衞門といふものあり元より此國にては人にも知られし豪農なり若き時京師に遊びて伊藤坦菴の門に入りそれより家產を盡して書籍を買求め後には家貧しくなり其日〳〵の米を買て過るばかりになりけり坦菴是を聞て茂左衞門京に上りしをり大に意見を加へられ農家の身分にて己の所業をすて祖先よりの家產も己が好む道に蕩盡するなどもつての外なり向後は決してさる事あるべからずもし其心を改めずとならば今日より破門すべしとありけるに茂左衞門大に感服しそれより生涯訓を守り再び書籍を手にとらず只日々晝は山野に出て耕作し夜は計算を事として懈らざりければつゐに本の富農となりて其家今も榮えり老衲其家にいたりてそれが作りたる詩文章の屏風にしるしあるを見て其氣象凡俗にあらざる事をしられぬとなん　（伊藤坦庵）

三國與兵衞といへるは三國港宮腰屋五郎兵衞といふものゝ小厮より家を興して終に國國二三の豪富となれりある時衆人打つどいて物語せしをり與兵衞いふとかく朝とく起出るは家政のとゝのふ本なりと其中一人然れども一家一同に起きざれば一人二人のみ起きたりとて何の用にもあたらずといふ與兵衞笑ひて其人に向ひ君は蓐中よりおき出玉ふに何方よりさきにおき玉ふにや定てまづ頭より擡げて追々一身に及び玉ふべし一家の主人は一身の頭とおなじその頭たる者まづおきいづれば其他はのゝしるにもいかるにも及ばず皆起るものなりといひし市井の小人だに一家を興すは偶然にはあらず此與兵衞はおのれも知る人なりき　（三國鶴翌）

鍔師小左衞門は金工にして生涯刀劍のかなぐを彫鐫し殊に鐔を彫するに長ぜり常に多きをむさぼらず一家の衣食わづかに足るを以て限りとす老て齒なし煙管をふくみて鐔を彫する故涎煙管につたつて鐔面にしたゞり鐵屑を相和してむさき事いはんかたなし故に人々嘲りてよだれ小左衞門といふ其彫鐫する處鳥獸花草一見粗なるが如くなれども氣韵生動衆工其右に出る者なし

涎小左衞門は明珍六代目にして世に明珍作鍔は此人の作多し文化元年己巳二月二日卒す法名善榮此人長命したりと云　（明珍吉久）

ずんど兵衛は木板の彫工なり性酒を嗜て世を玩び人に詔はずおのれが意のまゝにふるまいけり老後妻子もなく孤獨の身となりしがある時殘りすくなき家財を賣りて多く酒肴をとゝのへ例の酒徒をいざなひて三國港なる東尋坊に遊び（東尋坊は地名にて兩岸の急崖洞穴多く海濤其中に盤渦して雷吼をなし其奇絶の境なり昔東尋坊といふ僧あり此中に陷りて死せしより地名となりしと）爛醉して海中に陷りて死せり後に思へば百度兵衛が此日の容子何となく常にかはり且又死ぞ）後に家内を點檢せしに一物をも殘し留めず皆々酒肴にかへたるを見れば始より世を謝する念頭を定めしにて誤て脚を失したことはあらざるべしと其頃の人はいひしとなん（ずんど兵衛）

細井東陽

姓は細井名は徇又は順字は叔達東陽と號す家世ゝ福井藩醫たり東陽幼けなき時小野蘭山に就て本草學を修め傍ら石龍齋に相法を學び南谿に聲律を聞き之くとして之れを極めざるは莫し又畫を善くし本草著書の如きは自ら其形態を模寫して後學に資する所のもの頗る多し晩年致仕して髯を蓄へ香祖軒紫髯と號し京阪の地を遍歴して交を名士に結ぶ就中中川壺山・松堂清裕・花木淡齋等と好し嘉永五年二月二十二日病を以て卒す法名を洵光院玄譽東陽紫髯居士と云ひ福井淨土宗運正寺に葬る著書には四診備要・本草精義・製藥錄・傷寒藥量考・詩經名物圖解等あり殊に詩經名物圖解及び四診備要は東陽が學識の眞髓を得たる者とも稱す可きに似たり前者十卷の編中挿入の圖畫は當時の名家の揮毫したる者にして燦然大著述たるに恥ぢず現に理學博士白井光太郎藏する所の者是なり後者は東陽が博覽强記醫學の素養に加ふるに相法・聲律を以てし所謂望診方として深く信ずる所あるの著書たり

偶ゝ大正三年四月十日予が常に購求する書肆に立寄りしに書肆曰く我が家中の大秘本として先生にのみ一覽を許すものありと予喜び且つ異んで直ちに之を繙くに曾てより搜索しつゝありし東陽の著四診備要たり而も此稿本たるや東陽の自筆に屬し眞に珍本中の珍本たり書中一二の項の如きは科學の發達せる今日より觀て寧ろ滑稽の感あるが如しと雖も著者が德川時代の末造に於て深く東洋醫學の蘊奥を極めて產みたる物なるを採らずんばある可からず然れども書肆は其著者東陽が何處の人なりやは勿論事歴をも知らずと云ふ依つて予是事を告げ且つ之を讓受けんことを圖りしも往年日本橋の某大家に於て千兩を以て購ひたる書籍中の第一品たりとて諾せん由もなし而も再三之を强ひしに遂に諾するに至りし次第にして予が書架又珍本の一を加へたるを誇るに足る

顧うに予初めて本書を讀むや之を日進の醫學に對照して註解を施さんの考なりしも更に思うに世亦博識多才の士乏きに非ず加ふるに予が註解たるや動もすれば先人東陽の學德を毀けんことを慮り敢て之を中止し原文のまゝ公にすることゝはなしぬ讀者之を諒せよ若し夫れ東陽の人と爲りに至りては中川壺山の後序を讀まん者直ちに本著ある所以を明むに足らん歟

四　診　備　要（弘化四丁未細井順叔達編）

素問五藏生成篇曰、色見青如草茲者死、黃如枳實者死、黑如炲者死、赤如衄血者死、白如枯骨者死、此五色之見死也、青如翠羽者生、赤如雞冠者生、黃如蟹腹者生、白如豕膏者生、黑如烏羽者生、此五色之見生也。

靈樞五閱五使篇曰、鼻者肺之宮也、目者肝之宮也、口唇者脾之宮也、舌者心之宮也、耳者腎之宮也、謂之五官。帝曰、以官何候。岐伯曰、以候五藏、故肺病者喘息鼻張、肝病者背靑、脾病唇黃、心病者舌卷短觀赤、腎病者觀與顏皆黑。帝曰、其常色殆者如何。岐伯曰、五官不辨闕庭不張小其明堂蕃蔽不見又埤其墻下無基垂角去外如是者雖平常殆況加疾哉。

帝曰、五色之見于明堂以觀五藏之氣左右高下各有形乎。岐伯曰府藏之左中也各以次舍左右上下各如其度也。五色篇曰、雷公問於黃帝曰、五色獨決於明堂乎、黃帝曰、明堂者鼻也、闕者眉間也、蕃者頰側也、蔽者耳門也、其間欲方大去之十步皆見於外如是者壽必中百歲。雷公曰、五官之辨奈何、帝曰、明堂骨高以起平以直、五藏次於中央、六府挾其兩側、首面上於闕庭、王宮在於下極、五藏安於胸中、眞色以致病色不見明堂潤澤以淸、五官惡得無辨乎、雷公曰、其不辨者可得聞乎帝曰五色之見也、各出其色、部部骨陷者必不免於病矣、其色部乘襲者雖病甚不死矣、雷公曰、官五色奈何、帝曰、靑黑爲痛、赤黃爲熱、白爲寒、是謂五官、雷公曰、以色言病之間甚奈何、帝曰其色麤以明、沈夭者爲甚其色上行者病益甚、其色下行如雲徹散者病方已、雷公曰、風與厥逆別之奈何、帝曰、常候闕中薄澤爲風、沖濁爲痺、雷公曰、人不病卒死何以知之、帝曰、大氣入於藏腑者不病而卒死矣。雷公曰、病小愈而卒死者何以知之。帝曰、赤色出兩觀大如母指者病雖小愈必卒死、黑色出於庭大如母指必不病而卒死、雷公曰、其死有期乎。帝曰、察色以言時、雷公曰、願聞之。帝曰、庭者首面也、闕上老咽喉也、闕中肺也、下極者心也、直下者肝也、肝左者膽也、下者脾也、方上者胃也、中央老大腸也、挾大腸者腎也、當腎者臍也、面王以上者小腸也、面王以下者膀胱子處也、觀者肩也、觀後臂也、臂下者手也、目內眥上者膺乳也、挾繩而上者背也、循牙車以下者股也、中央者膝也、膝以下者脛也、當脛以下者足也、巨分者股裏也、臣屈者膝臏也、此五藏六腑肢節之部也、沈濁爲內、浮澤爲外、黃赤爲風、靑黑爲痛、白爲寒、黃而膏潤爲濃、赤甚爲血、痛甚爲攣、寒甚皮不仁、五色各見其部、察其浮沈、以知淺深、察其澤夭、以觀成敗、察其散搏、以知遠近、視色上下、以知病處、積神於心、以知古今矣。

陰陽二十五人篇曰、木形之人蒼色小頭長而大肩背直身小手足好有才勞心少力多憂勞於事能春夏不能秋冬。火形之人赤色廣胻銳面小頭好肩背髀腹小手足行安地疾心行搖肩背肉滿有氣輕財少信多慮見事明好顏急心不壽暴死能春夏不能秋冬、秋冬盛而病生。土形人黃色圓面大頭美肩背大腹美股脛小手足多肉上下相稱行安地舉足浮安心好利人不喜權勢善附人能秋冬不能春夏、春夏盛而病生金形之人方面白色小頭小肩背小腹小手足如骨

發踵外骨輕身清廉急心靜悴善爲吏能ニ秋冬ニ不レ能ニ春夏ニ春夏感而病生。水形之人黑色不レ平大頭廉頤小肩大腹動手足發搖レ身下尻長背延々然不ニ畏敬ニ善欺紿レ人戮死能ニ秋冬ニ不レ能ニ春夏ニ春夏感而病生

察病色之傳

長病ノ人掌中ニ紅氣出テ指ニ登レバ次第ニ全快ス長病成ト雖モ天庭ノ黑氣去リ土黑ニ潤出テ爪根ニ紅氣出レバ全快ス・爪薄ク立筋出來ルハ血分之虛也

大指ノ爪色惡發スレバ一月ノ中ニ病起ル・唇青キ者ハ老テ後嘔噎ノ病起

睛瞳トモニ大ニ成タルハ前夜婬亘有シ也或大酒鼻ノ兩脇枯レ耳黑ク物ノ汚染タル如ク成者ハ百日ノ內ニ病起ル

鼻ニ赤氣出テ肉ニ不付印堂ノ皮キラ〳〵ト滑カニシテ天庭ニ黑色出ル者ハ病必ズ起ル

眉ノ先ニ雲ノ如クニ白氣起リ天庭準頭ニ赤氣村々ト見ルヽ者ハ病起ル

唇黑ク舌白ク奸門黑色出、眼中濁ルハ血虛也・準頭兩顧骨青氣出ル者ハ病起ル

面部ノ下停ニ青黑氣出ル者ハ腫物起ノ候也

惡色何レノ處ニテモ登ルハ病進ム也横タハルハ病長引也下リテ次第ニ消散スル者ハ治セズト雖ドモ自愈印堂黑暗氣出ル者ハ一月ノ內ニ病起ル

病ノ起ルヲ見ルニ第一ニ先年上壽上ノ色ヲ見ル年壽ニ惡色出レバ必ズ病起ル

法令ニ青氣出デ赤氣交レバ病起ル・人中青氣出テ黑暗ヲ兼ル者ハ食傷也

都テ色青キハ血ノ締ル也廻ラヌ也滯也・都テ色赤キハ虛火ノ上ル也

都テ色白キハ過ルハ血ノ枯ルヽ也・都テ色黑キハ精液ノ虛也

都テ色潔白、鮮明、明潤、潤澤ノ四色ハ無病吉色也

年上赤氣起テ上ニ衝テ上ルハ吐血也但紅有バ輕シ眞直ニ上下スレバ危シ

壽上赤氣起テ下ニ走ルハ下血也・唇色黑キハ痔疾ヲ病ム

地閣ニ黑氣出レバ下焦ノ病起ル

懸癬ヨリ驛馬ニ連リ黑氣出レバ其體ニ痛處有金甲ニ土色起レバ其年ニ病起ル

臂尻常ニ冷レバ病起ル・元來肥滿ノ人瘦ルハ痰也・眼眶色黑キハ痰ノ症也

能食メ瘦ルハ胃中熱アル也・鼻ノ色青キヲ見スハ腹痛ノ候也

鼻ニ微黑色ヲ見スハ水氣アル也・鼻黃色ヲ見スハ小便難ノ候也

鼻ノ色鮮明ニ過ルハ內有留飲也・鼻赤色ヲ見スハ肺熱也

鼻ノ孔乾燥スルハ必ズ衄血ス・鼻孔燥テ烟煤ノ如サ者ハ邪熱極ル也

鼻ノ孔冶テ色黑キ者ハ內寒甚也・鼻清涕流ルル者ハ肺寒也

鼻ノ孔腫ルル者ハ肺熱也・唇青黑色ナル者ハ內寒也・唇燥裂スル者ハ內熱甚キ也
齒燥津液無キ者ハ胃熱スル也・前板齒燥キ脈虛スル者ハ津液涸ルル也
耳色黑クシテ枯燥スル者ハ腎虛也・夕刻每ニ兩觀ニ赤色ヲ發スルハ虛火ノ上昇也
凡病人目ヲ開テ人ヲ見ル者ハ陽症也目ヲ閉テ不見者ハ陰症也
目晴乍レ定暫時ニ轉動スル者內狹アル也

察死之傳

長病ノ人邊地山根年壽ノ邊ニ黑氣出テ孔門流ルル者ハ百日ノ中必ズ死ス
長病中髮枯レ鼻赤黑ク成リ耳ニ潤無ク眼下ニ埃ノ如ク青黑色出ルハ五十日ノ中必ズ死ス
印堂山根黑色出司空ノ邊白氣起ル者一年ノ內ニ病起テ死ス
兩耳黑色出枕骨ニ青氣出レバ三年ノ內ニ死ス
天庭ニ青氣見レテ鼻ノ兩脇ヨリ黑氣次第ニ登ル者ハ六十日ノ內ニ死
大肉脫シ去者ハ死ス
面部薄黑ク成、唇青氣出法令ノ邊ヨリ黑氣起リ大海ニ入者ハ十日ノ內ニ死ス
地閣ノ邊ヨリ黑氣埃ノ如ク出項ノ廻リエ至ル者ハ六十日ノ內ニ死ス
舌腫脹スル者ハ死ス・又舌出ル者ハ死ス・唇色青キニ變スル者ハ死ス
大海ヲ環テ黎黑ナル者ハ死ス・黑氣魚尾ニ出引テ太陽ニ入ル者ハ死
黑氣人中ニ起リ大海ニ入者ハ死ス・黑氣耳目鼻舌ニ入者ハ死
病人鼻孔赤黑ク成リ鼻水垂テ不止者死ニ近シ
病眼濁テ眼下陷リ赤氣雲ノ如ク鼻ノ上處邊ニ起ル者ハ死ス
印堂枯タルガ如クニメ白氣起リ山根人中ニ黑氣出ル者頓死
高廣ノ肉落テ黑氣甚敷者ハ大病起テ死ス
病人黑氣山根ノ兩方エ懸リ別タリト出バ死
年壽色暗滯ニ漸カニ黑氣ヲ兼レバ死・人中縮タル如ニメ唇反ルハ死
欽盆埋ル者ハ死ス・病人唇ノ廻リヨリ黑氣起リ奸門ニ登ル者ハ五日ノ內ニ死ス
地閣暗滯氣有テ枯ルル者ハ近キニ死・山林驛馬ニ青氣土色有者ハ頓死
病人口ノ邊穢ルル者ハ死・口張テ魚ノ如キ者ハ死・病人耳前ニ青氣黑氣起レバ死
掌中艮宮ニ白板紋出ル者死近キニ有・天突埋ルル者死・眼胞陷下スル者ハ死

察夭死傳

身肥テ骨ニ力無キ者・遍身青筋有ル者・言語ニ息切スル者
身肥テ結喉高ク露ルル者・天庭甚狹ク缺陷多キ者・交眉ノ者

鼻毛早ク延易キ者・耳勝テ大成者・小兒陰莖白ク勝テ大成者・身勝レテ細キ者
小兒山根落入リ青氣黑氣常ニ有者・水星ノ先尖リ歪ム者・舌短キ者・胸高キ者
齒短ク間透キテ肉無キ者・面常ニ勝レテ白ク光ル者・手足ニ筋多キ者
身體ヨリモ其頭小キ者・山根ヲ缺陷アル者・臥テ襲ハルル者・唇反リカヘル者
聲勝レテ小成者・眼大ニシテ晴甚青キ者・歩スニ足音無者・息遣甚急ナル者
小兒頭大小アル者・雀班多キ者・寢テ口ヲ開ク者・皺皮面ノ者・指先キ太キ者
手甲肉無者・大海締リ無者・頭歪タル者・息短ク聲低キ者・眼神無キ者・上停尖ル者
寢テ涎ヲ垂ル者・性緩ク身痩テ面又却テ肥タル者・齒黑ク黃ニシテ艶無キ者

察壽之傳

枕骨高キ者・息遣ヒ緩和成者・五十前後ヨリ耳中ニ毛長ク生ズル者
骨肉能ク締リタル者・五十前後ヨリ眉ニ長毛ヲ生ズル者
承漿ニ肉有テ此處地面宜ク長キ者・水星堅ク長キ者・腦後骨出ル者・臍深キ者
胸肉厚キ者・齒數多キ者・聲臍下ヨリ出ル者・上唇肉厚ク長キ者・腰ニ肉厚キ者
老テ後肩高キ者・法令正ク深ク長キ者・體肥テ面瘦タル者

察狂之傳

眼ニ白キ火輪アル者ハ狂ヲ發ス・五十以上ニ成皮引張艶アル者
龍宮赤小豆ノ如キ者・經水常ニ多キ女・瞳子常ニ開タル者
眼ヲ張テ白眼付ル者・常ニ明堂動搖スル者

小兒之傳

枕骨早ク出來ルハ壽・出生ノ時陰囊皮縮マザルハ夭・口ヲ常ニ張テ不合兒ハ夭
頭毛皆旋毛ニ成兒ハ夭・齒格別早ク生ズルハ夭・遲ク語リ遲行クハ壽
頭髮赤クシテ薄キハ胎毒也・色黑キハ胎毒多シ・色黃成ハ胎毒ノ熱也
四五歲ニ成爪甚薄ハ脾胃弱シ・頭ニ白雲出來ルハ頭瘡ノ發スル也
山根ニ青筋出ルハ蟲也是ニ黑ヲ兼レバ死ス横ニ出ルハ重シ竪ハ輕シ
眼中烟ノ登ルガ如ハ近ニ病起ル・頭眞圓ナルハ七八歲ニテ死ス

產婦之傳

婦人臥蠶起ハ姙娠也・淚堂奸門自然ト肉起リテ非ル常ノ色ヲ發スルハ姙也
奸門魚尾ノ邊ヨリ邊地ノ方ニ青筋立テ進ムハ姙也二筋見ルハ非ル姙
瞳子開キテ眼珠一體ニ陰者姙娠ノ月重ル也・姙婦赤脈睛ヲ貫クハ難產
姙婦面赤キニ過ルハ產ニ臨テ難ム・姙婦眼下黑赤キハ難產

産ニ臨テ唇不締ハ死ス・婦人常ニ眼睛黄ニメ赤色俄ニ纒ハ産ノ時死

面部艶無ク枯タルカ如ク殊ニ下停色惡ク黑色ヲ兼ル者ハ經水不順也

福堂ノ邊ヨリ大海ノ廻リ青黑色出レバ月水滯ル姙婦山根年壽ノ邊暗黑ノ氣出レバ産婦死黄氣出レバ兒死ス・姙婦山根年壽ノ邊ニ白氣出レバ母子共ニ死

姙婦人中暗氣出レバ産難・姙婦眼赤ケレバ産後危シ・姙婦鼻仰ギ明堂動ケバ産近シ

婦人面部何ト無ク黑メ潤無ク又印堂或ハ掌中ニ烟ノ如ク薄白ク犹又黑氣出ル者ハ必ズ難産ス

姙婦涙堂青筋青色出レバ産輕シ然トモ出産延ル也白氣出レバ産病起ル

姙婦耳枯ルハ難産或産後死・姙婦印堂黑色出ル者見死・姙婦金甲青者ハ産後死

内　癥　之　傳

朝六ツ時、晝六ツ時、暮六ツ時、夜九ツ時、此四時ニ左右ノ手ノ指ヲ立テ見ルニ爪ノ間ヨリ湯氣ノ如キ物立登ル者ハ内癥也火燭ニテ透シ見ルモ吉此氣立ザル者ハ癥ニ非ズ右四時ノ外ハ此氣不登、氣ノ立様ハ紆リナガラ直ニ立ハ未レ潰グル〳〵ト卷テ立ハ内ニテ潰レタル也

瘧　之　傳

大推ノ邊ニ赤氣起ル此赤氣ヲ指ニテ押バ振ヒ止ル也此ニ灸スレバ則截

狐　狸　之　傳

天遷日月角ノ邊ニ麥ノ黑實ノ如ク一點アリ左リニ在ハ牡狐右ニ在ハ牝狐也又背ノ明堂ニ同ジ一點出ル也又横脇腹ニ塊物アリ右兩所ノ點大ニメ滯色ニテ艶無キハ狸也

狸ノ塊ハ背中ニ居ル背中ヲ探ル可シ狸去レハ兩所ノ點消ル也

眼人ヲ見テ直ニ下ヲ見ルハ狐付也・瞳子格別小サク成ハ狐付也・大指ニ黑氣有ハ狐付也

痘　瘡　之　傳

耳ニ紅氣出又命門ト明堂ニ赤點出ルハ痘也耳ハ最モ早ク色ヲ見ス者也

耳、輪斗リ赤氣出テ外ニ赤點不レ見メ熱冷ザレハ他病也最モ重シ

命門ニ痘不レ出トキハ痘輕シ出レバ甚重シ

命門ノ色黑キハ難症也色赤ハ熱多キト可知・睫長キ者ハ痘重シ

皮ヲ撮上テ見ルニ皮ト肉連リ上ル者ハ偏枯ヲ病ム皮斗リ上ルヲ吉トス

附ニ四診備要後

紫髯道人細井氏者南越堅官也、嘗學ニ相法於石龍齋一又聞ニ律意於南谿翁一、自謂相法可ニ以爲ニ望診之一助一、聲律可ニ以爲ニ聞診之一助一、夫四診者堅家所レ當レ先也、而世堅往往忽レ之、道人將ニ講明一焉、今先擧ニ望聞二診所ニ關旁載ニ經驗奇方一以爲ニ一書一名曰ニ四診備要一、道人少時學ニ本艸於蘭山翁一、頗

諸藥物一且以善畫圖模寫諸品形狀附修治法主能說於其後以爲一書名曰本艸精義又考究方伎家所用度量著分量考道人今年六十有餘矣可謂勤也、頃者來于浪華將以其諸書上木焉、其志之壯豈可不賞歎哉、雖爾道人久在其國不漫出遊以成斯業若大都人見之恐有不免俚言之譏予謂讀者唯取其所得而可也、一日道人語予曰、吾初學多岐氏博覽群書、又交有名士多聞衆說今吾所記者皆擧先賢所言、又抄群籍所出未嘗少加私意竊擬述而不作之意也嘻可謂篤矣、不可與輕薄好名之徒同日而語也、予、今年老感其志敢述一辭贈之。

弘化丁未孟冬　壺山老人　中川　故識

×

詩經名物圖解自序

昔在孔子敎人學詩之法以多識於鳥獸草木之名、然而比及後世其品物或古有今亡、古今以世異其名、或彼有此無、東西以地異其形動輒致錯謬莫能辨識焉、是故後世審其品物莫如據國、於是梁有毛詩圖三卷、唐有毛詩草木蟲魚二十卷、宋有馬和之毛詩圖、而今皆不傳之、清徐雪毛詩圖說詳審有所可據、而本邦論名物有著稻若水、新白石、貝原篤信、松岡玄達、如菴野必、大江希南、小野蘭山翁等之先輩、然恨有其說而無其圖、惟有岡公翼者著品物圖考、然於其形狀有未能不慊然者也、於是乎予欲成一書以問乎世久矣、今玆秋客遊京攝間以謀諸畫工某因重審其形狀加以著色辨之、色相令童蒙易辨識焉、其如解說從先哲之舊敢不改易、如圖說亦悉所難其辨識者暫闕之以俟後之君子云爾。

弘化四年丁未八月　越藩　細井　徇

花木淡齋

名は鴻又は榮後に馨助と稱し淡齋或は澹齋と號す京都の產にして皆川淇園の門人たり博く經書を究め最も周易論語に通ず則ち儒を以て福井藩に仕へ七人扶持を食み家に在りては經書を講じ後に醫を業とす而も性恬淡にして淸貧に甘じ風姿仙骨晩年居を木田長慶寺の傍に卜して

我宿のかきねの泉あさけれど獨しくめばにごらざりけり

の謌あり文久元年五月十二日卒す享年七十有三法名を淸池院鴻翁日馨居士と云ひ本門法華宗妙法寺に葬る

題梅花書屋圖（絕筆）

兩家各有梅竝圃靠山隈似互問安否淸香日往來

新年作

一樹盆梅白髮前堂中無恙舊青氈屠蘇不飲君知否羞與兒曹爭後先

寢覺牀

寢覺牀邊奇勝饒浦郎曾此夢迢迢如今人世慕仙去曷若當塗飽喫蕎

夏夕

月出墻廊凉氣生暫支小榻送初更飢蚊頗慣吮人血箇々匿來不肯鳴

細井徇著詩經名物圖解跋

皇邦物產學之興、不レ詳ニ厥初一、在昔天地肇判乾坤爰定必有レ物矣、有レ物則必有レ名、正名然後物正、由來舊矣、想古書不レ傳和名鈔其遺言乎慶元豪賴以還搜索稍廣、於レ是稻若水、新井白石、松岡元達、岡本一抱子、諸先生前後輩出互相講明、詳略靡レ遺逮迨ニ近代一小野蘭山先生出焉、則又益講究之訂ニ其訛僞一、而折ニ衷之一、無復餘蘊矣、藩細井紫髯先生、早歲遊ニ於蘭山先生之門一、鑽研尋究若ニ干年於茲一矣、往歲講ニ書於京攝一、特以レ精ニ本草學一見レ稱、應ニ書賈之懇請一、著ニ此編一、船筏於多識之津功不偉乎、夫學有ニ專門儒者一、以講レ經爲ニ專科一、群籍無レ所レ不レ通、至ニ於物產一則或略焉蓋有レ所レ不レ遑レ、及也、今先生醫者也、葩經儒書也、先生之著ニ斯編一、意專在ニ乎考ニ證名物一、豈敢代ニ儒者一、說ニ葩經一云爾哉、然名物正則庶ニ幾乎詩人諷喻比興之旨一、由レ是以益著也、是先生之意耳、覽者諒察可也、是爲レ跋

橋本長綱

字は君羽・海量又は發陳堂主人と號し更に君命により春藏と稱したるも後ち彥也と改め終に長綱と名く家世福井常盤町(現大和上町)に住す其先は桃井義胤の裔に出づ卽ち長德を以て橋本家の高祖とす長德は寬文年中江戸に出て武術を講究し次て天和元年幕府の侍醫西玄甫の門に入りて外科を學びたりしが其技長ずるの故を以て元祿元戊辰年十二月十五日福井藩に聘せられて藩醫に任ず長綱は其七世の孫にして實は福井天草町(現寶永下町)田代春綱の三男たり五世橋本春貞子無きが故に君命に依り出で て其養子となり十三歲にして治好公側仕の命を受く蓋し養父春貞は御匙醫師にして恩寵ありしに因る文政四年七月九日春貞卒し其八月二十九日家督を嗣ぐときに歲十七卽ち累世外科を以て藩に仕へたるも長綱に至りて內科と相待つべきを主張して之を研究し兩ら名あり文政十二年二十五歲笈を負ふて紀州華岡隨賢の門に入りて外科を修め又京都に赴きて內科を某に產科を女醫博士香川滿定に學び居ること三年學成りて歸藩す天保四年九月十一日奧御外科醫に任ず時に歲二十九同十一年八月五日本道兼帶を命ぜらる(當時は內科を以て本道となし外科眼科等を雜科と稱して輕蔑せり長綱は其榮大なりと謂つべし)嘉永元年十二月二十八日奧醫師順序を命ぜられ四年二月十一日御匙醫師見習御外科兼帶務向本役同樣たるべきの命あり(當時は外科に於ては御匙醫たることを許さず蓋し特典なり)同年十月十六

日御匙醫となり奥御外科兼帶故の如し同五年御匙格を以て御留居詰を命ぜらる其三月疾を以て拜辭す長綱少壯酒を用ゐざりしも中年に至りて頗る之を嗜み且つ盆梅を愛して坐右に置きしと云ふ藩に奉仕すること三十二年藩公に隨ひ江戸に往復すること六回同年十月八日卒す蓋し前年二月入浴の際過て胸部を打撲し爾後數々喀血したるに基因すと云ふ享年四十有八

長綱六男三女あり三男二女夭死し三男一女生長す卽ち長女烈は鯖江藩士木内左職に嫁す次は綱紀(左内)次は綱維(彦也)次は綱常(琢磨)と爲す長綱初め綱紀を以て醫名を天下に擧げんとの素志なりしも春嶽侯擢でゝ之を參政に用ゐ經國の事に竭して之に坐し其名却つて天下に轟き綱維は幼より武藝を嗜みたるも抂げて家業を嗣ぐに至り三十九歳にして沒す綱常に至りては最も力を醫事に勗めて其名一世に高く華族に列せらる蓋し兄弟各國事に竭し克く乃父の志を貫きたるものと謂ふべし嗚呼以て瞑すべき哉

今長綱が逸事と稱すべき一二を述べん春嶽侯曾て脛骨疽を患ふ時に長綱未だ御匙醫師に至らず而も外科に精通するの故を以て侯特に命じて之を診療せしめ其療法を下問せらるゝや對て曰く是れ腐骨脫出せば自ら痊んと後ち果して腐骨自ら脫して其疾治す卽ち侯其腐骨を賜ふ又嘗て長崎の猪俣瑞英を家に延き淹留一年就て西洋醫術を受け動物を剖見すること數次天保十一年十月刑屍解剖には頭部解剖の督務たりしもの此素養ありしに由る當時の筆記及び猪俣の齎したる洋風の匾額洋字を畫せる衝立等現に橋本家に存す又外科に於ける止血法としては當時は烙鐵を用ゐるのみなりしが石灰水の奏效あるを知りて之を常用せり又當時の醫は人の死に瀕するや每に龍腦麝香を濫用したりしかば其效用に殊別あるを說き麝は表より裏に達せしめ龍は裏より表に達し大同小異なるも用法自ら異なり卽ち麝は神經興奮衝動鎭痙の效ありて龍は衝動發汗の效ありと明む又弘化の始め藩士某の妻の乳癌を診察して藥石效無し須く截除すべしと說けるも肯ぜず遂に死するに至りしと云ふ是より先き旣に西村某の癌腫を手術し截斷術を施したることあり蓋し未だ西洋醫術の行はれざるに方り長綱は旣に其優れるを知りて之を患者に應用したるは福井藩に於て特記すべき事とす左に袖中より出てたる辭世の詩橫井小楠に贈るの詩及び門弟を小石元瑞に紹介して得たる其返信とを揭げて一は西洋醫學を擴めんとして獲ざる鬱勃の感懷と一は子弟に對して普通見るべからざる溫情とを偲ばんと欲す

齡越四旬又八年一身無私意慊然風塵消盡從玆去魂宿高天明月邊

夢遇橫井碩學醉話數刻碩學問近作卽示一詩愕然夢覺兩腋有汗

牛後且愧寄身徒伍鼠尾甜辛天公若有幸我願使餘齡養眞痴人之夢

小石元瑞よりの書翰

五月念一日之御帖去月十七日落手愈御多吉之狀承候而不耐欣抃候藤野容庵子入門之義縷々御申越

卽舊門人湛齋近頃又々在塾に付其節何角執計今日より入塾に相成候萬御放慮可被成候右先人江戸

え御出之節豚兒中藏御相識之由豚兒も申居候追々引立可申と存候右之御報迄如此に御座候草々

七月十日　小石元瑞

橋本春藏樣

附記　文中藤野容庵云々の事は拙家の親戚たる本莊村藤野恒宅の祖先たり容庵は初め橋本長綱に師事して其高弟たりしも更に師長綱の紹介狀を持ちて京師に赴き小石元瑞の門に入りて學を修め業成りて鄉に歸り本莊村に於て始めて蘭方醫術を以て開業し盛名あり古老今も之を語れり恒宅は現に家業を嗣ぎて其名郡内に高く氏の弟嚴九郎は現に解剖學を以て東北大學醫學專門部教授たり

大岩主一

主一は丹生郡在田村眞宗法滿寺圓燈の四男にして十二歳のとき三河國西尾松平和泉守殿支配丹生郡天王村陣屋附屬醫松山松庵に就て漢學を修むること凡そ六ヶ年十八歳の頃加州大聖寺藩に蘭醫生駒玄龍あるを聞き往いて是に學ぶこと二年次で京都に赴き小石元瑞・日野鼎哉・新宮涼庭の三家の門に入り二十五歳にして歸國し福井濱町（現・佐久良下町）に居を卜して業を開く時に天保三年なり當時福井に於ては半井・笠原・橋本・宮永の徒月六回の醫學會あり（第一章越藩福井醫史參照）主一亦是に入會して漢醫學を研究したるも蘭醫學の大に是に優るを說破す即ち半井・笠原二氏は主一の紹介を獲て京都に赴き小石・日野兩家に入門し專ら蘭醫學を修むるに至れり既にして春嶽侯其器を愛し擢でゝ藩醫に用ゐ侯に近時したるも文久二年江戸在勤中虎列拉に罹り八月八日靈岸島の邸内に沒す享年五十有三

宮永欽哉

名は豫字は子修小字は欽吉長じて良山と稱し後ち欽哉と更む幼にして父に醫業を受け十九歳の時京都に出て新宮涼庭の門に入り蘭方醫學を修むること四年次で大阪緒方洪庵の門に轉ず嘉永四年更に江戸に赴き杉田・箕作の諸家に師事して蘭方醫術を學び二十六歳にして歸國し業を開くに治を請ふ者多し而して傍ら同志半井仲庵・笠原白翁・橋本左内等と社を結び研學怠らず隨うて業を受くる者數十人あり安政四年藩より醫學所句讀師の命を受け加ふるに和蘭砲術書及び練兵書を翻譯せしむ同五年明道館洋學句讀師に任じ銀若干を給ふ欽哉性佚蕩痛飲客を愛し細事を好まず其醫術を施すや往々人の意表に出で奇功を奏すること多かりしと云ふ元治元甲子年痔を病んで歿す享年三十有八惜哉

益田宗三

祖先は甲斐の人益田新左衞門にして武田信玄に仕へ其男宗圓齋は醫を好みて塙芳啓院宗悅の門に入りて修學す明暦年中四代藩主松平光通公に召出され次で嫡男宗圓（壽庵）後を嗣しも貞享年中御半知の時御暇となり同四年五月再び召返されて十人扶持を給され元祿十四年十一月進んで百石を賜ひ享保六

年五月更に五十石の加增あり三代宗圓に至り延享元年十月奥醫師となり同三年五月御匙醫に昇進し百五十石十人扶持となり家世宗圓と稱し執匙醫格たり宗三は即ち三代宗圓の四男にして幼名を遵と云ひ福井城之橋一番町（現豐島下町）に生る宗三初め醫學を父宗圓に受け嘉永七年二月藩主の許可を得て橋本左内・魚住順方等と共に江戸に赴き坪井信良の塾に學ぶ時に歳二十六安政三年歸國して醫學所蘭學句讀師雇となり同四年四月十三日明道館洋書句讀師定詰仰付られ十月十三日御含の旨ありて江戸へ出府仰付られ（三人扶持）砲術書翻譯御用を蒙る十一月同姓長庵佐倉に於て醫學修業中病死により其家督相續仰付られ二百石を賜り表醫師となる此時七十日の御暇を願ひて歸國す十一月十六日繃帶書翻譯並に修業仰付られ佐倉に赴き佐藤舜海に師事して外科學を修め佐藤塾の塾頭に擧げらる翌六年虎列刺流行に就き出府越前藩邸上屋敷に滯在し萬延元年正月二十六日修行濟にて歸國す其三月十一日奥醫師となり更に御含の旨を以て三月二十六日出立し横濱御陣屋詰仰付らる然れども時恰も佐藤舜海の長崎へ遊學するあり則ち藩命を以て是と同道研學するに至る實に萬延元年十一月なり文久元年四月十七日皆傳の趣を以て歸國し其五月二十八日御匙醫師を拜命す同三年春嶽侯に隨うて上洛後は肥後薩摩へ岡部豐後酒井十之丞使節として差遣の指添として同行し或は京都堺町門長兵騷擾にて藩兵手負者の治療に從事し或は春嶽侯と共に征長の軍に隨ひ小倉に行き翌年正月京都在岡崎村の藩邸に滯留し其三月歸國す慶應二年四月六日執政酒井與三左衞門より醫學出精他國修行等專ら精勵に付年々銀十枚賜るの狀を下され爾來藩に在りて專ら西洋醫學を鼓吹したりしも天命を藉さず明治三年二月二日自邸に於て歿す惜哉法名を興學院瑞譽誠益居士と云ひ福井清圓寺に葬る享年四十有二・横井小楠嘗て書を贈るに智識撰諸六合世界中を以てす蓋し其學殖を察するに足るべし左に佐藤舜海よりの書翰及び春嶽侯より賜りし歌を掲げん

×

すくな彦大國ぬしの神世より醫道のひらきそめけり　春嶽

×

萬延元年佐藤舜海よりの書翰二通

其後者意外之御無沙汰仕候處度々御尋問被下辱拜謝仕候先以御安泰御勤被成欣喜之至奉存候二小生無事消光仕候御放慮可被成下候然者此度者横濱御陣屋御在番之由承知仕候御苦勞千萬之御儀と奉存候御在留中者別段御精學に可有之乍去御不自由勝奉察候小生も殊に寄當秋者主人用にて出府仕候間得閑候はゞ横濱巡見仕度久々にて得拜面可申候　御同藩二員御越被成誠に汗顏之至に御座候御修行に相成候はゞ此上もなき大慶に御座候へ共御存之通私未熟生にて恐縮之至に奉存候　岩佐歸郷之節内願仕置候御先君之御書其節者何か故障御座候而御揮毫難相成候由被申送承知仕候乍去當時に至ては別に嫌忌に觸候儀も有之間敷候哉に奉存候間中井君にても小生内情申通御揮毫之

程相成候はゞ頂戴仕度此段御周旋被成下度奉願上候　草々頓首

五月十八日

益田宗三様　貴下

佐藤舜海

×

當年者暑氣尤甚敷相覺申候愈御多祥奉欣喜候小生無事消光仕候御放念可被成下候陳者官藏繃帶書永々拜借忝以御蔭全備仕候折節炎熱之節に御座候醫學局之持出し習行仕候新奇之術有之實に舊染を一掃するに足申候御厚德深拜謝仕候此度返璧仕候御落掌可被成下候御序之節其筋へも宜敷御禮被御傳可被下候　一過日者高田文卿差出候處厚御周旋被成下忝奉謝候コンラシー治療書採入不仕殘念に奉存候御逗留中右書舶來仕候はゞ御世話被下度奉願候貴君にもランセット御採入之由羨敷御事に御座候定て奇説珍方可有之實に治療相施候には右等之書によりて實驗を博不仕候ては必死を救候儀難相成候御勸番中御讀過被成御歸宅之上實地に御施被成候事あらまほしく奉存候岩佐も公命によりて長崎遊歷之由羨敷事に御座候乍去長崎遊歷之者之説には只松本良順のみの爲にて藩臣之爲には餘り相成不申候由申候ものも御座候授業之振合如何之者に可有之候哉一度は罷越樣子伺度ものに御庭候小生へ御托し御同藩士何も御勉强に御座候且不學不術之拙手まなびならひ候事無之と恥入候而已に御座候書餘期後音候　草々頓首

七月三日

益田宗三様　貴下

佐藤舜海

半井仲庵

半井仲庵の父諱は緯宇は君熙・南江と號す其祖先は爲竹受慶法眼たり父南江天保十一年致仕す依て仲庵其後を襲ぐ仲庵諱は保宇は伯知通稱を元冲又は仲庵と云ひ南陽又は晩香と號す嘗て京師に出でゝ某侍醫の門に入り更に大阪に轉じて中川脩亭に師事し學成つて歸國し業を開くに治を請ふ者甚だ多し而して貧者に對しては禮を受けず性忠實篤行にして卓識あり傍ら詩文を草して慷慨の餘憤を洩すこと數々なりき四十一歳の時始めて和蘭文典を讀み後ち扶氏遺訓を遵守し藩醫長として進んで西洋醫學の漢醫學に勝るを稱し愚論を排して之を隆興せしめたるは洵に其勞大なりと謂つべし仲庵宿痾あり則ち大阪に往きて蘭醫越爾蔑連斯に治療を受け幾ど癒て將に歸らんとす偶ゝ急病により溘焉として歿す實に明治四辛未年十二月二十八日なり享年六十・愛宕山に葬る男澄嗣ぎて京都に移住す

元日上直

天令吾曹老太平不嫌上直自新正每看梅蕾便撑杖滿袖清香去入城

記西哲扶歇蘭度之語

小業唯存起貌心幾年閭里作浮沈感恩寒士雙眸淚曾勝權豪一握金

×

佐久間象山よりの書翰

過日は始て拜訪獲識韓欣喜之劇奉存候爾來寒威も一しほ甚敷覺え候處御與居何の御障も無御座候歟然は此程及御内話候一條何分可然御勸考奉冀候愚考之通に候へば當人學業上達之便も得候は勿論　御本藩始終之都合にも畢竟可宜又差向き候所も企候字書板行暫時に殘取候へば當今天下之有益此上あるましくと存候に就き此頃も態々推參拜話仕候儀に御座候敢て小子一己之爲に遊說仕候筋には無御座候此處幸に御照亮被下度候將先夜は遂長座御提燈迄拜借難有奉存候右返上仕度旁如此に御座候霜威折角御保護奉祈候　以上

十二月四日　佐久間修理

牢井元冲様

啓白及御話候字書之序文試に刻させ見候所筆工何分にも拙劣にて意に叶ひ不申候彌ゝ官準を得候後は改め度と奉存候一通座右に有之候まゝ御慰迄に附上仕候　以上

×

貴翰拜誦仕候如尊諭新寒之時下愈御健勝被成御座候段欣喜之至奉存候扨御同勸樣方醫術爲御修行當地へ被遣御座候所素より師傳も無之只書に隨而漸々試候事故拙なるは申迄も無之恥入候へ共壯年出精之輩次第に御出に相成候に付是に而被勵新術漸々試驗仕候御入塾之義者却而拙家之大幸に御座候處御叮嚀御賴被仰下恐入奉存候御遠方之諸君に御座候間自然御上達も可有之義に者御座候得共御壯年之義故乍不及成丈御心付御世話可申上候猶備中守御掛合之義御六ヶ敷事とは奉存候へ共他境之御人御出之義是迄無之上地にて家中二三男抔心得違之向も有之候に付向後之爲め無據相願候處早速御承知被下辱奉存候且御國產之海膽醬三箱御惠投被成下偏土之義誠に珍物夫々分配も仕候別而難有奉存候尙御三人之内御出府之節可奉拜謝候右尊答迄　早々頓首

小春十又四　佐藤舜海

牢井仲庵樣　同　泰然

勝澤一順樣

二白　時季御自愛專一奉祈候モスト御覽被成度由に付則御廻し申上候　以上

橋本綱維

長綱の第二子にして幼名を綱三郎と云ひ後ち綱維と改む幼にして藩田宮流劍道師範鍔淵三郎兵衞に就て武藝を修め安政四年四月十七歳にして兵科局詰命ぜられ同月江戸に赴き坦庵江川太郎左衞門の塾

に入り航海術を學び傍ら齋藤新太郎に擊劍を研き更に轉じて大木仲益・坪井爲春に和蘭語を習讀し爲春の塾に住す同五年十二月坪井塾長大鳥圭介を登用するに際し其塾を辭して圭介と共に江川邸内に返り和蘭雜書を研究す同六年十月七日兄綱紀死罪に處せらるゝに至りしを以て歸藩す其十二月福井藩醫學句讀師申付られ是より決然醫學の研究に從ひ動物解剖及び人體解剖實驗を行ひたり時に歳二十二蓋し安政六年十月より四年五ヶ月間兄左内の累寃に依り他國修行を禁ぜられたるに因る元治元年四月藩禁を解かるゝに及んで直ちに長崎醫學校に登り蘭醫ボードインの講筵に加はり慶應元年九月歸郷す留學一年五ヶ月にして人身究理・内科書・眼科書・産科書・毒物書等を聽講し其十月醫學助教に同二年十二月十六日奥醫師格と爲り翌年八月再び長崎醫學校に到り蘭醫マンスヘルトに就き解剖及び外科を見學し明治二年五月當藩新に病院を起すに際し醫學所教授兼病院長に任じ藩主侍醫に補したりしも爾後戊辰の役西南の役臺灣病院等に轉戰し正六位勳四等一等軍醫正に進み十一年五月二日大阪鎮臺病院長仰付られ其六月二十五日病を以て卒す享年三十有九東京湯島臨濟宗麟祥院に葬る嗣子無し即ち弟綱常の三男綱規をして後を襲がしむ

長兄左内より送別の詩

弟子維常好講兵籍今將遠遊故賦此爲別

觀感此行應有益莫將空理談兵籍海東五十三程間多是龍驤虎鬪迹

今來書劒事周游雄氣堂堂貫斗牛他日鈴韜成業後遂能呑五大洲不

×

安政元年八月在江戸左内よりの書翰

八月十二日立御簡同二十二日相達致披覽候秋冷稍〻相催候處先以母上様益〻御堅安被成御眠食奉恭壽候隨而一統御無事奉賀候此地無恙修學罷在候御休情可被下候

一市村與八郎殿武藝上達之由此表齋藤にても隨分宜評判有之候塚谷鍔淵も不相變出精被致候様子此兩人も逐々上達可有之貴丈等偖々扶助を被得候儀何共欣然之至に候

一海苔相達夫々へ御遣し被成候由致承知候

一吉田先生御老母之儀先便半井仲庵氏よりも様子申參り候何分にも早速治療之程待居候

一魚住眞下兩人至て健に相暮候兩人共宜申出候

一去る六日元服之由目出度奉存候以後は益御身の行肅整に相成候様祈居候十五以上は大人之數に加り候事故一般氣象御立替可被成候

一論語通鑑輪講有之候由何分折角御研究可被成候經史共に有用之書に候得は徹底御習熟可被成候

一當地昨日より快晴今日は晝暖度日中七十二度

左内

八月二十五日認

綱三郎殿

尚々時下御自愛奉祈候破魔五郎如何書物出精致し候歟御申越可被候　以上

註　書翰中の齋藤は齋藤新太郎・吉田先生は東篁・破魔五郎は橋本綱常を指すものなり

笠原白翁

良学は子馬通稱良策後に白翁と號し鐵佛無涯堂・桂窻・天香樓等の別號あり文化六己巳年五月十日足羽郡深尾村に生る十三四歳の交福井藩儒高野春華の門に入り漢籍及び音律横笛等を修め十五六歳の交濟世館に通學し且つ特に妻木陸叟に就て本草學を究む文政十二年三月江戸に出で昌平橋外磯野公道の門に入り幾もなく其塾頭に擧げられ醫學を研究す天保三年三月歸國し福井木田中町に開業し同七八年の交加州山中温泉に遊び綿屋に止宿せしに偶〻該地大武了玄の醫風を聞て之を訪ひ初めて西洋醫學を知り蘭醫學を學ぶこと數月家に歸りて之を實施す是れ藩中西洋醫術開業の嚆矢たり爾來學友半井仲庵・山本宗平等に語ひて大に爲すあらんとす而も大岩主一の蘭方醫なるを仄聞し之を訪うて益〻蘭醫學の發達に努む然れどを白翁謂へらく有力誠實なる藩醫を得ずして此新法を擴張せんは頗る困難事に屬すと爲し仲庵を說き茲に三名戮力協心學術を研究し遂に天保十一年三月自ら京都に赴き日野鼎哉の門に入り(大岩主一傳參照)翌年三月に至り歸國し盛に蘭方醫學を鼓吹す一日日野鼎哉は生駒耕雲・齋藤策順等を隨ひて加州山中温泉に遊ぶ則ち白翁亦隨伴す而して痘苗を福井藩に獲且つ之を各藩に傳播したる次第に就ては本文越藩福井醫史を讀まん者其當時如何に白翁が苦心慘澹たりしかを知るに足らん蓋し其功績に至りては獨り或が鄉土の誇りたるのみならず普く邦家の忘るべからざる恩惠あるを思ふ予は茲に特記して他日の證左に照さんと欲す明治十三年八月三日東京神田三崎町の僑居に於て卒し後ち阪井郡田谷村先塋之次に葬る・享年七十有二

×

正二位春嶽及び正四位巽嶽兩舊藩主よりの弔狀

日本全國未だ開明の域に進歩せざる以前天保年度に於て翁始めて泰西醫學術の缺くべからざる鴻益を看破し主として侍醫半井保等に圖り種痘及び此學術の盛大に行はれんことを鼓舞し共に竭心共に戮力遂に翁の目的を達し舊臣中に國手を現出せり猶醫道は他縣人に越前を以て嚆矢と稱し其盛に行はるゝを讃美せり是れ翁の最大の功を謂はざるべからず茲に訃を聞て曷ぞ哀悼に堪へん仍乍聊祭資料拾圓を贈る

×

和白翁韵

心事分明無所疑四時佳興坐傾扈此生一局既收了忘却人間喜與悲　横井小楠

内海玄高・村上三亭

船岡周伯、

周伯は文化十四年三月二十六日生・幼名は秀藏又脩藏と云ひ妻木陸叟の四男なり母は妻木宗伯愿の女諱は阿金(カネ)天保三年二月十一日舟岡良意知政の養子となり名を周齋と改む京都に赴き内科を森田義章に眼科を眼科錦囊の著者本庄普一雋篤に學ぶ天保十年二月十六日家督相續家祿二百石を襲ぎ表醫師となり周伯諱は知衡と改む嘉永三年二月二十五日奥醫師(侍醫)進む同六年十月十七日奉命福井を發し二十九日東都に着す先是米國合衆國の使節浦賀に來りて互市を請ふ幕府諸藩に令して兵を發し沿岸を警護せしむ我藩亦之に與りしを以てなり翌安政元年四月五日東都を發し十七日歸藩す元治元年五月二十五日御匙醫格(准侍醫長)に進み六月二日奉命福井を發し六日京都に着す此時長州兵京都附近に屯在し事態不穩我藩堺町御門を警衛せしが遂に開戰するに至り長兵敗れて四散せり八月二十二日京都を發し二十六日歸藩尋で幕府第一回征長の師を出すや藩主茂昭公其副總督に任じ豐前小倉に陣營を布きて九州の諸侯を指揮す周伯駕に隨ふて福井を發す實に同年十月十六日なり二十五日大阪に到り十一月十八日小倉に着す然るに長藩降りて和成り戰を見ずして翌年正月九日小倉を發し二月四日歸藩す

明治二年二月晦日醫學館講師に任ず同年八月十二日醫業を免ぜられ大廣間留守番となる已にして罷む先是我藩漢方醫の洋方醫に劣れるを觀て大に日新醫學を皷吹す故に漢方醫を墨守する官醫數人の業を免じ普通の士とし家祿は故の如く給せらる周伯其一人たり(是れ日本全國中にて唯我藩と鍋島藩即肥前藩とのみに行はれたる大英斷にして漢方醫を禁じたるに同じ)後年廢藩置縣となり舉國一致の政令を布くに及び官復た此輩の開業を許可せり依りて曩きに免ぜられたる者にして再び開業するもの尠からず周伯之を屑とせず終世復た診療に從事したる事なし山脇玄博士の父は即ち親友にして同運命の人なりしなり醫業を罷たる後名を周介と改めたり

明治二十二年十一月十一日男英之助醫科大學を卒業せるを以て十二月七日全家東京に移住する爲め福井を發し十九日東京に着し小石川區初音町十番地に住す尋で東京府に移籍し東京府士族となり翌二十三年四月九日戸主を長男英之助に讓りて老す同年九月八日牛込區築土八幡町八番地に移住轉籍す明治二十六年九月五日慢性氣管支加答兒・急性胃腸加答兒を病み衰弱に陷りて率す享年七十有七・法名を至道院仙岳周齋居士と云ふ谷中天王寺に葬る・長男英之助は醫學博士にして 現に 岡山醫學專門學校長心得兼教授たり父名を辱めず

魚住格

幼名を外三郎と云ひ長じて順方と稱し後ち藩主より格の字を賜りて是に改め松香と號す父魚住順道

は御目見醫師にして福井三上町に格を生めり格は嘉永三庚戌年四月浪華に出て漢蘭折衷の某醫に師事す時恰も橋本左内・宮永欽哉等緒方洪庵の門に在り則ち十月格も亦其門に入り和蘭譯書を研究し傍ら眼科醫兒玉廉造に通學して其科を見學す五年二月故ありて歸省す七年二月橋本左内・益田宗三等と共に再び江戸に赴き坪井信良の塾に入り蘭學を研究し殊に究理書を修む其十月大震災に坐し塾寮崩潰す依て常盤橋藩邸に請て半井仲庵の宅に寄寓し毎夜半井・益田等と共に蘭書を會讀すること凡そ二ヶ月にして十二月歸國す時に原書一部を下賜せらる其添狀あり

一昨春より此表え罷出本業眼科西洋原書等格別致困勉且坪井信良に被仰付候蘭書寫物御用も相勤候に付旁別段之譯を以眼科書從御手許被下置候

同三年三月一夜笠原良策・大岩圭一・宮永欽哉等と會合して原書濟世三方輪講の事を議し初學者の爲に簡易なる和蘭文典飜刻を一決し就中大岩圭一之を主張す則ち直ちに請願して其許可を得格は板下執筆の命を受け仲夏より飜刻に著手し晩秋に至りて成る和蘭語學原始是なり本書には其卷首に紀元千八百四十四年刊窩々所德溫實學校利用和蘭語學原始と書し其奥付には皇安政丙辰季秋飜刻と記し且つ越前國校藏版の印影あり即ち之を濟世館に納めて初學の階梯と爲す而して現に濟世學舍所藏に係る當時飜譯の原書に附箋あり曰く當時彫工數十名を試み拙劣其採用に苦しむ漸く伊三郎源助外二甚七官治の五工を選拔し得て之に命ず方今彫刻精工驚くべし堂後黃檗寺に於て業を執らしむ四人交番監視と同四年五月濟世館の洋學句讀師を命ぜられ萬延元庚申年十月前年來の虎列拉流行に顧み佐々木悌全と共に長崎に到りポンペに就て治療法研究申付られ翌年正月二十日發足す

一近年暴瀉病流行に付治療方爲研究京阪を始長崎表え來早春より罷越樣被仰付候

但路用金拾兩被下置外に爲用意佐々木悌全兩人合に封金參拾兩御渡被成候事

途次浪華緒方の門を訪ひ其譯述に係るカンスタット虎列拉書並に松本良順譯虎列拉療法に就て質問し獲る所多く是より直に長崎に赴き內科・外科・眼科を傳習して三月復命す

却て說く其初めて長崎に到るや小曾根乾堂を訪ふ時宛も五代才助椅子に凭り共に談酣なり五代曰く此地に來る蒸汽船を購求して大商法をなさんと欲す云々乾堂曰く此醫師福井藩にしてポンペに就き虎列拉療法研究の爲めに來ると五代曰く在留蘭醫未だ良醫なるやを知らず速に弊藩に報ぜんと欲す伏して一書を煩さん事を乞ふ格曰く貴藩に八木元悅君あり坪井塾にて同窓の友たりと是に於て翌日尺書を認めて五代に托す文久二年再び長崎に至るに八木元悅 既に松本塾に留學せりと是に由りて之を觀るに越藩は既に醫學に於ては薩藩の先導者たりしと斷言するも其妄ならざるを知るべし而して格はポンペに就かんと欲せしも在ず則ちシーホルトの來るに會し長藩の通辯者靑木周藏（往年外務大臣たりし人にして今は故人たり）の通辯を以て會見して其病因療法を質し二月歸福して八月業を開く爾來出ては長藩騷動に堺町警衞場に加はり或は會津の役に赴き入つては病院監事たり主務たりしも明治六年

一月十九日以來專ら自宅に於て治療し二十七年三月八日病を以て卒す享年六十有三・法名を天眞院大安格道居士と云ひ曹洞宗總光寺に葬る

岡部養竹

名は雍字は伯知・西河又は牛山と號し後に外一郎又は養竹と稱す文政十二己丑年十月福井新屋鋪一番町（現豐島下町）に生る養竹十一歳の時より藩醫勝澤一順に就き十二歳の時同妻木敬齋に就て漢醫學を修め次で藩儒者前田梅洞・吉田東篁に師事して特に經書を學ぶ嘉永二己酉年九月京都に出で百々一郎に就て漢醫學を修め百々素問靈樞を講じ次て慨然として洋學に志し同學笠原良策の紹介を獲て日野鼎哉の門に入り始めて醫範提綱・內科撰要・醫療正治・名物考・病理通論・扶氏驗經遺訓等の飜譯書を誦讀し同三年師鼎哉の病死に由り歸藩す偶ゝ市川齋宮なるもの杉田成卿の門下に出で砲術家を以て藩に聘せられ元濱町大安寺別莊に寄寓す則ち是に就て和蘭文典を修め嘉永四辛亥年二月更に江戸に赴き坪井信良の門に入り和蘭原書を學び序を逐ふてローゼ人身窮理イスホルシング梨奢蘭度人身窮理等を讀むに至る同年十二月修業手當金として金七兩を賜はる（夢物語の後に附記して更に醫人としての橋本左內を傳ふ參照）同三年坪井信良福井藩に聘せられ濟世館に於て飜譯書を講義し和蘭文典を教授するに際し養竹擧げられて其助教となり官醫一統へ文典誦讀を授く安政五年十二月奥醫師となり慶應元年十二月執匙格拜命明治二十八年五月二十三日卒す享年六十有五・法名を智耕院外一日德居士と云ひ顯本法經宗妙經寺に葬る

高桑實

幼名實吉字は子輝後に八百樹又は實を以て通稱とし道準と號す宮永看山の第二子なり天保九年四月十五日福井堂の後に生る幼時高野眞齋及び吉田東篁に就て漢學を又家兄欽哉に就て蘭學を修む安政三年四月江戸坪井信良の塾に入りて蘭方內科を學び同四年七月轉じて京都に赴き赤澤寬輔に就て蘭方內科を稟け其八月高桑氏の養子に入る同五年十月寬輔の門を辭し更に轉じて大阪緒方洪庵に師事し同七年正月辭して歸藩し濟世館內洋學所助句讀師を命ぜられ閏三月御目見醫師を拜す文久元年五月刑屍を小山谷に解剖して內景の學を研く元治元年長人京都に亂を爲す則ち軍に隨うて堺町九條邸に勤番し事平ぎて九月七日歸藩す既にして征長の軍に隨ひて十一月十九日海路小倉に達し陣中藥品掛を兼務す慶應元年正月橋本綱常と共に小倉より長崎に赴き養生所塾に寄寓してボードインに就て內科を學び同二年八月十三日辭して歸藩し濟世館洋學所出勤を命じ同三年正月十六日教授方助を拜し八月七日教授方に進み年俸五口を給す明治元年會津の役には十月二日若松に入り根據病院診察方たり役終へて同二年二月歸藩し醫學館教授方試補と爲り同時に藩醫に列す同三年七月十八日福井病院醫長助兼蘆田枝病院

主に任じ十二月二等醫に翌年七月一等醫に進み十二月四日病院長を拜す同五年四月二十五日足羽縣權大屬醫業掛に任じ管内の醫務を統監し七月十日敦賀縣醫業掛たり同六年七月十日敦賀縣十五等出仕掛を拜し爾來廢合數數起るも常に醫政に與りて寧所に遑あらず同十三年三月五日後は醫術開業試驗委員を命ぜらるゝこと三回同二十一年十月四日には大日本私立衞生會福井支會幹事を囑托せられ同二十六年四月二十七日松平康莊侯襲封以來初めて來福あり則ち濟世會々頭の資格を以て酒肴を浩養館に戴き又諸般の設備を周旋し或は舊藩主祭祀の事に力を盡して葵紋章盃を賜ふこと二回同二十七年五月福井病院顧問となり年俸六百圓を受けたるも翌二十八年三月之を辭し其四月一日錦下町八番地に醫業を開くに名聲四隣に洽く門前常に市を成せり同三十八年十一月十九日病を以て卒す享年六十有八

石塚雙鹽

名は左玄・鉉臺又は雙鹽と號し福井子安町（現・東上町）に生る父石塚泰輔は醫を業とし母は牧田太右衞門の女二十九歳にして姙娠す此時米飯に細剉（きざみ）の蕃椒（とうがらし）を撒布して之を食するの他何物をも好まざりしと云ふ雙鹽幼にして漢學を父及び富田鵬波に受け漢方醫學を榎並宗純・舟岡周伯に蘭方醫學を細井玄養に修む玄養曰く他年父母を歡養するは必ず雙鹽なるべしと既にして蘭學を福井醫學校に修め又蘭學及蘭方醫學を高桑道準に師事す十九歳の時古語に感じて曰く人生須く世醫たるべく碑醫たるべからずと奮然志を立て福井醫學校助教及福井病院診察兼藥法に歷任し明治四年東京に出で南校化學局及び醫務局に奉職したるも其二科同時に追ふべからざるを感じ醫業を廢して專ら藥學化學を修め陸軍々醫試補・本病院藥劑課勤・陸軍本病院出仕等に歷任し正八位に敍す此年自著鑑藥精義及び藥物鑑定法を陸軍省に獻じて銀盃を賜ひ又檢尿必携を著はして世に公にす十年第二旅團病院に屬して廳島之役に從ひ繃帶器・繃子及び擔架等を創製し甚だ簡便なり八月陸軍劑官副に任ず十一年十二月征討の功を錄して勳六等に敍し金百五拾圓を賜ふ又飲水要論を著す十四年陸軍劑官に任じ正七位に敍す十五年仙臺陸軍病院藥劑課長と爲り十八年勳五等に敍す十九年外科繃帶脫脂法を研究して之を全國陸軍病院に實施す二十年軍醫部下士卒教科書編纂委員に又陸軍々醫學舍教員に任ず二十三年化學死體貯藏法を發明し之を皇太后陛下及び赤十字病院に實施し大に奏效す二十四年七月從六位に敍し古書畫除煤法を發明す二十六年化學食物鹽類編を著し二十七年食養長壽論を著す一日妻に語つて曰く余此著書を以て墓碑に代ふの信念なりと蓋夫婦亞爾加里を後世に遺さんの主義に因るなり同年藥劑試驗委員と爲り從軍記章を賜ひ勳四等に敍す偶有栖川熾仁親王雛子に薨ずるに際し豫防消毒法に從事し御紋章羽織及び金若干を賜ふ二十八年征清の軍に從ひ二十九年三月陸軍藥劑監に任じ尋で豫備に入る後ち征清の功に依り金百五拾圓を賜ふ此年望診法を創め養生法を說き悉く的中す時人則ち神と爲し治を乞ふ者日一日に倍す大學及諸病院に於て藥を投じたる患者來つて診を受くるに速き者は一週日遲き者と雖も二三週日概ね治

癒せりと云ふ三十一年化學的食養體心論を著し世に公にす其望診するや各人の病原を說き勸むるに穀菜食養を以てす之を世醫と比較して太だ奇異の感を抱くも其實施するに方つて果して言の如し則ち全快者有志相會して食養會を組織し毎月養生法講話會を開き且つ食養雜誌を發行するに至る實に盛なりと謂つべし加ふるに舊著食養長壽論を改訂增補し一は以て全國に其法を傳へ一は以て漢文を以てし之を清國に擴張せんと欲し日夜銳意筆を執り稿本既に成り將に發行せんとするに際し俄かに病を以て卒す時に明治四十二年十月十七日なり享年五十有九・法名を天壽院洪譽眞人左玄居士と云ひ淺草淨土宗新光明寺の境內に葬る

雙鹽常に謂へらく人は工夫を先とし勉勵を後にすべし總て著々進むに隨つて工夫を重ねずんば其玄理の妙境に達せずと故に寸陰を惜みて著書するに方り筆を禿して日に幾度か之を代ふるを知らざりしと云ふ

橋本綱常

幼名破魔五郎後琢磨と改め復た綱常と稱し篁山と號す宮中顧問官・從二位勳一等醫學博士子爵にして且つ陸軍々醫總監日本赤十字病院長の榮位を極む橋本長綱の第三子にして母は坂井郡篠浦大行寺小林靜境の女梅尾なり家世福井藩の御匙醫にして弘化二乙巳年六月二十日福井常盤町(現・大和上町)に生る嘉永二年五歲にして嘯峯小林彌十郎に習字を高野眞齋に句讀を覺ゆ同四年漢學を閑山伴圭左衞門及び東篁吉田悌藏に師事し父に就て論語素讀を受く同五年父の死亡後は長兄左內に就て小學講義及び日本外史素讀を受く安政二年十月十八日左內の御書院番組に入るに際し家業を紹ぎて藩醫に列し七人扶持を賜ひ傍ら奈良良元に就て漢學を修む時に歲十一同四年良元の推薦に依り明道館に入り醫學所に通學し且つ半井仲庵に寄寓して調劑を見習ひ業餘富田鷗波宮永良且に漢詩を學ぶ同五年田代萬隆久しく江戶大木仲益の塾に遊び歸國したるを以て就て初めて和蘭文典を學ぶ時に歲十四同六年左內の江戶に在るや詠草數首を贈る左內其才を喜び律詩韻函の他數部の書を與へて之を賞す偶々仲兄綱維歸國すれば日夜蘭學に心を潛め二年にして其大體に通ず萬延元年十六歲にして家督二十五石五人扶持を相續す文久二年正月二十日醫學修業の爲め半井仲庵に伴うて長崎に赴き蘭人シントレルに就て蘭學を修む此秋松本良順長崎より江戶に歸るに方り藩命に依り隨うて東上し麴町松本塾に學ぶ其十一月左內の寃解け特旨を以て藩より母へ三人扶持を給す同三年春良順京都に入る則ち亦之に伴ふ然れども尊攘の論囂々として天下騷然たり此に於か松本・半井二氏の慰諭に依り一旦歸藩して形勢を觀望せんとし三月六日藩主に扈從して歸國し暫く藩醫學校に在りて・ポンペの原書を獨習し傍ら患者の治療に從ふ元治元年十月十六日長伐の軍に加はり小倉に於て功を樹て戰後藩命に依り長崎に到り獨醫ボードインに師事す慶應元年正月二日長崎を去り同二年八月歸藩後專ら濟世館の改革に勗め其の十二月奧外科醫兼醫

學館教授方助に任じ餘力を以て患者の治療に從ふ同三年八月七日藩命に依り江戸に赴き益〻醫術を研究す當時既に渡歐の雄志を立て一日竊に横濱に到り和蘭病院蘭醫マイエルを訪ひ心事を告ぐるにマイエル之を壯とす然れども憾むらくは資金の遠望に副ふ無し依て隱忍自重以て機會を持つとゝし托するに英佛獨の醫籍と幾多の醫療器械千兩の購入を以てし十二月官に請ふて歸省し其書籍機械を以て病院學校を設けんと欲したるも是が採用なきのみならず勝手に注文するとは不埒だと詰責され大いに失望す則ち已む無く之を私債となし書籍及び器械は加州現高峯藥・工學博士の父及び大阪に賣却す一文字屋某是が周旋役たり明治元年六月二十五日會津討伐の役起るに際し軍醫として越後方面に出征し動病院長たり仲兄綱維亦出征して不動病院長たり既にして事平ぎて凱旋せりと雖も綱維は尚ほ留つて軍務を親綱常亦其内命を受けしも故ありて之を辭し歸藩す時に十一月十三日なり綱常の陣に在るや主として蘭譯米醫クロース・ストローマイエル及び佛醫ベルナールドの手術圖解若くはニーマイエルの著書等を參稽して術を施し當時幾百の軍醫中アンプタチオン器械を所持せる者は綱常及び半井仲庵の二人に過ぎず蓋し此器械は曾て私債を以て器械購入の際藥籠中に留めしものなりといふ同二年五月仲兄及び山本良哉・細井專博・馬淵玄仙等と病院設立を圖り岩佐純の私設せる濱町の醫院を買收して無告の民を施療し且つ市醫の處置に苦む者を收容せり綱維は則ち病院長にして綱常及び山本・細井・馬淵等其醫員たり斯如くして更に藩命により五箇の支病院を置きて一般市醫の自宅診療を禁ず同三年正月十三日支病院頭取に任じ佐敎の職故の如し一日君前に伺侯し市醫の自宅營業を禁止し支病院の投藥を掌らしむるの不理なるを痛論し併せて蘭醫を傭聘して醫風の革新を陳ぶ偶〻由利公正（現・子爵由利公眞氏の先）側に在り之を駁して曰く今に至り病院の制度を云々する寧ろ初めより設けざるに若かず且つ外醫を傭聘する蘭に於てするよりも獨に取るを勝れりとせんと綱常曰く余輩病院創設の主旨たる專ら貧民を救療すると共に普通市醫の手を下し難き者を收容するに在り固より之を以て利益壟斷の機關に供し市醫の權利を蹂躙せんとするに非ず然るに今や斯の如し則ち獻言する所以なり且つ醫風を刷新せんが爲め蘭醫を傭聘せんと欲するは方今の醫家概ね蘭語を解するを以て時機に適當ならんことを思へばなりと公正則ち口を噤んで復言ふ能はず如も綱常私かに獨醫を採るの説に服す時に獨醫ボードイン大阪に在るを聞き就て學ばんと欲し十旬の御暇を請ひ獲て十月五日下阪せんとす時に半井澄東京より歸る依つて誘ふて俱に往く到ればボードイン既に在らずして更にメレンスの在るあり乃ち之に師事す閏十月十七日兵部省綱常及澄を召したるも藩議惜んで拒む然れども兵部省之を求むること愈〻切に特に藩に諭達して已む無くば兩者の中孰れかを出すべきを以てすること三度此に於て綱常意を決し藩に乞ひ出でゝ兵部省軍事病院醫官を拜命し傍らブッケマに就て學びし次第なり同四年十月十九日軍醫寮七等出仕に任じ翌五年五月七日之を免じ其二十二日軍醫寮生徒として普國留學仰付られ七月横濱出帆十月伯林醫科大學に入る同六年九月ウルツブルヒ醫科大學に轉じ同七年七月校則に從ひ醫學階梯前期試

驗を受け及第す同八年一月外科教頭リンハルトより准助手の許可を得其八月學術研究の都合によりリンハルトの指揮に從ひ同地駐在日本公使青木周藏の許可を得て墺國維納大學に入り同九年四月下旬維納よりウルツブルヒに歸校し其七月脚氣新說を著はし其十二日醫家普通試驗を經てドクトルの學位を受け九月再び維納大學に遊ぶ同十年二月下旬普國軍醫々制取調を命ぜられ同時に六月迄留學延期を命ぜらる三月十五日伯林に出で略調書を了るに際し本國西南の變を耳にし伯林駐在日本公使官附武官陸軍少佐桂太郎と諮り四月二十二日伯林を發し伊國を經て六月十八日歸國す其七月六日陸軍々醫監に任じ本病院出仕仰付られ同月七日御用を以て大阪に差遣され更に同月二十二日御用を以て長崎に出張仰付られ八月二十日征討軍團病院長仰付られ十月十六日長崎臨時病院附仰付らる其十一月十二日長崎臨時病院附を免ず同十一年一月三十一日鹿兒島逆徒征討の功に依り勳四等に敍し六百五拾圓を賜ひ二月七日文部省御用掛兼勤東京大學醫學部教授を囑せらる七月二十三日建宮殿下御違例に付拜診仰付らる同十二年八月十四日脚氣病院委員に九月二十三日中部檢閲監事部長屬員に十月二十三日本病院御用掛仰付らる十二月十六日從五位に敍す同十三年三月二十二日東京府會選擧に依り東京地方衞生會委員を命ず同十四年七月十四日東京大學教授を兼任し七月十八日東京大學醫學部勤務仰付られ八月三十一日東京大學諮問總會々員に選擧せらる同十五年十月二十一日更に東京陸軍病院長仰付らる同十六年十二月二十五日陸軍卿大山巖渡歐に就き隨行す同十七年二月八日滯歐中東京大學より學事に關する取調を囑托せられ五月十五日醫術開業免狀を受く同十八年一月二十五日歐洲より歸朝二月十日伊太利國皇帝陛下より贈與されたるコンマンドールテルオルデイネデルサンマウリショールツマニ勳章及び墺太利國兼洪葛利國皇帝陛下より贈與されたるダスコンドウルクロイツアルレルヘツキステンフラジョセフ勳章を受領し且佩用することを允許せられ四月七日勳三等に敍し旭日中綬章を授與せらる五月二十一日陸軍軍醫總監に任ぜられ陸軍々醫本部長に補せらる七月二十五日正五位に敍し十月五日獨逸國皇帝陛下より贈與されたる赤鷲第三等勳章を受領し及び佩用することを允許せられ十一月十七日東京府會の決議に依り東京府養育院醫長を囑托せらる是歲獨逸國ウユルツブルク府理醫科學會名譽會員に推薦せられ西曆千八百八十五年一月十八日附會長プロフエツソルドクトル・マース書記ドクトル・ローゼンタール署名の推薦狀を贈らる同十九年三月一日陸軍省醫務局長に補せられ十月二十八日從四位に敍し十一月一日日本赤十字病院長を命ぜらる同二十年一月二十二日皇后陛下の御沙汰に依り東京慈惠病院商議委員仰せ付られ六月二十二日陸軍省より日本赤十字社監督を命ぜらる同二十一年五月七日明治二十年勅令第十三號學位令第三條に依り醫學博士の學位を授けられ十月二十六日日本赤十字社有功章條例に依り有功章を贈與し十一月二十七日常宮拜診御用仰せ付らる同二十二年十一月二十五日明治二十二年八月三日勅令第百三號の旨に依り大日本帝國憲法發布記念章を授與せらる同二十三年二月東京市參事會の決議に依り更に東京市養育院醫長を囑托せられ九月二十五日貴族院令第一條第四項に依り貴

族員議員に任じ十月四日陸軍豫備仰付らる其十二月二十七日宮中顧問官に任じ同日更に宮內省より日本赤十字社監督仰付らる是歲墺國維納醫會名譽會員に選擧せられ西曆千八百九十一年三月二十日附會長プロフ エッソル・ビルロード書記ドクトル・ベルクマイスル署名の推薦狀を贈らる同二十四年五月東京醫會麴町支部會の決議の依り木盃一箇を贈與す九月十六日皇太后宮拜診御用仰せられ同月三十日土耳其國皇帝陛下より贈與されたる美治慈惠第二等勳章を受領し及び佩用することを允許せらる十月十二日願に依り貴族院議員を免ぜられ十二月十六日正四位に叙せらる同二十六年一月二十四日皇太子殿下御病氣御全快御祝として銀盃一組を賜はる同二十七年三月九日二十七年勅令第二十七號の旨に依り大婚二十五年祝典章を援與せられ十二月二十六日勳二等に叙し瑞寶章を授與せらる同二十八年三月五日廣島に出張仰せ付られ十月三十一日勳功に依り特旨を以て男爵を授けられ華族に列す十二月十二日皇太子殿下葉山行啓供奉仰せ付られ其二十八日明治二十七八年戰役の功に依り旭日重光章及び年金五百圓を賜はる同三十一年一月三十一日從三位に叙し六月十五日皇太子殿下拜診御用仰せ付けらる此歲明治二十七八年戰役從軍記章を授與せらる同三十三年五月十日勳一等に叙し瑞寶章を授與し同月十一日皇太子殿下御婚儀に付思召を以て御紋付三重金盃及び三種交魚を下賜せられ同月二十一日皇太子及び皇太子妃の兩殿下京都・三重・奈良の一府二縣行啓に付供奉仰せ付らる是歲獨逸國伯林內科學名譽會員に選擧せられ西曆千九百一年二月七日附會長ライデン事務長ロートマイ書記リッテン署名の推薦狀を贈らる同三十五年十月四日明治三十三年清國事變救護事業實施に際し盡力尠からざりし廉を以て日本赤十字社より銀製時計一箇を賜與せらる同三十七年五月二十三日召集大本營附兼東京豫備病院御用掛仰せ付らる同三十八年二月六日陸軍軍醫總監に任じ十二月二十三日東京豫備病院御用掛を免じ更に東京豫備病院治療監督を囑托し月手當百圓を給せられ十二月三十一日召集を解除せらる同三十九年四月一日明治三十七八年戰役の功に依り旭日大綬章及び金四千圓を賜はり又明治三十七八年從軍記章條例に依り陸軍大臣の奏請を經て明治三十九年三月二十一日勅定の從軍記章を授與し六月一日明治三十七八年戰役救護事業實施に際し盡力尠からざる廉を以て日本赤十字社より金製時計一箇を贈り九月十四日帝國學士院規程第二條に依り勅旨を以て帝國學士院會員仰せ付らる同四十年一月四日陸軍軍醫學會規則第十六條に依り陸軍軍醫會名譽會長に推薦せられ九月二十三日勳功に依り特に子爵に陞叙し及び金壹萬圓を賜はり十二月十日正三位に叙せらる同四十一年四月三日日本外科學會規則第六條に依り日本外科學會名譽會員に推薦せらる同四十二年二月十五日日本赤十字社常議會の決議に依り日本赤十字社名譽會員に推薦し同月十八日薨ず同日特旨を以て位一級を進め從二位に叙せらる享年六十有五・法名を慈德院殿全功篤山大居士と云ひ其二十二日葬儀を青山墓地に執行し遺骸を麻布笄町長谷寺境內に埋む其葬儀天聽に達し勅使として待從を差遣され幣帛を賜ひ且つ儀仗兵を附せらる又皇太子殿下及び各宮殿下の御代拜ありたり

左に逸事を摘錄して風丰を偲ぶのよすがに供せん

謂へらく父長綱我國の文明は必ず西洋文物の輸入に俟たざるべからざるを知り群謗を排して長崎より蘭學者猪俣瑞英を招きて子弟の教育を托し母梅尾は左内を江戸に綱常を長崎に遊學せしめ以て資を給したるのみならず頭腦透明にして忍耐に富み女丈夫として恥ぢざるの性格あり而して綱常の始めて外遊するや先輩には青木周藏・木脇良等あり留學生多くは先づ之に倚るを常とせしと雖も綱常獨力學業に精勵したりと云ふ蓋し曾て猪保瑞英に師事して得たる所あるに倚るも亦堅忍なる志行に據りて獨立獨歩したる者と稱せざるべからず・明治七年歸朝後一躍直に陸軍々醫監に任ぜられし頃當局者に於ては官費留學すら異數なるに此顯職を與ふるは過分ならずやとの說ありしも時の陸軍大輔西郷從道は極力辯護し池田謙齋の先例を擧げ且つ綱常の學識經驗優に此職に値す敢て他を云ふの要なしとて遂に任命したりと云ふ是れ一は技量を認めたるに基くものなりしも一は南洲が左内との交情を德としたるに因るものと稱すべし・我國の赤十字社は綱常の主唱に基くものにして歐洲留學中ボンペ博士の勸誘に原因せり而して赤十字社病院は飯田町に規模の極小なりし建築なりしも今は堂々として澁谷に存す此の計畫は綱常自身の頭腦より出たるものにして他人の智識を假りしものに非ず・又陸軍々醫學校は明治十七年大山陸軍卿が桂・川上及び綱常等の俊才を率ゐて歐洲視察に赴き歸來孜々として改正に從事したりし頃綱常の建議に依り始めて陸軍々醫學舍を設くるに至りたるに因る現陸軍々醫學校則ち是なり且軍醫の待遇も現役將校と同等なるべしと主張したりしも實行さるゝに至らざりしは遺憾なりしならんか又宮內省侍醫の地位の高まりしも與つて力ありと稱すべし・讀書は常に寢食を忘れて愛讀し少壯時は勿論其末年に至りても孜々として日進の學問界に立ち日本外科學會に於て名譽會員に推戴したるも偶然ならざるを知るべし・利慾の念に於ては極めて淡白にして診察を受くる者に對しては貴賤富貧の別なく自ら金錢を使用する時に於て紙幣掴み出しの有樣なり曾て有栖川宮殿下より外遊の御土產として卿は何時でも鎖は持つて居た例は無いから時計丈をと申されて頂戴したる時も其時計の高下は一向知らざりしが其餞時計商が之を見て千圓近くの價が有ると聽き驚きたりと云へり其他嗜好品は酒・草煙等なりしも多くを欲せず道樂としては團十郎・菊五郎・圓朝など誰れでも一藝に秀でた者は夫れ丈け貴ぶべき所があるとて之を愛し團菊等臨終の前には常に熱心に診療され圓朝の一口噺にはさすが名人幾度演つても一言雙句も差違が無いとて推奬措かず學問の呼吸も此通りだと物語れりと云ふ・明治三十七八年の後に於て多數の傷病兵に對し幕僚と共に數編の論文を著はし之を歐洲の醫學雜誌に寄稿したりしが將來の戰役に於て醫學上資する所多き者あり而して露獨の從軍者にして類似の論文を發表したる者ありしも就中白眉として學者の贊評を博したり又赤十字病院の擴張と共に內科・外科婦人科其他に屬する患者と雖も其診療に從事したりしが下問を恥じず一學科に秀でたる者は推奬して學派流派の如きは平等無差別の感情を以てせり・又一日百姓を診察し指を肛門に挿入したるに百姓

曰く勿體ないいくら病氣だといつてと寢臺を起きて低頭平身したるに肛門を摩つたのではない病を診察したのだと答へしとなん・仄に承る所に依れば今上陛下尙ほ皇太子殿下にまします頃妃殿下の御選定に就て尤も自信强き進言を敢てし今日皇室の彌榮え御健康にして且つ御聰明なる皇太子殿下を拜し奉りしは至誠の貫徹したるものとして上下臣民の牢記して慶賀すべき事どもなり

遺稿

臣綱常白す伏惟るに從來降誕の皇子皇女御在世多くは永からず大抵慢性腦膜炎症の爲に薨御あり臣が拜診するに及べるもの既に四回竊に聞く其以前薨御の皇子皇女も亦同一の症なりと臣常に侍醫池田謙齋等と此事を語りて竊に皇室の不幸を憂慮せり而して今又照宮殿下の薨御あり維新以來西洋醫術の精妙なるを以て大に之れを奬勵せられ侍醫には西洋醫學を用ゐられ大學には西洋人を聘し天下の醫術駸々として興起し萬民同生の恩澤に浴せり而して獨り皇室に在ては屢之と反對なる結果を見る實に痛嘆の至に堪へず蓋病に治すべきものあり治すべからざる者あり又病原に先天と後天の別あり卽ち胎內に受くると生後に罹るもの是なり所謂病原は今日に在りて未だ盡く研究し得ずと雖も其療法は近來理化學に基き大に進步せり凡て病に藥石を以て治すべきあり藥石の力及ばざるには器械を以て療すべきあり此二者を以て尙治療し能はざるものは所謂治す可らざるの病とす然と雖病理學の進步に從て今日治す可からざる病となすもの亦治すべき方を得るに至るや知るべからず其の是に至るや他に妙方奇術の有に非ず蓋し天地自然の大法を研究するの精なるに由る例之ば衞生の學起り窒扶斯虎列拉の傳染病なるを發見し之れを隔離し或は消毒法を行ひ或は土地を淸潔にして市街の導水を改良して此等の傳染病を一掃したるは往往聞知する所なり又養生と稱するものあり是れ一身一己の衞生に外ならず此衞生と養生を以て疾病を未發に防遏し得たるは敢て疑を容れざる所にして所謂天地自然の大法を研究し病理衞生諸學進步の惠に因るものなり今有機體の構造を觀察するに其單純なるものは障碍を受くること甚しからざるも複雜なるに從て害を受くるの屢にして且つ重きは蓋し數の免れ能はざるものなり況んや靈妙精巧の人身體に於てをや其健康無恙を保持するの難き想ふべし後來病理衞生の諸學完全無缺の域に達し人々盡く夭折の不幸なく其天然を終るに至らん事を切望するも實に至難と謂はざる可からず是れ今日醫者の銳意研究する所なり今此慢性腦膜炎なる者亦蓋し多くは先天にして今日所謂不治の症に屬するものなり故に症狀既に發するの後は如何なる藥石器械を用ゐるも其奏效を望む可からず亦病原を斷ち得るを期す可からず唯衞生養生の法を以て身體を養成强固にし病の素因をして其力を逞くするの機會を得ざらしむる有のみ譬へば草木を養ふが如く一旦蟲害に罹れるあらんに充分之を培養して其生力を盛にする時は蟲害の爲めに草木の性を奪はれず獨能く其の成長を遂ぐるを得べし是れ天地間に行はるゝ自然の大法なり抑身體を强固にし病毒の繁殖を防ぐの法は何ぞや第一食物第二空

氣第三光線にして居所亦大に注意を要す可きなり然れども此の如にして身體の養育を全く盡せり
と云ふ可からず何となれば兒童の養育に止まらず心力の發育之れに伴はざる可らず而して體育と
智育の權衡宜きを得ざる時は往々身體に害を及ぼすことあればなり無病健康の小兒に在りてすら
猶然り況や既に病の素因を稟たるに於てをや一旦身體の發育に疊ある時は即ち是れ病の發生の時
なり西人の言に曰く一國經濟は病兒の多少に由ると誠なるかな幼兒の病は猶苗の疵の如く成長の
後遂に完全の結果を得べからず是を以て西洋に於ては近來頗る育兒法の研究に力を用ゐ其の研究
漸く積もり其方法益精しく遂に儼然たる一の特科專門たるに至る大凡西洋學術の日新進步するも
のは此の分科研究に由るものにして醫學に於ては小兒科婦人科內科外科あり又病理學者衞生學者
あり各其科を專攻して遂に今日の隆盛を致せり顧ふに衞生養生の法に付ては風土習慣の差異に因
りて斟酌すべきこと少からずと雖も東洋人西洋人均しく是れ人なり其本領に至りては固より變ず
可からざるなり玆に照宮殿下の薨御に丁り侍醫及び陸海軍々醫總監等を召して恭く皇室の育兒法
を勅問あり臣等感激の至りに堪へず敢て衆議を盡し西洋の法に基きて本邦の實驗に徵し既に五條
の意見を奏上せり然るに今常宮殿下近侍の漢醫を止め臣綱常に主任を命ぜらるゝの內諭を忝くせ
り臣駑鈍の材を以て方に陸軍々醫總監の職を奉じ軍醫に向て戰時平時の衞生勤務を統轄し其教育
を奬勵す是れ既に過當の重職たり況や至重至大なる王室育兒の任を申するは臣綱常が敢て當る所
にあらず且既に陳ぜし如く小兒科は既に一の專門科にして臣が如きは常に陸軍醫事に專にし育兒
法の如きは唯其一斑を窺ひ知れるのみ今や侍醫局に於て各科の醫人に乏しからず願くば其中に就
きて特選し專ら常宮殿下健康保全の任に當らしめんことを悃祈の至りに堪へず然れども兒科專門
の人々俄に得難きを以て後日其人を得るの間臣をして此の重任に當らしめんとならば臣豈に敢て
恩命を奉承せざらんや但し前にも陳ぜし如く先天の病は名方奇藥の能く治する所にあらず唯一の
身體强固法あるのみ臣が執る所の强固法は亦既に奏上せし所の五條に出でず今又悉しく之を云へ
ば第一住所第二空氣第三光線第四食事第五生活法是なり此五つのもの各其當を得せしむるは監守
人を精選するに在り其人は既に小兒を生育し强壯に成長を得せしめたる經驗あり却て宮中の事情
に通ぜざる士族にして夫婦俱に奉仕するを可とす或は西洋の皇室に仕へ小兒養育に熟達せる婦を
薦舉すべしと言ものあり然れども是目下言語を異にする等の不便あり臣之を贊成せず但殿下稍御
生長の日に當り始めて此舉あるも可なるべし住居に至ては人家稀疎空氣淸楚なる田舍にして南に
向ひ山を北にせる高燥の地をトし夏冬の季に應じて宜きを得んことを欲す殿宇は固より輪奐を要
せず唯空氣善く疎通し光線善く來射するを力むるのみ生活法に就ては從來の如く人乳のみを以て
するは良ならず人乳は身體に應じて時々其性を變じ易く常に良乳を得ること甚だ難し故に寧ろ牛
乳を佳とせん衣服又は食事睡眠散步の時限等の詳細は今玆に盡す能はず尤も經驗に富める醫を奉

侍せしむるを要す右に陳ぜし所は所謂自然の原則にして加ふるに經驗を以てせしものなり臣是れを舍きて復た一の考案なし然りと雖も人體の鋭敏にして薄弱なる事情に由りて天禀の病芽を發動せしむるや固より豫期すべからず臣が駑鈍なる加ふるに繁劇の務めを以てし萬一にも病芽をして臣が注意の間隙に乘ぜしむることあらば上は　陛下の明を瀆し下は衆庶をして天地自然の大法を疑はしむるに至らん願くは急に專門の醫を選び以て皇子の健康を保せしめ給はゞ何の幸か之れに加へん臣優渥恩寵を荷ふ微衷に眷々たるもの實に已む能はず敢て粗妄の罪を忘れ謹て拜表奏聞す

明治二十一年十一月

×

書懐似赤十字病院研究會同僚

研鑽斯學在知新經歴多年近得眞勿笑白頭貪進取一生自任杏林人

澁谷閑居

蜒川流入古川斜兩岸爭開紅白花占領江南春色好主人得意向人誇

和高青邱贈醫師徐享甫詩

治方誰言治有方草根木液徒張皇元公仁術無私意萬物自生自發揚

余嘗留獨逸宇城恩師傑氏亦有癇癖之名日々敎授生徒不倦余屢受冷罵今日始知冷罵即是善誘嚴師之恩也深矣余竊喜癇癖之名傳于世上回想師恩感概集焉

癇癖名聲世上傳老來事々愧前賢嚴師謦咳猶留耳鞭策進吾記往年

偶成

曉鶯啼破夢忽々睡覺東窻日已紅城外郊莊別天地滿庭花影弄春風

養菊（頃聞西洋有造五色菊方詩中故及）

染出青紅又白黄西人養菊有新方唯將五色相評品孰與東籬晚節香

讀唐詩有感

青燈相伴夜沈々坐把唐詩帶醉吟頗誦風規同一轍靜中方識古人心

大野郡塚原野（五十年前之詩）

高原渺々接雲端五月凄風短葛寒萬塚會理何者骨知名是只五郎丸

岩佐純

宮中顧問官・從二位勳一等男爵岩佐純は天保七丙申年五月一日を以て福井城下三上町（現・松ヶ枝町）に生る幼名を又玄と云ひ字は仲成・純を通稱とす父名は玄珪家世福井藩醫たり純幼にして穎悟夙に家

庭の教を受け稍長ずるに及んで藩醫學所に入り其學を修む謂らく醫は人生死命の繫る所其職固より重し苟も醫を以て家を爲さんと欲せば廣く良師を求めて其蘊奥を究めざるべからず而して之を攻めんと欲せば先づ西洋醫方を學び博く異域の道を探らざるべからずと則ち雄志を樹て四方に遊ぶの機會を俟てり然れども父玄珪は古方を墨守して名あるを以て西洋醫方は特に嫌忌する所たり則ち時に純の雄志を洩すあるも之を許さず偶〻藩主春嶽侯英明の資を以て時勢を達觀し西洋醫方の採るべきを知り坪井信良を江戸より聘して侍醫に擧げ純をして就て學ばしむ純則ち感喜踴躍始めて西洋醫方を修むることを得たり時に歳二十又五安政三年四月坪井信良期滿ちて江戸に歸るや純亦藩命に依り出て〻江戸坪井芳洌の塾に蘭學を修め更に佐倉に赴き佐藤舜海に師事すること數年大に得る所あり依つて春嶽侯召還して侍醫に擧げ兼て洋學所教授に任ず既にして蘭醫ボンペ長崎に來り專ら醫學を教授するを聞き藩命を以て此に赴き斯學を研究し萬延二年歸藩執匙侍醫に任ず元治元年藩命に依り再び長崎に到りボードインに師事し淹留一年にして歸藩す慶應二年四月藩主學術精勵を錄して百五十石を加へ後ち濱町に病院を開設するに方り之を助く此年春嶽侯に隨うて京都に臻る偶〻主上御不豫に就き戸田大和守をして急に參内拜診すべきの命を受く則ち命を奉じて直に參内す蓋し陪臣にして此光榮を得たるは前代未聞のことに屬し又西洋醫方を以て禁闕に入りしは之を以て嚆矢なりと稱す明治二年正月朝廷召して侍醫たらしめんと欲し後藤參議を以て内命を傳へしむ純此に諮りて曰く我邦の西洋醫學尚ほ幼稚にして之れを修むるの醫師太だ僅少なり此際新に醫學校病院を創立して學生を教育すること最大急務たり侍醫の榮は即ち榮なりと雖も別に其の人無きにあらず如かず全國醫學の教育を先きにせんにはと乃ち後藤參議に約するに教育のこと略〻緒に就くの後侍醫たらんことを以てし當路に建議して曰く本邦西洋醫學は安政年間幕府蘭醫を聘し長崎に於て醫學校病院を創立し學科を定めて醫學生を教授せしより始めて其本體を知るを得たり然れども其規模太だ狹少にして完全ならず今や維新に際し最も完全なる醫學校病院を創立し醫學の制度を新定し普く本邦一般の醫生を養成すること尤も急要なり其の法は歐洲大學の制度に倣ひ各科專門の教師を雇聘し學期を定め漸次教育するを以て宜とすと政府此議を容れ此年一月徵士權判事と爲し醫學校創立取調御用掛を命じ次で同二月醫學校設立御用に付東下すべきの命を受け東京に到る是に於て相良知安に圖り專ら醫學校設立の事に任じ先づ和泉橋舊藤堂邸軍事病院を以て假に醫學校に充て第一大學區醫學校と名け後に至り大學東校と改稱す此際諸般の法制は總て英米二國に則り醫學の如きも亦主として範を英國に取るの傾向あり加ふるに英醫ウイリスは往年政府の聘に應じて軍事病院を主宰せるを以て東北戰爭以來高位顯官に知遇を得三條太政大臣・山内大學別當等の信任を受け當時學制刷新に際し自ら醫學教頭の地位を占め別に醫を英國より招聘して醫學校病院を創立せんことを企つ此時に方り純專ら其局に當り醫學教育の制度はボードイン等の説に徵して範を獨逸に取るべきを主張し此の法容るゝ無くんば他年歐米の洋學と馳驅對峙するの域に到達せずと建言し

山内別當等と其是非得失を切論したるに百難千障續生して困難を極めたるも悉く之を排して廟議を動かし遂に教師を獨逸より聘し又留學生を獨逸に差遣するに決す　幾もなくミュルレル・ホフマン二氏獨逸より來りて大學東校教授に任じウエーニヒ以下の教師相襲いて到り現に東京帝國大學醫科大學の基礎を固むるに至れり於戲我邦醫政の功眞に不朽に傳ふべしと爲す

却つて說く明治二年七月大學少丞に任じ十月從六位に敍し大學權大丞に任じ大阪醫學校創立に付出張仰付られ三月正六位に敍す四年一月大學大丞に任じ從五位に敍し七月文部省出仕但大丞准席次て文部大丞兼中教授に任じ九月本官竝に兼官を免じ文部中教授に任じ十二月本官を免じ文部五等仕出に任ず五年一月侍醫兼文部中教授に任じ文部少丞を兼ぬ十一月願に依り兼官を免じ五月九州御巡幸供奉仰付らる八年一月大小侍醫被廢四等侍醫に仕へ七月三等侍醫に任ず九年五月奥羽御巡幸供奉仰付られ十一月大和竝京都御巡幸供奉仰付らる十年十月二等侍醫に任じ十三年四月山梨三重京都御巡幸供奉仰付らる十四年六月秋田山形北海道御巡幸供奉仰付られ十五年十二月勳五等に敍す十六年五月一等侍醫に任じ六月正五位に敍す十七年四月醫術研究の爲め歐洲各國へ罷越度儀特旨を以て往返とも十ヶ月間假下賜同月横濱出帆十八年五月歸朝四月勳四等旭日小綬章を賜ふ十九年二月官制改定任侍醫勅任二等に任じ年俸四千圓下賜十一月勳三等に敍し旭日中綬章を賜ふ二十年十月從一位公爵島津久光所勞に付御尋として鹿兒島へ差遣され二月愛國の衷情を表諒し防海の事業を贊成し金壹千圓獻納す依て明治廿年勅定の銀製黄綬章を賜ひ玆に之を表彰す七月官制改正二級俸を賜ひ十一月明治二十二年八月三日勅令第百三號の旨に依り大日本帝國憲法發布紀念章を授與す二十三年三月京都行啓供奉仰付られ四月奈良兵庫兩縣行啓供奉仰付られ十月茨城縣下行啓供奉仰付らる二十四年五月京都行幸供奉仰付られ十二月正四位に敍し一級俸を賜ふ二十六年十二月滿宮拜診御用仰付らる二十七年十二月勳二等に敍し瑞寶章を賜ふ二十八年三月皇后陛下廣島行啓供奉仰付され十二月皇后陛下廣島供奉の勞に依り特に金七百圓を賜ふ二十九年十月埼玉縣行幸供奉仰付らる三十年四月京都行啓供奉仰付られ七月聖上拜診御用仰付られ九月侍醫局長池田謙齋不在中代理仰付らる三十一年二月宮中顧問官に兼任一等に敍し從三位に敍す三十二年十一月栃木縣下行幸供奉仰付らる三十六年四月京都行啓供奉仰付らる三十八年三月特に年俸四千圓を賜ふ四十年九月勳功により特に男爵を授け十二月本官(宮中顧問官)を免じ高等官一等に陞敍し一級俸(四千圓)を賜ふ四十一年一月官制改正二月正三位に敍し六月勳一等に敍し瑞寶章を授く四十三年四月俸給令改正一級俸(五千圓)四十四年五月旭日大綬章を授け一月願に依り本官を免じ七月宮中顧問官に任じ高等官一等に敍す爾來老義を以て健康佳良ならず依て宮中顧問官を辭し專ら拜診に任じたりしも間もなく更に宮中顧問官に任ぜられ四十五年元旦には勉めて宮中に拜賀したるに氣分勝れず侍醫寮にて手當を受けしもやがて落付たりとて東宮御所を始めとし御殿に參賀し其五日豐明殿に於ける新年宴會に參列し定めの席に就きて出御を待ち奉りしが突然心臟痲痺を起したるを以て直ちに別

室に移され岡侍醫頭森軍醫總監等の手當を受け歸邸したるも病狀刻々危篤に瀕し此旨天聽に達するや特旨を以て從二位に敍し次で薨ず享年七十有八・法名を純誠院殿仁山天壽大居士と云ひ十日青山齋場に於て葬儀を營み遺骸を品川天滝寺に瘞む之より先き　聖上皇后兩陛下には生前の功勞を思召され同日正午勅使として侍從松平子爵を其邸に差遣され祭祀料金一千圓及び白絹二疋を賜ひ午後一時儀仗兵を附し肅然として式を終らしめ玉ふ實に死して餘榮ありと謂ふべし

×

化學的食養長壽論序

國之富强資人之健壯才知人之健壯才知資食物之精美則食物不可不採擇也大凡生平所資食物大陸人與沿海人異寒國人與暖地人不同是自然之理而亦習慣之由矣要之各有精麁美惡取其精美去其麁惡彼此相合相補以養身體則健壯可以期才知可以長眉壽亦可以保文敎武技商業工藝何爲而不成果如此則國家欲不富强得乎石塚陸軍藥劑監夙有覩於此摶採彼我古今食物分析比較悟食養中加理鹽那篤倫鹽之配合分數所以最切要之理徵之化學的事實例證拮据十數年遂創唱夫婦亞兒加里鹽新說著此者以發揮歐亞先哲未詳究之精理可謂勉矣嗚呼此書之行人人健壯才知國家日富月强有不可測焉者其贊天之功亦不偉且大乎哉乃識喜代序

明治二十九年五月

某誌に寄せし維新當時の醫學

予は維新の當時卽ち明治元年のお正月には藩主春嶽侯に從ふて京都洛東岡崎の藩邸に居つた其頃江戸には醫學所が出來て松本良順が緒方洪庵の後を襲いで醫學所頭取となつて大に西洋醫學を鼓吹して居る長崎では精得館の組織を變じて長崎醫學所と改め校長に長與專齋を擧げ蘭醫マンスフエルドやゲールツ等を聘して始めて階級的に順序を立てゝ敎育して居つた大阪にも醫學所が設立されてボードイン等を聘して敎育することになつた其他國中彼地此地に西洋醫學の敎育所や病院の樣なものが建設されて來た余は別に是と云ふ仕事もなく唯日日春嶽侯のお傍に侍して居るに過ぎず從て醫術の研究等も出來ない僅に主公の許諾を得て洛東の彼の賴山陽の住むで居つた山紫水明の處に開業した此際戸田大和守より典藥寮へ出仕せよとの內命あり恰も　今上陛下神經痛（齒痛）に御惱みあらせられしが當時典藥寮の醫師が如何に手を盡しても御治癒遊ばされざりしを以て遂に予に拜診仰付けらるゝことに決したのである併し幸に予の參殿に至らずして御全快あらせられた抑吾々の如き無位無官の而も陪臣の者にして參殿拜診の命を蒙りしことは啻に予の光榮なりしのみならず主上には已に此時よりして西洋醫學の優秀なることを聞し召されて予に拜診の御下命があつたのであつて此時分は一も二もなく西洋醫術は夷狄の方として退けられて居つたのであるのに突然西洋醫師に拜診仰せ付けらるゝの內議ありしことは吾々西洋醫師の大なる名譽で且洋方

醫として拜診の御用を仰せ付せられたる嚆矢であつた明治元年には我醫學に種々なる變化が盛に起り先づ第一に新政府は幕府の醫學所を受け繼いで英國の宣教師で醫者を兼ねて居つたウリユースを教師として其外長崎等から歸京した西洋醫學を卒業した者を聘して下谷徒士町の舊藤堂邸に醫學所と大病院を建て今日の東京帝國大學醫科大學の基礎を茲に築いたのを始めとして幕府より和蘭へ留學して居つた緒方維準・伊東方成・林紀等が歸朝して伊東と緒方は直ぐに典醫寮に入り林は江戸にて幕府に仕へて居つた予は當年の暮に再び後藤象二郎氏から典醫寮に奉仕すべしとの勸告を受けしも主人たる春嶽侯の許可なきと且當時の人情は假令宮中に奉仕するにても舊主を辭して他に仕ふるは二君に仕ふるの感があるので予は宮中に奉仕することは醫者として此上なき名譽と心得て居りしに拘はらず當時は直ぐに宮中に奉仕することも出來なんだが併し將來は宮中の人たらんことの希望を持つて居つた又一般我國の醫學教育に關しては一定の意見を懷抱して居つたので大體左の趣意の建白書を新政府に出だした

一　洋方の安全なる醫學校を創設すること

二　歐洲の制度に倣ひ學期を定めて教育すること

三　專門の教師を召聘すること

右の建白は幸に新政府の快く容るゝ所となり翌年正月予は前記の諸氏と共に醫學校創立取調御用掛を命ぜられて上京した醫學制度の改革として先づ昌平校が大學校と改め大學東校と改稱したが其時の五藩の一なる鍋島藩の相良知安は才能共に備りし人物なりしを以て其際登用して大學經營の任に當らせられたしと申請して共に醫道改正御用掛を命ぜられ大學東校のことを監理することになつた然るに是より先き幕府の醫學所以來英醫ウリユースの勢力愈强大となり特に當時の大學別當山内侯を始め廟堂諸公の間に大勢力を有し予等は殆ど有名無實の姿なりしも予等は醫學改正御用掛を仰せ付けられて以來熟ら世界の大勢を觀察し醫術は到底獨逸に勝る國なきを看取し我邦の醫育方法は宜く獨逸に則るべきことを建議せしに彼のウリユースは甚だ不滿を表し廟堂の大藩に據て大に反對せしも恰も米國人で東校の教師たりしフルベッキとボートインの兩人が極力獨逸式を應用するの必要を助言したのと予等が職務上より意見を開陳し盛に獨逸に則ることを主張したので廟議も遂に吾々の說を容れ躍起となりて反對運動したウリユースは手を引くことゝなり之と同時に我政府より獨逸政府に内外科二名の教師傭聘のことを依頼したれば獨逸政府は軈て直に陸軍二等軍醫正ドクトル・ジュルレル海軍大軍醫ドクトル・ホフマンの兩人を撰拔して呉れたが此時恰も普佛戰爭が始まつたので兩教師の來朝は一ヶ年延期して明治四年に渡來した夫より始めて第七科の制度を定め今日の醫科大學の教育の基礎を建てたのである當時の教師は大學御雇外國教師の外日本人では石黒忠悳・長谷川泰(舍監)・三宅秀・司馬良海(三宅・司馬二氏は通譯を兼ぬ)を初

め樫村清德・足立寛・土岐頼德・坪井豐治・佐藤進・田代基德・横井信之等の諸氏で第一期の學生は約二十四五名で予の同僚岡男爵を始め宇野博士・櫻井郁二郎・三浦省軒・渡邊悌二郎氏等は其内であつた次で各科專門の教師を作るため池田謙齋氏外十二名を獨逸に留學せらるゝことゝなつて醫學大學の基礎は倍輩固となつた此くして予は明治五年一月まで醫科大學に在つたが仕官の當時時の參與たりし後藤象二郎氏外廟堂の諸公との内約もあり且予が任務たりし醫育のことも最初の計畫も著々進捗せしを以て同年一月大學を辭し宮内省侍醫寮に出仕へ大侍醫に任ぜられ爾來殆ど四十年宮中に奉仕して今日に至つたのである而して明治の初年我國に日新醫學を移植するに當り英醫ウリュースの説に從ひしならば我國醫學今日あらざりしを思ひ當時予の建白が效を奏し今日の如く盛大なる醫學の基礎を造るの進歩に與つて力あるに想到せば密に自ら慰むるに足ると信ずるのである(明治四十三年一月)

東京醫科大學の起源

諸君本日は奬進醫會第二十四回總會を開かれますにつきまして兩三日前藤根君が態々御出になりまして醫科大學創立のことは雜誌新聞等にも多少記事があるけれどもみな區々にして分明でない因て當時私共其術に當りて事を執て居りました故其眞相を話して貰ひたいと云ふ御請求につき如何にも當時の有樣を詳細に記したものがないやうに思ひ諸君に御話を致しますることは一の參考紀念に相成ることゝ存じます故承諾を致しましたが十七日は生憎公用で當日何分にも差支如何ともしかたなく據なく御斷りをしましたけれども再三ドウか都合できまいかとの御請求が有りましたので私も大に希望すること故暫時の時間を得まして簡單に御話を致したいと存じまして出席いたしましたさて順序として創始の由來より御話し致さねばならぬ則明治元年の冬で御座いましたが時の參與後藤象二郎君が私に云はれまするに今般維新となり百般のこと凡て改良するつもり醫道の如きは最も大切にして殊に至尊の玉體を保護し奉るは重要の事件である然るに禁裡の御醫は凡て漢方醫師にして草根木皮を以て御療治を申上るやうの次第なれば速に改良を要せねばならぬ足下には侍醫となり專ら玉體を保護し奉るやうにとの内命ありました因て私考るに玉體の御健康を保護し奉るは最も重要の事件また醫師として侍醫となり玉體を拜診し奉るは最上の榮職にして無限の光榮なれば速に拜命すべきである然るに當時の醫界の眞相を達觀すれば全國の醫師未だ十分の八分漢方醫にして西洋醫法を修むるもの誠に僅々たるものである此の際西洋醫道を興隆すること醫師たるものゝ本意にて斯道の爲め大に微力を盡すの秋と思ひ大に學校病院を創設し西洋醫師を聘し各科專門の教授を設け大に醫師を教育して完全なる醫師を養成すること今日の急務なれば願くば醫學校創立の任を命ぜられたきことを陳述し尚ほ侍醫は醫師として最上の榮職且至尊の玉體を保護し奉るは臣民として最も至願する所なれば醫學校略ぼ設立の後は必ず侍醫を奉仕し玉

體の保護に微力を盡さんことを願ひ置きました然るに後藤參與は其旨思は至極同感であると云はれ早速廟議を經て採用となり明治二年一月徴士權判事となり醫學校創立御用掛を仰付けられましてこれに因り醫學の全權を御委任となる大任を負擔することになりました不肖な私には過大の重任なれども此際是非働くものがなければならぬ因て所謂先づ隗より始むの意を以て不肖をも顧ずその任に當りました

さて創立のことは素より大事業にして一人二人の仕事に非ず普く全國の有爲の人士を集め此の演劇の幕を開かねばならぬのであります京師に鍋島閑叟公に陪して相良知安氏在京なりし故先づ相良を推薦して同僚となり相謀り計畫に著手致しましたが幸ひ其秋和蘭のボードイン大阪に滯在せしにより百事協議を爲し著々企畫致しました然れがも其時代の有樣は全く混濛たるものにして青年諸君は中々夢想だにもならぬ事で今御話をしても迚も御判りはあるまいと思ふ夫より東京に於て佐藤尙中翁を初め坪井・島村・石井・司馬・三宅等の諸君竝に若手では石黑・長谷川・桐原・田代等の諸君を集ひ學校病院を開始しましたこれが即大學東校で舊藤堂藩邸を假りに東校と定め學校病院となし醫士生徒及び患者を集あたのであります扨て西洋醫學と申は御承知の通り初めは蘭醫を以て修業成立せしも維新前より諸學の大勢追々英學に移り醫學の如きも漸々英學に赴くの趨勢となつたのでありもす其際も東校は軍事病院にして其院長は英人ウリキス氏專ら主宰し病院の傍ら教場を聞き生徒を教授して居つたのであります當時醫學の大勢も大に英學に傾き教師は英人ウリキス氏にて坪井・島村・石井諸君の如きも英學を主張せられしことなれば學生も亦英學を歡迎せし勢であるさて此際は日本醫學の大體基礎を確定する秋にして中々輕々に處置すべきに非らず因てボードイン氏等とも深く熟議を凝し歐洲中醫學の卓越せるは獨逸の右に出ずるものなきを以て新に定むる我那醫學は獨逸を以て根據とするの是なることに決定しこれを建言せしに玆に一つの難事が起りました當時の大學別當山内容堂公（今の文部大臣なり）太政大臣三條公等は最も英人ウリキス氏を信用せられ醫學は英學を主とすること宜しからんとの議大に起り建言の採用太だ難きことゝなつた夫は種々の事情もありました

然れども醫道に執りては英式にするか獨式にするかは容易ならぬ大問題にして獨逸に非ざれば將來不利なることを再三切論して止ず幸其際米人フエルベッキ氏在京して獨逸に據るの是なるを主張せられ其是非損益を痛論して我が建言を援助せられまして終に政府も獨逸を以て我邦醫學の基礎となすに確定致しましたこれに因り我政府より獨逸政府に御依頼となり今般日本醫學は貴國の醫學を以て基礎となしたきにつき貴國政府にて其の任に適する教師たる人を選定せられ先づ内外科教師二人を派遣ありたき旨を御依頼ありました而して追々各科專門の教師を聘する見込であつた右は明治三年のことにして獨逸より教師來聘の上大體學制を定め正則の學校病院を設立する目

的でありました然れども教師來任には多少の年月を要することなれば此間我邦の教官を集め姑息を補ひ來りしに其後豈計らんや獨逸に於ては所謂普佛戰爭あり赴任すべき教師軍役の爲め外出しがたき事となり大に苦心し百方盡力するも致し方なし然るに普佛戰爭も意外に早く落著し八ヶ月にて終結し兩教師も速に來朝になるとの報告に接し大に雀躍したことでありました

さて其兩教師とは外科がミュラル氏内科はホフマン氏であつた兩教師來朝の上學制を定め正則の學校病院を設立したるもの即ち今日の帝國大學醫科大學にして如此き盛大な進歩をなしたのであります私は初めに御話致した通り醫道の爲めに學校病院を設立し全國醫學生を養成するの道を開きたき素志なりしが今早獨逸教師も赴任となり學制も定まり學校病院も略ぼ出來たるが故に初志に歸へり是非とも侍醫となり玉體の御健康を保護し奉りたきにつき後藤參與に願ひし如く侍醫に轉任し殆ど四十年宮内省に奉仕致しますが夫は明治五年五月で御座りました斯くして大學東校が出來てから内外の組織や制度も段々改良せられて今日に至つたのでありますがその有樣は十月十一日の讀賣新聞上に北里君の將來の醫學といふ話の内に一通り書いてありますからあれを見ればよく明ります(明治四十三年十月十七日第二十四回奬進醫會總會に於ける演說)

若越醫學會第六回總會祝辭

本日は若越醫學會第六回の總會を玆に開きし所閣下及諸君の御多數は此節柄御多事にも拘らず御光臨を辱うせしは本會の面目を加へ光榮の至り深く感謝を表する所なり抑前年此醫會を創立せしは種々の善すべき關係あり遠きは舊小濱藩の杉田玄白先生は純の吸々する迄もなく我日本帝國の蘭醫學の元祖なり亞て杉田成卿先生諸輩の先導者あり爾來若越地方は蘭醫者を漸次輩出せり杉田玄端・中川淳庵・竹内玄同等の諸子亦其名を鳴せしもの嘉永年間舊越前藩が坪井信良を聘し蘭醫學を教導せしめたり故春嶽侯は蘭醫を尤奬勵せられ半井保・笠原良策・大岩主一及橋本左内・同綱常隨て不肖純の如き蘭醫學の修業を命ぜられ江戸に大阪に長崎に遊學して各自蘭學の一斑を習得したるは遠くは杉田先生及先覺者の餘蔭薫陶の末流に由來し竝に春嶽侯の特旨に基きし者と謂ふべく又少く汎きに涉れども抑蘭學の其過ぎし功績は獨り醫道のみならず兵學・砲術・航海其他凡百の理化器械物形上の我國に輸入したる濫觴は蘭學の開けて其學力が諸種に涉り其端を造りたるより來りしものにして獨り弱を强にし天を壽にしたる醫者界の功能に止らず我國今日の健全なる文明開化を致したる原動力と謂はざるを得ず春秋國語の所謂上醫醫國とは蓋し虛言に非ざるなり亦以て我國に天地と俱に無窮の偉績を奏したりしを回顧し隨て先輩遺恩の辱きを忘るべからず扨此會は多數會員諸君の美意共同に由て創立日尚淺きに拘らず斯の如きの盛昌を致せしは諸君と共に欽喜の至りに勝さる而已ならず溯て杉田先生及後繼たる諸先輩の千辛萬苦百折不撓蘭醫學を主唱し大に輸入を計畫して鴻基を後に垂れられし諸靈魂も蓋し今日は泉下に滿足なる一笑の面影なき

にあらざるやを推想すべきなり滿場の諸君此若越醫學會の前世は人を醫したるに止まらず併て國を醫したる末流を汲て興起したる名譽會とも云ふべし

諸君將來各互益協同し奮發し勉勵し醫學の道を此上盛大の域に達し發蒙啓後を主とすべし是一は先覺者の垂恩に酬ひ一は國家の忠愛の道に對する所以なり

茲に本會の由來を一言し以て開會の辭に充つ

明治四十五年四月二十八日

第一節・二・松岡醫人傳

岩佐陽雲

通稱以重・陽雲と號し勝重の嫡男たり其先は畫人岩佐又兵衛勝以たり福井に生る則ち父勝重に就て畫法を學びたりしも貞享三年御牢知の際御暇となれり時に福井支封松岡藩主松平昌勝候御坊主として之を用ゐ御茶兼醫師十五石三人扶持下され御組番組醫師格となる寶永五戊子年十二月三十日卒す眞宗興宗寺に葬る

二代陽雲は享保十七壬子年七月二十一日相續し延享四丁卯年二月十五日五石加增あり同九月六日御部屋附定府となりて五石二人扶持加增あり明和三丙戌年七月十八日新知百石となれり

其子三代陽雲は安永七年十一月十九日御奥醫匙格となり天明二年十二月十一日休足家督を受く實は中村金兵衛の男たり

其子四代陽雲は初め榮丹と云ひ天明七年四月二十九日故有りて追放となる

五代陽雲は初名又三郎と云ひ後ち剃髮して貞雲と號す其後を詳にせず

幸山浩齋

名は長遠通稱浩齋訥に於ては廣居俳諧に於ては愚佛と號す元は加州大聖寺の產なり其母浩齋及び其兄を伴うて丸岡に移住す時に歲十二則ち時の丸岡藩醫藤田天洋の門に入りて漢學及び蘭方醫學を修め天保十三年去つて松岡本町木屋木左衞門の養子となり始めて醫業を開きしも翌年に至り木屋家を出で更に同所崔町醫師山田梅溪に入りたり然れども再び同家を去つて臺町番匠屋安兵衞の女婿となり醫業の傍ら塾を設けて經史・書道・蘭學を敎授し又藩廳の許可を得て學塾を建んとす則ち柳原一郎兵衞等其企を贊し義金を募りて學舍を設け茲に子弟を養ふに至る實に安政元年の夏たり既にして同四年に至り益其擴張を圖り本藩福井明道館に敎師傭入を請ふ

乍恐以口上奉願上候

一松岡八町之儀近來追々風俗猥に相成候に付何卒學問所等相建て產業の餘力學問心懸候はゞ自ら禮讓も厚く相成可申と存候且又幸山浩齋と申す者近來醫學片手に子供へ手習素讀教へ來り候所教導方行屆き追々入門之子供も大勢に相成及成長候者も有之候に付學問所等相端立致度と八町の內申談じ居候折柄御內移りも有之に付此度本町明屋敷地へ家屋一軒相立學問所に仕度候間何卒御慈許を以て御上樣より教導師月々何日と相定め御仕向被下置候樣右願之通被仰付被下置候はゞ生々世々難有仕合に奉存候　以上

安政四巳年四月

惣代　福島屋市郎兵衞
同　多葉粉屋萬右衞門
大庄屋　田中惣兵衞

御奉行樣

右願面四月十六日笹川藤內より伺に相成候處下款之通被仰出候

以手紙申達候松岡八町より相願候本町明屋敷へ學問所一軒別紙圖面之通取建度願之義願之通申渡候樣可相達旨本多修理方被申聞候間左樣御心得可有之候且又教導師之義は追ゝ御指圖有之筈に候間是又御心得可有之候　以上

四月十八日

高田孫左衞門

笹川藤內殿

以手紙得貴意候然者松岡八町より學問所之義に付別紙之通願出候に付其段申達候處御目付より別紙之通申來候依之願書並手紙共御廻申候間御披見之上此段御含被下度候　以上

四月十九日

勝木十藏
岡田喜八郎
笹川藤內

橋本左內樣

而して右內議を經て遂に同二十日を以て公然秋田彈正中根靱負に對し左の仰出あり

今度松岡町人共於同所學塾相營み職業の餘力倫理の道相學度願出候に付願の通申付候左樣相心得

教導師指遣追々相端立候樣心配可被致候

斯の如くして其許可を得塾生を養ふこと七年文久三年九月十六日病を以て卒す・法名を心明院本固正末居士と云ふ鄕土大に之を德とし淨土宗安泰寺に葬儀を行ひ後ち窪村の千昧三昧に碑を建て粟田主藥師長遠之墓と刻せり此九字は浩齋が生前に於ける自筆なりと傳ふ

顧うに浩齋は松岡地方に於ける醫人として將た文學者として優に開祖と稱すべき者あり博覽强記而も本藩福井の近きに媚びず淵默にして雷聲たらんの器天歲を藉さゞりしは洵に傷哉特に國學に精しく

訶人曙覽と親友たり常に本邦竪道の頽れて其書の多く世に傳ふる無きを慨して一大著述に著手し先づ大同類聚方を經とし多くの竪書を萃めて之を諱とし是に自家の蘊蓄を傾け盡して全部十冊と作さんと欲しゝも其七冊を終へ完結するに至らずして歿す曙覽其訃を聞きて直ちに徒歩松岡に到り之を弔ふこと慇懃に手向くるに訶詞を以てす由來孰れの國を問はず一世に嘘を吼ふるに巧みなる智者多しと雖も未だ萬世に名を布くの愚者に乏しきを慨む獨り曙覽に至りては予が所謂愚者なる者の第一人なる哉而して浩齋多く人に交らざりしと雖も曙覽との親交に至りては蓋し千載の下尚ほ知己を得て誤らざりし者と稱すべし又以て瞑すべき哉

浩齋の訶

うきこゝろなみたそさきにしられけるわかおもふ人もかゝらましかは

柳原生の彌生はかりに身のなりいてたまへるを祝ひて

生さきも久しかるへし長閑なるはるに色そふみねの松か枝

橘曙覽著・志濃夫廼舍訶集の一節

松岡幸山長遠この九月十六日みまかりけるよし聞て吊に物しけるに其妻なるものわつらひて有けるほとにありとありし事ともかき崩しいひいてゝいとう歎きけるありさまいとあはれになん長遠世にありし時神世なからの竪道のはやう亡せて古き竪書といふ物の世に傳はれるかなきをいたく歎きたらはぬなからに大同類聚方のたゝ一部今も世に殘れるを大綱にとりてなほあたしももろ〳〵の書ともにつきていさゝかも此道によしある事のあらんを取ひろひ一つの竪書著さんと思ひおこして貧しき身なから其事にかゝつらふことゝたにいへは得かたき書をも遠きさかひよりもとめ出しなとおふな〳〵力を盡して今はその書かねてのあらましなかはに過て綴り出けるものからなほ全くはなしをへて有けるを思ほへすうちわつらひてはかなく成にたる妻なる者にしか〳〵のふみいつこにかと問けるに涙こほしつゝ文筐ともさくりめくりて七冊の文とり出たす見もてゆくにおのれは竪のことしらねはつくりさまのよしやあしやは見わかねと藥名病名をはしめよろついりほかなる事ともを皆皇國語もて假字かきに物したるさま皇國念ひの志のまめ〳〵しさたふとしともたふとしいつはかりにかありけんこゝに來けること有けるにかたくかきつゝりたる物とり出し見せて記さまいかに思ひ給ふらんなといひたりしことのありけるなと思ひ出られて袖うちしほらるゝに妻なる者またかの人今といふきはにも此文のことひ出て今三卷はかりになりにたるをくちをしく書をへて我は目ふたくことよとうちなけきつゝやかてなくなりぬるにこそとうちかへし〳〵語るをきくにむねふたかるをせめてねんして訶をたにとて靈代のまへにたむく

一部の文かきをへむ程をたにこの長遠を世には在らせて

一ともに滿ちたらすとてなけかめや世になき文をかきし七卷

書き繼む人また有て汝か效績つひには全くならむ行すゑ
えみし唐土またなき國の術からぬくすしの術を一人書出づ

第一節・三・金津醫人傳

筱岡玄察

筱岡玄察は實に我が家系に於ける高祖にして法名を釋順慶大居士と云ひ金津三昧山清閑なる松林に墓地(享保初年建設)を存して碑石儼然たり舊記に據れば元と加州岡之先黄金家の末にして元祿年間仇を避けて南越金津に來り姓を筱岡と稱して一家を興て醫業を開き傍ら儒學を稱へ特に產科を以て其名四方に聞ゆ爾來累世玄察を名とし儒醫を以て帷を垂れ遠近の僧俗來つて門に入るもの甚だ多し現に鄉土に於ける家兄に至りて九世を享く即ち南越に於て連綿として醫藥の業を嗣ぐ者の古參者を數へて福井の大月・三崎兩家に次ぐ者と爲す蓋し累世二百五十年間諸種の人物を輩出し或は加賀前田公に仕へて一世に名を恣にしたる者あり或は江戸に出て丶高砂町に產科を以て開業し塾生を養ひたる者あり或は相州小田原に產科を以て家を興せる者あり或は書を著し詩人あり謌人あり俳人あり書家あり畫家たりし者あり家藏の古書散佚せしもの尠からずと雖も猶ほ積んで山を成す予靑衫父に侍するの頃夏季に入れば家兄と共に曝書に月を費し愚にもおさな心にうるさかりしもの甚しかりき而も當時曝書の際之を繙くに產科に就て著色せる寫本圖譜の如きもの幾許なるを知らざりき或は洛の賀川執中館の門に入りし入學の次第・實地試驗許可書(後出)及び當時塾生との交友・賀川家の儀式等記載せる日記を保存す今に至りて之を覽れば趣味津々として春日秋夜讀んで倦まざる者あり予は閑を得て之を整理し世に傳へんと欲するも其分量浩瀚にして直に編輯すべからず今現に手許に存するもの丶一部には亡父が安政五年秋八月十二日發足十七日京都へ安著二十二日賀川家へ入門よりの日記にして頗る精細に記載せるもの表紙に他見無用とあり則ち當時賀川家の家憲として每年元朝には一門塾生を集めて祝杯を擧げ其席に揭ぐる所の懸軸には

神佛のめぐみにかなふ我流儀末世の人をすくへたまへや

を以てしたるが如し予は今謌意の善惡を評するの必要なきを以て暫く措かん而して我が父は當時の塾頭にして塾生たりし者は越後細川檢齋・加州中川元碩・雲州原主馬・加州曲直瀨元靖・石州岩本靖庵・奥州鈴木三節・加州石川春齋・幡州坂井保庵・紀州井上儒(?)德・讃州筒井信造・豫州楠岡須覽(?)等なりしもの丶如し特に其出生地及び癖等に及んで祕書せる所を考ふるに塾頭としての必要ありしものならんか賀川家を去るの後西洞院椹木町上田元冲に就て內科學を修め又城谷中書にも師事したるが如し僅かながらも其日記ほの見ゆ按ずるに累世の玄察概ね一度賀川執中館に贄を執らざる者なし故に其因

緣亦淺からざりし者ありしなり

更に先代の或者の大野藩醫兼儒官松邨九山との交態に於ては初めは自ら大野に到りて門下生たらんと欲し會見したるも後ち郷に歸り友人として詩文を往復し(松邨九山傳參照)互に添刪批評したる者の如し其詩文の草稿數卷予が筐中に存す之を繙けば其交態を知悉するに難からずと爲す

又藩儒鶴皐前田誠・雲洞前田曇川と交りし者あり孰れも詩友として交りしに似たり二人者と往復の草稿も亦予が筐中に存す

又福井の醫山室松軒其他の一族と親交ありし者あり醫道に於てのみならず詩に於ての友人たりしものならんか紀行・文章・詩稿予が筐中に存す

又半井元冲と交りし者あり臟覽の事に關して産科として必要なる點を質疑し且つ詩友たりしが如し

又代官受込役たりし樵笛市川德行が鯉魚を畫くに巧なりしは今人の猶知る所たり而して德行との交友あり彼には寧ろ詩を教へしものゝ如く彼に贈りし詩稿予が筐中に存す蓋し彼が六曲屏風に鯉魚を畫きしもの現に珍襲して郷里の家寶たり世未だ德行のかゝる大作を覽たる者尠なかるべし傑作たるを失はず

其他美濃の俳人以哉坊・加賀の名僧賢憧上人及び世の名僧大醫と交りし者甚だ多し郷里に於ては淺田新輔の家系(金津に於ける最舊家にして朝倉國主時代の武臣たりし家柄)僧小泉下關・香月龜洲・詩人坂野致知・渥美代官等とは互に往復し同業淺野・丹羽・井代の徒と親しく正山には學資を與へて醫業を開かしめし者あり後日之を詳記するの期あらん歟

終りに蒞み予が幼時より祖母父母世人等よりしばしば傳聞せし先代の一逸話及び先代の書家鶴鳴が二曲屏風に自作自書の五言絶句前漢の書を詠ぜしものは予が幼時より今日に至る最も强き印象を受けたるものゝ一たり筆力雄健懦夫を起たしむるの慨あり珍襲して郷里の家寶とす

爾餘の數多き著書稿本等に就ては他日の大成に期せんと欲す就中一言すべきは松平啓運記及山口記にして實に實永元年先代の或者が筆せる寫本たり特に前者は福井藩の興りし由來及初代藩主迄の史實を詳記す二者共に往年春嶽文庫の乞により貸與して康莊侯慶民子等をして一驚せしめし者たり蓋し福井縣史を編まん者の逸すべからざる好史料にして又珍本たり

世祿寶良少因循竊位班乃知天下士多出布衣間

右讀前漢書　　鶴鳴貞手題

附記　鶴鳴の書は三國大森田家及び同地方に珍重して藏する者ありと聞く

風清

非素問无以立論　非本艸無以立方

奉答　牧野公見寄　　七十有九翁蘭山書　博職

清門鍾鼎美奕世國干城兵講孫吳精道傳鄒魯明青天千雉出白日萬家晴媿我滄浪上百年此濯纓

淺野文龍頓首拜

呈　篠岡君希曾達丈玉案下

僊輿枉顧惠以落雁糖二筐雅愛懇到感刻無量不佞適有福城之行何相須之慇而相遇之背乎不及倒屣趨迎投車轄悵恨殘感寤寐亘忘日之前承下問不佞鼷鼠短技然於交誼不可敢不答也故不顧愚衷苟且布字託伊藤丹益致其區々不識當盛意否不佞之邂逅　足下雖固由於小泉氏矣亦似不偶然者非邪目擊論業尋及騷雅劇談縷々心醉絶倒挑燈酌佻歌詩章諸彥皆若狂之埜父豚兒之倍筵者乎哉既而倒一大樽篋言非一世之雄乎解袂以來未曾駐如斯雅蹤頃日吾友木屋五良兵衞從母而卜居仙里定知叩玉扉狀不佞之懶惰棄暴也空腹素餐無地遁辜愧懼參並汗顏噬臍伏乞　足下居諸之高明憐此螢火五良兵衞嘗有輸墨之志而所伴家產一貧尙未成也　足下幸容束脩使彼侍于皮虎則於小子其悅之可知矣福城淺野妻木之輩蒙君命經始竪然費于郭中土功未落期在仲夏竊所以模三代之庠序而正時弊者則不義而且勇也焉吾輩值此盛舉而都講之選非　足下而誰乎不佞雖愚朝夕剖目而竢焉郵便倉卒書不盡言何將促膝一場吐露平日之積鬱所約書籍及拙齋廋園二生之詩併上時惟暮春霖雨難晴疫風迫人伏惟千萬自玉三月晦

越湊　吉田復道臧拜白

復道臧印

草堂集賦一律示諸君子

長者之車簇席門饗應不腆腐儒餐庭前雪迎春晴沍窻外鶯添淑氣繁金盞行時嫌半醉新詩成後許相誼此蓬匪是丸屬舍無限流風任口噴（附記、九山の此詩書は大正八年七月土肥鶚軒（寄贈せり）

十月廿日　公筵席上卒作三首御慰に入御覽候

渡雪江　得二蕭

南州解纜意蕭々況復凍雲寒吹飄積日交臨分手切經年別向故鄉遙到來江岸花留客歸去帆中雪滿橈舟子不知漂盪思乘歌擊汰度驕潮

題灯火　得二冬

解言文史事三冬耿々寒灯神自鍾繙卷何驚雨聲急尋章不覺雪堆封深更思友光炎暗殘漏裁詩花蕊重幸免匡衡勞鑿壁通宵對汝賞心濃

新柳限韵

垂柳碧池漏一株舒占春未妝鬢髮美先見娥眉新綠淡花難妒條安鬻僅馴綿々芳艸面似待冶遊人

九山　猷

×

楊柳芽將綠斯時送汝行離心千里遠別語萬言長我意深難說是情請莫忘答花添涕淚啼鳥斷肝腸呼僕除村酒

命婢飾旅裝舉杯猶嘆息把筆特悲傷今日辭家國明朝入異方思親望玉兎回首渡津梁舟泛矢橋外身遙洛水陽
帝都多學士客舍擔青囊函丈仰高德東脩覲偉光講經殊廣大問字轉精詳禮樂歡氷解詩書拂面墻堅持廬植志
本上馬融堂强飯祈無事養神期永康頻依文會友須著錦故鄉百苦皆爲夢欣然醉此場

勤

右送笹岡宰治君赴雲隣先生之門

附記　醫文學博士富士川游著日本醫學史・杉田玄伯・立卿（號紫石・名勤）・成卿傳參照

×

□便不輙頃辱朶雲之贈忽慰肌渴向亦承書及詩二首讀之誦之絢然盈目宛如春華誠班李杜忽欲依芳韻和之
謬劣如僕何敢當之且俗務紛亂之嘯咏之暇故遲延到今爲殷洪喬疑亦宜哉豈不勝赧顏乎無深譴焉佳作二篇
一篇疑有出韵因和一篇呈几前不足敢言鄙懷願吾子定敲推何幸如之又喻以春臺先生儒醫論可謂卓見也又
問於和田先生有異聞乎滔々者天下皆是也豈得有異聞乎郭玉所謂醫者意也唯在其人乎聊以寸楮復命而已
不悉
思君樓上試春臨烟靄籠花夕日陰三歲難忘離別意一零頻憶結交心遷鶯出谷吟情切歸鴈翔空遺憾深錦字投
來詩似玉偏憐朗讀淨塵襟

丙辰之春二月十九日

笹　希曾兄　稽右

山室　裕　再拜

種豆得

問道三年歲有深尊羹一旦收歸任隨機緩急不他事先後權宜唯一一

送笹岡大輔父歸省

法眼　冲　元　冲　生生

×

恭（ユキ）　基（モト）　基　字　豢

切　姬

詩　抑

溫々恭人維德之基

安　政　己　未　秋

宇維德

西椹　法眼元冲

×

我が祖先二代玄察の頃（享保の初め）加州大聖寺藩主夫人（現・子爵前田利鬯氏の先）難產の事あり
名にしおふ百萬石の城下を以ての天下の名君其分家なればとてかゝる時には一門眷族擧げて之を
慮ひ產科と云はず領內に名ある總ての醫師を悉く召されて診察せしめ玉ふされど如何にしても娩
出するの模樣なく皆々因じ果てたるに一人の者曰く隣國越藩に於て產科に名有る者は福井に大月

あり金津に筱岡あり而して大月は松平公の許可を得るも或は召すに難からん幸にも筱岡は金津にして本藩を距ること四里直に禮を厚くして來診を求むべしと議一決して終に祖父を召し診察せしむることゝはなりぬ祖父即ち到りて一診するに天佑なるべし數時間を經ずして安らかに男兒を產み給ひ特に母子共に健全なりき一門眷族大に喜び之を德とし翌日に至り大廣間に於て藩主自ら出で給ひて祝宴を賜ひ其功勞を錄して藩醫に召抱へられんとするの話に及べり祖父曰く地は即ち加賀藩越前藩の別あり是れ幕府の政略として已む無きも我が醫道に於ては天下に通じ貴賤貧富を論ずべき者に非ず他日御存知方にて御難產の事あらんか召に應じて直に來るべし加ふるに我が家門下生多くして情誼に於て之を棄つべくもあらずされば毎月一回は拜診の爲め奉仕すべし何卒御召抱の儀丈はゆるさせ玉へと申しければ此事止みぬさらば望みの物とらせんと仰せられしも更に望みの物なし只希くば我が家紋は上り藤たり若し他日熊坂の關所（當時越藩と加賀藩との境に立てるものにして尤も嚴重に咎められたる難關たり）を通ずるともあらん其際我が定紋の者は何等のおとがめ無く通じさせ玉へと答へければいと易き事なりとて其後獨り我家の者のみは何等の咎めも無く悠々として關所を通り得たり實に王侯に優るものと言ひはやせりとなん當時春王三四月の頃なりしか大廣間の廣前には櫻花笑みを湛へて將に咲はんとすこれぞ何よりよき記念なり一枝折りて玉はれよと言ひければ直樣折り取らせ玉ひしに大根を切りて切口に之を刺し歸路駕の四隅に飾りつゝ歸宅の後自ら櫻の臺木を求めて接木したるにめづらかにも能く接ぎ得て古木ながらに今も予が鄉里の庭前に咲き誇れり爾來世人呼んで筱岡の牡丹櫻と稱し金津名物の一たり先代を追想するのよすがとして又なきよき記念にこそあれ後に三寶に三重の小判といろ〳〵の物添へて下し賜へるぞかしこき當時乘り行きし駕は今も鄉里に保存せり是れより後は屢〻加賀の患家に招聘れて其名益〻高く診を請ひ得ざる者は產前必ず筱岡と紙に書きて嚥下し或は竹の筒を煎じて之を飲めば安產すと稱せり今も之を履行する者多し又產前・產後・血の道の藥は二代玄察より家傳として現に遠近爭ふて來り求むるぞ譽なれ而して月一回往診の事は廢藩に至る迄累世之を繼げり此往診の有樣及び加賀藩より招待の儀式は後日記する所あるべし

附記　亡父が儒學を授けし者にして目下頭角を顯はせる者には京都東本願寺講師有馬藤鎭・北陸中學校長上野認成・佐世保海軍技師林幸吉等あり

蘭澤名芳艸

許可書

古人曰醫十男子難
醫一婦人女科之難
其不然乎故爲此業
者不可不愼也夫孕
育之道雖出於天地
生々之自然而不待

人之救護者也稟受
有羸弱保護有過失
遂致釀成許多之患
是以有湯液之設救
護之法存焉然未能
罔其方遺失其術謂
劣也至于如分娩之
横逆豈鍼灸藥石之
所能及耶羅此天枉
者不爲少焉家君憂
之夕考朝試實獲不
傳之法余從事于玆
蓋有年矣沈潛咸刻
益推明其術攘棄流
俗陋弊滌除諸家舊
染女科之業大成矣
執斯術使世之罹此
患衆工無措徒待斃
者出之活地豈謂無
少裨益乎乃今入我
門之士雖授之以秘
訣而無藏受者從非
研精焦思以熟習之
焉能取之左右而逢
其原哉勤旃々々勿
侮慢以謀人然而若
有出藍之才輔翼奬
成俾人登壽域則仁
術之所以大振而余
所望于諸子者也因
記某梗概授焉云

治術

候孕　整胎　按腹
救痙　禁暈　復肛
轉宮　救癇　覆寒
揉乳　坐艸　抒倒
擧攣　整横　坐産
狂産　壯尻　釣胞
斂宮　同生

右件治術秘訣及家
書盡傳與焉愼勿背
初之言

賀川滿卿
安正六己未歳四月　賀川滿定
賀川滿崇記

女竪博士　賀章滿崇

與
笹岡子大輔

註　右は唐紙にして賀川滿崇之自筆に懸り表紙裏には「萬延元年秋七月二十四日余歸省之時京油小路丸太丁賀川三貢先生授予笹岡恭基」と書せり則ち乃父に授けたるものなり

北條若齋考訂簡易傷寒論序

嗟夫豪傑之士孟軻曰雖無文王猶興北叔子遊于東都而好簡易之學其簡易者何也簡明其道易大其事是

乃賢人之業也克易克簡而以歸於一者鮮矣在昔靜齋泰嶽之二夫子刪正傷寒論而復于古北叔子遂識歸之於簡易而得活用之道矣夫修學之道學而習之思而修之修德之道大哉猶若泰山之峻而鋼諸重泉之下其惟信己也此智者之所以不常有也滔々世醫稱家傳禁方豈異乎以葉興濟人乎成徒杠興梁者幾希矣嗟夫豪傑之士雖無文王猶興蓋北叔子者豪傑之士也享和三年癸亥黃鐘甲子

南越　篠岡煥有章龍庵識

淺野休眞

通稱を助右衛門と云ひ家世福井藩に仕へ祿三百石を食む特に四代藩主松平光通公の知遇厚く一日公に隨ふて遊獵に出で鷹の視線を窺ふて鳧を獲たり公其敏才を嘉して恩賜あり公薨じてより金津に住し醫を業とし風月を友とし此地に卒す實に嵩山淺野道有の祖たり則ち後に寛政七乙卯夏道有逝つる所の墓碑・金津永宮寺境内に儼存す

丹羽仙庵

名は公信字は允文・仙庵と號す金津の人淺野元勇の二男たり丹羽氏の養子となり去つて丹生郡宿浦に居を占め醫を業とし女科を以て名あり性恬淡寡慾幼より學を好み特に星學・易道に精しく人と交りて懇篤濫りに多くを語らず又好んで酒を飲むも多くを欲せず醉へば則ち陶然として樂しむ眞に古人の風あり寶曆十庚辰年五月卒す享年六十有三・法名を貞裕と云ふ著書には經絡說約・診腹傳各一卷あり

丹羽嘯堂

名は文虎字は子牙號を嘯堂と云ふ府中奥村南山に師事して其名顯はる偶〻朝鮮の使者江戸に入るに方り福井藩の命により之を攝待す後ち西尾侯の聘に應じて大阪より三河に移居し傍ら醫書を講ず著書には亦好問錄・傷寒論內傳外傳散攷等あり又詩詞を好めり左に其一二を錄すべし

自遣

三十未有立　又過六年春　思親歸不得　何作倦遊人
三十未有錄　又是六經秋　子虛薦不得　何著鷸鷸裘
三十未有室　又逢雁六回　琴心挑不得　何見文君來

越國世子伊豫公有　殿上元服之禮旦
龍威咫尺　賜盃　賜刀蓋特例云虎也小
人忝被齒錄則不堪忻抃之至　恭賦奉賀之時

世子入
朝　班出群宴闕　殿上　令名聞纓冠杓映昇平日命服新含閶闔雲佩劍　賜知星斗耀稱觴座右御爐
薫宗藩封爵公侯貴帶礪千秋仰　聖君

天明丙子朔旦冬至夜集得尤

朔旦逢冬至預知陽氣浮風光看欲改雲物望分悠日是天正節時宜漢曆求春華先臘動甲子逐年周蓂莢纔
催葉鬻兒未出幽月輪生一線霜色入高樓夜半開樽興醉來吹律留黃鐘同調在歌雪共優游

除夜草堂集得燈字

堂外園池一夜氷北風吹盡曉寒凝天將改歲星光動窻欲入春梅影增滿堂情濃開臘酒三餘業廢對冬燈諸
君縱似龍門客愧我抗顏非李膺

夜　思

家姪學南留大藩長兄江左倚侯門華陽女子相思否一夜三飛一夢魂

秋夜懷女孝娘

秋風孤客髮鬖々夜々倚門情不堪想像蒹葭州上月清光入夢落江南

毛巾歌　謝家姪士德氏見贈天明丙午南至日

寔兮毛巾頭可安此物人間所罕觀人間煖帽何能及況復可以代儒冠郭家熟角吾不傚陶令漉酒客可歡二
子風流一時事漉酒墊巾不禦寒窻外風雪深三尺御寒毛巾本別般莫謂禦寒不如酒溫酒三杯强自寬唯酒
無量供醉臥酕醄昏瞶書唯看嘯堂先生猶崛起頭戴毛巾書可攤手挑寒燈覺頭煖書燈烱々坐夜闌何可一
夜無此物三餘修業亦不難有姪遠致毛巾贈使我時有起予歎視予猶父情不隔千里如見其肺肝

聞宗姪文驥建高祖碑於金津

高祖不祿一百年玄孫建碑瓜瓞緜瓜蔓空有生茄子學業何曾忝祖先三年病臥吾已矣千年文章姪勉旃越
藩侍竪兼學業好奉血食家學傳

江邨北海七十賀詩

壽席東山遲日暄花迎飛盞似西園賀篇維競中原客僊酒新盈北海尊尚極星精增歲月達生春色滿乾坤頤
神耆耋君家事天賜由來鳩杖存

×

天明八の年むつささささらさのあほひに侍る比かけまくも内裏回祿し玉ひ洛中や
けて野とかはりたりければ龍のきみかもとより二首の歌もて申おくり侍る返し
春の日にもえいつる草のそれならて宮もわら屋も煙とはなれ

けふりたつ燒野となりぬ春の日の花の都は名のみなりけり

又おくにまみそへ侍る

もゝしきやふりにしあとをあらためてむかしにかへれ御代の榮は

碣石先生身まかり玉ひけるをなけき侍りてよめる

おもはすよ同じ根さしを五月雨につらなる枝のくちぬへしとは

年の暮方に子を失ひて

今はとてけふしも年はくれ竹のこのひとふしにそむるなみたに

淺野碣石

丹羽文虎の兄たり名は文龍字を士雲或は恭齋と云ひ碣石と號す金津の人藩醫に擧げられ書方準を著はして之を梓に上せり又國風を好めり天明八年京に葵祭見物せんと赴きし時大火に逢ひければ其弟丹羽文虎におくりける詞

めくみある君か代なれは春の日にあをひとくさももへわたる哉

春の日にやけのゝきゝすそれならてけふりにまよふ老か身そうき

淺野嵩山

名は道有諱は文驥字は士德・嵩山と號す碣石淺野文龍の男にして福井藩侍醫長たり性豪邁穎悟にして才學優秀治術往々人の意表に出づ江戸に秡役すること十又三回時の藩主治好公病あれば必ず嵩山をして治療せしむ故に思寵太だ厚し而して當時醫道の晦蕪せるを憂ひ醫黌を創設して子弟を養成せんことを欲し官暇日夜構想遂に同僚勝澤一順・妻木榮輔等に諮り治好公に之を建議して嘉納せらるゝに至る實に文化元甲子年たり(越藩福井醫史參照)蓋し濟世館の創立者として將た越藩に於ける醫政者として醫史上に異彩を放つの第一人者たり而して文化元年に創設せる醫黌濟世館は漸次狹隘を告げ同七年六月改築して更に開館式典を擧ぐるに至る其學館は講堂二十疊・上溜八疊・下溜六疊・講師部六疊・定詰部屋二疊・湯呑所五疊・三崎大月詰所二疊・番人三名・御小人を官より附し後荒子一人御匙手付定渡と爲す既にして文政五壬午年八月藩公攝州有馬溫泉に浴するに際し駕に從ふ同十一年病を以て致仕し男文彝嗣いで侍醫に任ず其初め病を獲たるの日筆を揮て濟世創業事聊足誇世人と書し翌十二年再び筆して千歲不朽濟世業と書す即ち終始醫道に盡すの熱誠あるを窺ふに足る文政十三庚寅年正月三日卒す享年六十有六・眞宗本願寺派興宗寺に葬り墓面に維嶽先生と刻す又傍ら詩文を能くし書道に丈けたり

×

呈中山山口老先醒

茂竹薰風翠色新日趨階砌問安辰交情累代荷鴻庇敎示多時仰德隣千里歸省仕感孝頻年輔弼更忘身慙吾未飲上池水謾在異鄉稱越人

留別男碣石于東都

老生向北汝留東盤水鯉魚書數通預擬明春作賓燕還來此地送歸鴻

歲晚書懷　年內立春

曆尾未終韶景催客中殘臘値春回無勞懶僕强消雪不倩暖爐枉促梅技拙偏慙歲祇役恩深却懼日叨陪束脩時有添檐酒獨坐聞鶯酌一杯

自　嘲

食閣無魚酒亦無寒廚養得一炊奴朝餐餘粒簷端撒時有小禽三兩呼

關公廟碑銘

漢室將顚扶翼奮身勇冠三國誰逐其塵依然美髯遺像威神忠肝義膽古今一人

詠　蝸　牛

負殼無方事漫遊淸陰隨處此歸休孤廬移去窺風靜雙角伸時卜境幽畫壁連綿遺銀迹上休延引極枝頭偶聞人語驚而縮幸免田單火尾牛

坂鳥畫記

夫戢武之道三冬則練兵古今一轍各藩皆然南越稱之寒稽古其要在耐身於風寒也於是先矣黃門公起於坂鳥之事試焉坂鳥者猶古之弋也認場郭外遠則四十里近則三四里抱於江澤而不甚高大之山阜爲佳凡鳧雁之屬夜則啄野晝則游水昧爽黃昏之交十百爲群翺翔而往來山阜先此時張網伏之啣枚屏息恰如伏兵之狀大分誘之應機衝網飄乎戾天鳧雁突而羅爲網眼所縛與網落地一喝捕之或鴻鶴之屬羽力尤猛負網而飛預網繩於網竿端率而惹之垂天之翼亦不能施之頑然所獲矣即坂鳥也蓋爲之有工拙唯在機發遲速已越之爲地邊于北三冬積雪寒威甚嚴圍爐重裘之人尙不耐焉況山澤四十里之外行路艱難凍雲四布雨雷霏々猛風摶面寧非全鐵漢混石胡豈敢耐乎而壯者一連數日爲之未曾凍寒也無他矣能馴也而馴之亦難哉他邦所無而特黃門公起之二百餘年于今襲慣爲常其意遂哉抑黃門公督責武備之意至矣盡矣將以之曰練兵之要非誣也網之制所圖不僞故不及云爾

平本良充

北瀉浦人祭平久渚君云君嘗爲金津令時北瀉浦不豐民離散者十七八君間行以撫其民期年而治而浦人相率謁君謝恩且稱君曰恩爺後君陞列爲侍謁者而移家于藩而浦人亦復來謝者十六七年如一日也今玆初秋君病率于家其浦人亦來弔乃里正某者請奉君之謚號嗣君許後數日復告曰選其地更建恩爺之碑且設神主同祭祀焉令吾子孫不忘大恩矣嗣君亦許焉驥聞之曰驥奉君之談笑者亦十三年所深知君之仁忠

溫厚有召公之德而今聞其浦人之祭祀者則其浦人即召南之人而有甘棠之愛者固然矣其他君之有德于民者亦可以推知云丙午冬十月　醫官　淺野文驥　拜撰

正山二逐

通稱六郎左衞門二逐と號し福井城下荒木祐右衞門の二男にして金津に來りて正山氏を襲ぎ醫を業とし俳諧を以哉坊に學びて珂雪庵二逐坊と呼び文化十一甲戌年正月二十六日卒す享年七十・著書には葉のこぼれ(我六の追善)・松島紀行綠心二冊・俳諧句解(寛政癸丑二月著香月龜洲の序あり)・みづかゝみ俳諧定法格・俳かい夜話集二冊・口決名目・言の葉目(雪炊十三回忌)等あり又正瑞寺境內に以哉坊の碑を建つ今尙ほ之を儼存す

×

清香もおのづからなる春の宵
分け入らん杖にまかせて花の山
ふりふらぬ日和うらなふ秋の山
只たのむ千年を松の冬木立
花は櫻櫻は花のあるじかな
雨に風に虛實合點の柳哉
うてば響く嫁へをしへの砧かな
鏡へも影の匂はん窗の梅
淡雪の松にきえゆく眺かな
燕のわかものにして柳かな

山中無曆日

鶯の使に春の深山かな
耳に清し又目に清し谷の水

正山二芳

二逐の男にして通稱を六郎助後に玄春と云ひ醫業の傍ら俳諧に遊んで清隱齋二芳坊と號し天保十年八月二十五日卒す享年七十有四・眞宗安養院に葬る

×

ない智慧をつけたる風の鳴子哉
葉をつけて來たは手柄ぞこの靑柚

仕事より休んだ時のあつさかな
心得て笹もうごくや夏の月
在所歌はりあげて行く枯野かな

井代養珀

祖先を井代養俊と云ひ醫業の傍ら金津俳諧文臺四代を繼ぎて棟々舍百丈(美濃派・獅子門)と號し文化四丁卯年九月三日五十五歳を以て卒す法名を釋道圓居士と云ひ永宮寺に葬る養珀に至りて同じく俳諧に趣味を有して醫業の傍ら風月を友とし棟々舍志丈と號し文臺七代を繼ぐ又漢學を修む弘化三年正月三日卒す享年五十有七・法名を釋行信居士と云ひ永宮寺先塋の次に葬る

×

短夜や灯ひとつ明けのこり
子供等の買物多し盆の月
殘されて一入ひかる螢かな
灯籠の三日月くらき蔦葛
蔓たぐる畑人吹かるゝ秋の風
松にさへゆるさぬ秋や蔦紅葉
しと〳〵と澤のながれや女郎花
渡守よぶ宵闇や鳴の聲
惜しさ日のつれなく傾く花野哉
のどかさや松の浮根を假床几

井代澹齋

養珀の男にして澹齋又は淡齋と號し弘化の頃長崎に赴きて蘭方醫學を修め歸後醫業の傍ら漢詩を能くし又俳諧に遊んで嘯月舍(又棟々舍)志竹と號し獅子門九代の文臺を繼ぐ明治七年五月十六日卒す享年六十有七・法名を廣正院觀月測道居士と云ひ福井淨土宗法興寺に葬る

×

陽炎や流るゝ水に添うて立ち
夕立や跡は谷間の聲になり
山寺の木魚は止んで閑古鳥
浪のしてほの〳〵明ける浦霞

若鮎や遊ぶ淺瀬に花の影

第二節　大野醫人傳

松邨九山

松邨九山名は良猷字は公凱通稱は栖雲・九山は其號なり父名は元暢・越前勝山藩の醫官たり母は牧野氏寛保三癸亥年七月二十三を以て九山を生めり九山幼にして穎敏業を父の膝下に受け齠齔既に詩書を誦し成童にして論孟を講じ又能く文を屬し詩を賦す人以て神童と爲す勝山藩主小笠原侯擢んで扈從と爲す長ずるに及んで武藝を兼學し又算數に妙なり更に謠曲を善くす明和元年二十二歳事に坐して官を免ぜられ去つて同國大野藩に徒る蓋し忼慨忠憤匡弼するあらんと欲して反つて罪を得たるに因る然れども絶えて自ら辯する所なし爾後先業に遵つて醫となり且つ帷を下して教授す後勝山侯九山の忠貞にして罪無きを察し乃ち命じて其祿位を復す然れども就かず辭するに母氏の意を以てす土井侯其賢を聞き召して大野藩侍醫兼侍講と爲し厚く之を遇す九山醫に於て固より精妙を極め平生の治驗粗ぼ其著有中篇に見ゆ而して業餘惟學是れ務む其人を敎ふるや諄々として長を導き短を强ひず憤すれば則ち之を啓し悱すれば則ち之を發し優柔饜飫之を薫陶す故に達材成德の士往々にして是れあり且つ國俗文雅に向ふもの九山の力多きに居る國人其德を慕ひて從遊する者相繼ぎ四方通信交を納る者亦少なからず大野本と山間の僻地而も名聲顯はるゝもの學德の致す所ならずんばあらず其性謙恭學問一に己の爲めにして自ら之を履行す家範雍々閨門肅清なり凡そ人に接するや溫厚和恭人の過は之を寬恕し之を忠告す主君恩禮愈隆く爵を進め秩數を加ふ老に至つて復產業を問はず一室に閑居し唯文墨を玩びて命に安んじ眞を樂む文政五壬午年五月病に罹り其十三日溘焉として逝く享年八十・大野城東妙典寺に葬る門人私に謚して文忠と曰ふ

著書に方野治筌・有中篇・醫箴・闢醫斷等の醫書の外藝園鉏莠・豈好辨・天民耦語・義臣解難・管仲孟子論・論語古訓餘義・詞壇骨硬・讀經譚・詩語・文說・九山初稿等皆梓行せらる又稿本字義訓あり綜べて四十五卷部門五十音に別ちて精緻を極むといふ就中管仲孟子論は其識見の超邁と論斷の奇雋とを證して餘りあり即ち予が愛讀する所の珍本の一たり又藝園鉏莠は江戸の文豪山本北山の著文率及詩話の誤謬を攻擊して完膚なきに至らしめしの著たり予が先代は九山と互に詩文を添刪し友とし善し其詩文の草稿亦予が筐中に存す蓋し又予が同國の先哲を世に傳へんと欲するの微意に出づ

附記　尙ほ管仲孟子論に就ては長友學習院教授有馬祐政往年予の承諾を得其大要を抄錄して雜誌東亞研究に紹介されたり乃ち識者に告ぐ

雨森牛南

牛南名は宗眞字は牙卿・牛南は其號なり後に又松蔭と號す大野藩醫たり嘗て江戸に出で一世の文豪山本北山の門に入る博く經史に通じ最も詩を能し當時北山門下の詩豪を以て名聲天下に嘖々たり文化十二乙亥年十二月卒す享年六十・著書には松蔭醫談・牛南子等醫書の他論語賓說・詩謏蒲鞭・萬日記行・筆京・松蔭春秋・牛南詩鈔等あり

附記　予は珍本松邨九山著義臣解難に題せる牛南の序文を珍襲す

土田龍灣

龍灣名は質幼名を玄意と云ひ勝山藩士波多野氏より出て丶大野藩醫士土田玄碩の家を襲げり龍灣性洒脫にして毀譽得喪毫も意に介するとなく邊幅を修飾せず弘化三丙午年藩主の命を奉じて大阪に出て緒方洪庵及び高良齋に就て醫學を修め後再び江戸に赴き杉田成卿に就て專ら蘭方醫學を研究す嘉永二己酉年晩冬藩主の命を受け領内の士民に種痘を普及せんことを勉む願うに當時種痘法既に我邦に入り福井藩に於て笠原白翁の始めて之を接種したるありと雖も未だ全く行はるゝに至らず士民其新奇を疑ひ之を忌む者多し則ち同僚林雲溪及び町醫中村岱佐等と協議し懇々是等を說諭して只管ら主君の素志を貫徹せんことを以て任とす同五年正月侍醫に補し安政四丁巳年冬藩主より種痘に盡力の功を錄して衣服を賜ふ而して世醫往々其寵榮を嫉み之が短を訴ふる者有りと雖も敢て顧慮せず同七年正月病院總督を命ぜられ役米若干苞を賜ふ文久二壬戌年六月藩主龍灣が醫術に熟達し且つ病者に接して懇篤に隨うて治療するに當つて其勞を吝まず治驗益ゝ著しきものあるを思ひ新に祿若干石を賜ふ蓋し特典なり明治十九年夏故ありて土佐國高知に寄寓し同二十一年六月三日卒す享年七十大野藩に於て西洋醫學を傳へしは實に龍灣を以て祖とすべし衆人其訃を傳へ聞き醫俗共に哀悼せざる者無かりしと云ふ

林雲溪・中村岱佐

第三節　勝山醫人傳

秦魯仙

名は履字は中正幼名を敏太郎と云ひ七歲の時十能を著して濟哲と改め修三又は魯齋と稱し隱居の後更に魯仙と號せり家世祿七十石を食み勝山藩醫長たり魯仙は文化七年五月十八日を以て生れ父は福井藩醫澤貞庵の末男にして勝山に來りて秦氏を襲げり母は富島村南專寺の女魯仙十歲の時父を失ひ文政八年十六歲の時醫を以て給仕席に擧げられ十二口を賜ふ玆に於て福井に出で時の藩醫長淺野嵩山に就

て醫學を修め更に同十一年十九歳の時五年の暇を請うて京都に赴き儒學を田中履堂に醫術を吉益北洲に享け又產科を緒方順節に學び居ること二年去つて攝州に行き相方を豐前中津鈴能寺に學び又難波立愿に寄塾し後ち讃岐高松に到りて鷲岡良增に師事し後再び京都に入りて百々漢陰に醫學を修むること總て五年歸國して同藩伴家の女を娶る天保四年七代藩主小笠原瑞龍侯醫術の進歩を賞して六十石を賜ふ同七年に至り再び京都に赴き醫學を修むること三年同九年十石を加封す同十年瑞龍侯江戸に病めり卽ち赴きて病褥に侍す然れども翌十一年二月二十九日侯遂に薨ず同十二年八代藩主小笠原化堂侯未だ幼なり偶〻痘瘡を病む魯仙苦心慘澹食を忘れて治療に從事し漸く治す卽ち同年駕に隨うて歸藩す爾來化堂侯參勤ある每に必ず魯仙を伴ふ晩年退隱の志切にして暇を乞ふこと數回遂に致仕の命あり天保年間獲たる所の金一百兩及び書籍數十部を獻じて文武振興の新營を請願す藩其志を賞し希望に任じて學校經營の事を掌らしむ魯仙之を喜び熱心努力終に同十五年文武學校竝に文庫竣工し成器堂と名づく其地形たる城西に一邸を設けて講堂には聖像を安置し文武講場二字その他社長寮遊學士宿寮及び射場砲場を築き或は藥園を設けて百草を植え文庫には醫家の書を藏して文武醫學の類略〻完備す茲に於て魯仙をして成器堂管務に任ず國風爲に一變し文武の道日に進む實に七年の素志を貫徹したるに出づ藩其功勞を嘉し三十石を增祿し合せて百石を食ましめ且つ秦家をして世々成器堂學長たらしむるの特命あり嘉永二年幕府の命により藩に於て獻金の事あり卽ち三年間格外臣下の米給を減じ且つ馬匹を減ず時に魯仙馬術の廢れんことを痛みて飼馬料金を獻じて馬術を練習せしめ或は一藩上下共に病める者には服藥を施す藩主其志を嘉して劉俊畫軸二本を賜ふ文久二年退隱して心を水雲に托し讀書圍碁以て興を遣り全く塵外の一仙翁たり同三年九月十三日病んで卒す享年五十有四・法名を實相院本覺良性居士と云ひ城北曹洞宗義宣寺に葬る八男一女あり

魯仙の醫學に於ける外科鍼術產科に及んで悉く理を究む故に一門の隆盛其比を見ず性正直にして寡言而も固陋の癖なく親疎貴賤の別を成さず友と交りて邊幅を飾らず常に節儉を旨とし奢侈の風なく諸子をして能く諸州に遊學せしめ身老いて益〻質素に美味佳食を欲せず而して鰥寡孤獨を觀るに至りては金銀衣食を施して己を省みざるものあり故に庶民の魯仙を思ふこと恰も愛兒の父母に於けるが如く獨り勝山藩に於てのみならず隣境の翁媼に及びしと云ふ又病者偶〻死に瀕するの時魯仙の服劑を得ざるを悔い譬へ死すとも服藥を得たる時は是れ命なりとし毫も悲歎せざりしと云ふ如何に其尊信せられたるかを知るに足らん

長男鐵太郎は勤有と稱し江戸に出で杉田玄端の門に入り或は佐倉に赴きて佐藤舜海に師事し西洋醫術を研究すること年あり後ち其祿を嗣ぎて勝山藩醫長たり次男發次郎は江戸に出で劍道を齋藤新太郎に修め馭術を横須賀藩士武部平治に講習すること數年其奧祕を極む藩則ち之を賞して別に秦氏の一家を分立して八口を賜ひ馭術師範たらしむ三男朴三郎は後に朴仙と稱し佐倉に赴き西洋醫術を佐藤舜海

に學ぶ四男虎四郎は龍齋と號し遠く長崎に遊學して蘭譯書を研究し傍ら醫學を修む次は女子にして同藩田原親方に嫁す五男熊五郎は夭にして死す六男馬六郎は後ち剛之助と改め安井の門に入りて聖書を學ぶ七男除七郎八男循八郎は共に勝山に在りて文武の道を講習す其家庭謹嚴にし諸子皆怠惰の風なし

×

新建成器堂記

學校之設所以育才成德也先王立學以教育人才一日取以備公卿大夫百執事之選焉則其所施設皆素所講習也故以之莅政則教洽而化流以之立事則功成而不悖學政之有益於人也其用蓋博越前勝山侯莅政之初進諸大夫有司而告之曰吾叨膺藩守欽奉先勳舊章不敢庶務咸理洵賴群下協贊之力獨所憾者學政未起文教未振耳夫育才成器之法莫先於學矣及此時也建學以育人才以時考藝選言有效則錄而用之彰而進之庶任當其能位稱其德焉執斧斤趣工者勿稽期廢事墮我立學之本旨焉本藩秦履以方伎世其家至履强學篤行益述箕裘喜文教將振于國乃獻家所畜書數十部及金一百兩供學舍營造之資　侯嘉其節乃賜地一方就建學舍百工並力偕作不日告竣凡闢地若干畝立屋若干楹命曰成器之堂取諸學記之言也乃書揭門凡登此堂者宜晨夕力講習所以修己治人之道以副居位莅職之選也若夫衒技誇博徒鼓頰頰行不足爲矜式學不足關世教者非　侯立學育才之意也

天保十四年癸卯夏五月竹醉日

龜田梓謹識

第四節・一・丸岡竪人傳

竹內壽庵

通稱を芳契と云ひ壽庵と號す丸岡の人にして初代藩主有馬清純侯に仕へしも後ち故ありて河北椎原に隱れて竪を業とす性沈雅にして名望を求めず寡欲にして利財を嫌ふこと糞尿の如し業餘群書を家熟の子弟に講じ時に人を會して清談雅事を好み加うるに煙霞の癖あり即ち飄然として山河を跋涉し或は古蹟を原ねて感慨を叙し行々古詩を吟ずるに　興亡莫問前朝事河水東流去不歸　を以てす寶永年間伊勢に參宮の途次五畿を巡遊して其旅日記を作り晩年深く佛に歸依し享保の初め親鸞聖人の遺蹟を慕ひ二十四輩となりて二十四輩記を著し更に廻國指南車を記して世に梓行し或は自ら遍歷して越前名勝志を著せり故に藩中其博覽强記に服せざる者なかりしと云ふ

予幼時丸岡に遊んで藩竪堀江藏信所獲の越前名勝志を借覽したるに著者が一として自家の臆想を含ず又是に類似の他書に據らざりしを觀て敬服措く能はざりき則ち之を堀江氏に告げたる事ありき而して堀江氏は數年前同地に物故せしも其書は猶ほ珍襲して同家に存するなるべし予當時僅に十六歳未だ乳臭兒たるを免れざりしも煙霞の癖あり自ら此種の書を編まんと欲し偶ゝ一覽したるに因る一言之を

追記する所以なり

青木峯行

通稱を松伯と云ひ峯行と號す丸岡藩醫たり性學を好み業餘加茂眞淵に就て國學を修む其江戸に在るや鄕里丸岡なる幼女より

春のくるかすみのさとはかすむともかへる山路のみちなわすれそ

と言ひをこしければ峯行の返歌に

年のうちにかすみの關を出いなばはる待つべしと人やとゞめん

かくて歸り道にて

家にかへるたびにあらすは有乳山みねの淡雪さむからましを

わたつみの沖のしら波よる〳〵はしらぬとまりの月を見るかな

藤田天洋

名は天洋・朴齋又は二峰庵と號す丸岡藩侍醫にして又同藩蘭方醫家の鼻祖たり更に漢學を修め詩文を善くす即ち其敎を受け醫業を開きし者數十名加うるに漢學習字の門弟二百餘名に達す明治十二年九月二十六日卒す享年九十有二・神葬を以て遺骸を福聚寺境内に納む蓋し天洋は慷慨の氣に富み其詩文を草するや頗る時勢を達觀するの風あり

五橋曉望

東山天欲曉樹抄粉墻分知是名藍在鐘聲下白雲

竹内西坡

名は玄同諱は正幹・西坡と號す幼名を騏驥と稱し加州大聖寺竹内玄立の男たり其叔母某丸岡藩醫竹内玄秀に嫁す西坡則ち玄秀に養はれて其女と婚す壯年京師に遊學し藤林普山に就て蘭學を修め後長崎に到り蘭醫シーボルトに師事し學成りて故鄕に歸るに及び藩主擢でゝ侍醫に擧ぐ天保七年五月二十六日江戸に出で芝露月町に居を卜す同八年八月四日願に依り剃髮し次で同月九日木挽町に移る同十三年二月四日業餘天文方山路彌左衞門の役所に於て老中水野越前守より蘭書翻譯御用手傳を命ぜられ遠藤但馬守を以て年々白銀十枚を給するの恩命あり同十四年八月十八日醫業特に出精し且つ昨年奉官の旨を以て御滿足に思召し俸二十石を賜はる弘化元年二月十五日麴町三軒屋に移り其十二月二十八日海上砲術の翻譯に勤めたるを以て大岡主膳正を以て白銀十五枚を賜はり山路彌左衞門の役宅を拜領す同四年七月十一日日本風俗備考和解の勞を賞して白銀十枚を賜はる安政五年七月七日幕府の奥醫師と爲り

三十人扶持勤番二百俵御番料二百俵下さる時に將軍家定病あり則ち西坡同僚伊藤元朴・戸塚靜海等と共に戮力して醫藥を進む是れ幕府に於て西洋内科醫術を採用せし濫觴たり文久二年十二月十六日西坡進みて法印に敍せられ渭川院と號す西洋醫學所長を兼ね翌三年三月家茂に隨うて京師に到る既にして將軍病あり西坡夙夜奉侍して蓐側に在り偶〻自ら眼を病めるも之を治するに暇あらず遂に明を失ふ慶應二年正月二十日家茂遂に薨ず此に於て致仕して自ら風香と號し風雲野鶴を友として又世事を顧みず明治十三年一月十三日病を以て卒す享年七十有六・青山梅窓院墓地に葬る

×

高島敦よりの來柬

爾來御無音仕候漸暖和相催候處如何被爲涉候也御滿堂樣益御清適御與居奉敬賀候野生にも春來調練御見分等之儀に付三月も空敷相送其後風邪に而今日迄も引入候得とも最早全快仕候然ば御多端中御面倒恐入候得共追々奉願候チラリール御翻譯如何に候哉若出來居候はゞ拜領仕度候若又格別手間取候儀に候はゞ元書當分御返却被下候樣奉願候此譯は貴家に而村上太三郎寫版太郎左衞門方へ差出有之候處右寫本を當家蘭學者修藏と申者長崎表より罷越に付持越只今無之趣に御座候然る處小十人方御稽古被仰渡ヤーケル打方可致被仰付候に付而は右ヤーケルの手前教授不致而者不相叶候處ヤーケル手前打方之儀委敷不相分差當大に當惑致居候間私所持之チラリール供渡奴候樣左無之而者同差支に相成候との儀に御座候依之右者竹内方へ悴より相賴有之候間如何相成居候哉難計候得共元書有之候には相違も有之間敷候間申遣候樣可致申答候處早々取寄差出候樣との嚴命に御座候是等の譯合も能出可申上筈に候得とも書中に而は此意味も相碎けかね候最早御翻譯相濟居候儀と奉存候間乍御面倒右之書此者へ御渡被下候樣奉願候委曲は拜眉萬々可申上候皆急此段奉願度如此匆々不備

二月十三日

尙ほ内君樣如何被爲涉候哉宜敷被御傳可被下候其内參上御禮申上候以上

又

頃日者御多端中御懇篤御細書一々難有奉存候漸時候も居り合候樣相覺愈御清穆御與居奉賀候然者繁劇中御面倒恐入候得共相馬大膳大夫殿藩中岩城忠次と申人何卒蘭學相學度候處相當之先生も無之候間何卒竹内樣へ御入門致度右に付愚老より厚相賴くれ候樣相願候事に御座候此人入塾と申には無之日々通にて御教示を蒙度支儀に御座候素蘭學之儀少も相のぞき候人に無之此節アヘセより初而相始候人に御座候間御門書中誰々歟被仰付夫々御教示之儀右萬々奉願候此段御願まで則願當人を以愚書差上申候宜敷御沙汰奉願候匆々不二

四月十六日

西坡老先生差置

尙ほ毎度恐入候得共チラレイルの儀は吳々宜敷奉願候以上

竹內麴園

名は正信字は玄庵麴園と號す幼名を儘二郎と呼び丸岡藩侍醫竹內西坡の二男なり天保七年七月二十三日江戸芝露月町の宅に生る安政元年自宅に於て和蘭醫學解體學・生理學・內科學等を講習すること九年文久二年十二月長崎に赴き蘭醫ボードイン・マンスヘルド及びハラトマ等に就て解體學・化學・生理學・內外科學・繃帶學・中毒學・產科學・眼科學等を傳習すること五年餘且つ同地病院に於て臨牀實驗を修む慶應元年三月長崎病院頭取竝を勸め次て頭取に任ず明治元年二月歸宅麴町平河天神下に開業し閏四月東京病院頭取竝を勸め六月より陸軍附醫師取締を勤め十一月靜岡に移住して靜岡舊病院用取扱を勸めしが二年四月召されて再び出京し其九月二日大學助教を拜命し從七位に敍せられ幾くもなく少博士となり少典醫兼少博士に進む四年七月少助教に任じ五年權大侍醫を拜命し八年一月五等侍醫に進み次て皇太后拜診御用掛申付らる九年五月四等侍醫に任じ十年三等に進む十六年四月勳六等單光旭日章を授けられ十一月二等に任じ十九年二月五日侍醫に任ず二十七年六月勳四等瑞寶章を授けられ七月二十日病を以て卒す此日位一級を進めて從四位に敍せられ勅使を差遣し白絹二疋及び祭粢料御下賜あり皇太后陛下　皇后陛下　皇太子殿下よりも各々祭粢料を下賜せらる享年五十有九・青山梅窓院先塋の次に葬る

土肥淳朴

鍼科を以て丸岡藩侍醫たり廢藩後は陸軍に身を投じて三等軍醫正に進みしも後ち官を罷めて武生旭町に開業したるに門前常に市を成せり特に子弟を愛して氣骨に富む又自ら菊を養ふて隱然君子の風あり往年內臟外科手術を施して箕山橋本子爵に知遇を獲たること多し嗣子無し則ち親戚石渡孝文の二子慶藏を以て家を襲がしむ

×

明治三十六年八月七日あはらべにや方御後室鈴子の君より金津町小生宛書翰

御文ありがたく拜し上まゐらせ候この程は御遠方御あつさも御いとひなくわざ〳〵御たづね被下誠に何より結構なる品々及び御菓子いたゞき難有あつく御禮申上まゐらせ候せつかく御出いたゞき候得共一向御かまひも申上ずおあいそもなき御事にて誠に御氣のどく樣に存上たり〳〵はた又今日は御心かけさせられ牛乳贈り被下誠に〳〵難有御親切樣の段ふかくうれしくあつう〳〵御禮申上たり〳〵筆末ながら　御母上樣御兄上樣御始め皆々樣へくれ〳〵も宜敷御傳言願上たり〳〵おちゝ

はま事にあたらしく結構に御座候いろ〳〵御手數何とも恐入まゐらせ候此後もしもよろしき御たより候はゞ朝にはかぎり不申候ゆへ何時にても宜敷はなはだ恐入候得共御願申上候何とも御用多の御事申上かね候得共御やさしき御言葉にあまへ御願申上ゟ〳〵何も〳〵御禮かた〴〵御願まであら〳〵めて度ゟゝ

八月七日　　鈴

笹岡芳名様　御許

尚々御あつさ御せつかく御いとひ被遊候やうねんじ上ゟ〳〵誠に筆不調法に候間御はんじ御覽願上候

×

明治三十六年十月二日越前上鯖江の御後室鈴子の君より金澤市百々女木町竪專校公認下宿内小生宛書翰

先もしは細々との御文難有拜しまゐらせ候早速御返事申上候はづの處かれ是大きに御無沙汰樣申上何とも申譯もなきしだい平に御ゆるし被下度候さやうに候得ば御ま衞樣御事ま す〳〵御機嫌うるわしく本月八日御地學校へ被爲入公認下宿に御寄宿に相成候おもむき仰いたゞきありがたく存上ゟ〳〵扨又先ころ蘆原湯治中は毎々御見舞いたゞき其上書物その他結構なる御品被下よろづ御親切樣になし被下誠に誠に難有ふかくよろこび入ゟ〳〵尚又歸宅の節御立寄申上候處却て御厄介樣に相成りわざ〳〵御見送り被下是又厚く御禮申上まゐらせ候あはら行の事委しく福井新聞へ御出し被下誠に妙へなる御文にて無學の私さへま事にかん心致ゟ〳〵私病氣もこのころは全快致し無事に暮し居候間乍憚樣御安心戴き度願上ゟ〳〵先は延引ながら御禮御返事まで申上ゟ〳〵あら〳〵めて度かしこ

九月二十九日　　壽々

笹岡芳名樣　御前

尚々時候御いとひ被遊候やうねんじゟ〳〵申上度御事も山々有之候得共誠にふつゝか者にてつたなき筆につくしがたくよく御はんじ御覽の程願上ゟ〳〵

註　福井新聞（御出し云々の事は知己土生窪東の主筆たる同新聞紙上へ三十六年八月十五日慰安の爲め「湘南記行の一節」を寄せたる記事を指したるものなり

附記　予が家兄は淳朴先生に師事したるもの〻一人なりき而して二十六七年の交予（時に歳十五六にして福井縣尋常中學校の初級に在りき）に宛てられたる亡父後慰諭の書翰はがき等數通を藏するも文中の記事先生歿後の今日之を掲げんは或は遺德を毀くるの虞あらんかと思ひわざと之を略しつ

淳朴先生歿後御後室鈴子の君より予に宛てられたる書翰はがき等は十數通に及べり悉く之を藏す右に掲げたるものは予が鄉里金津より僅に一里を距りたる蘆原溫泉所光風館に御靜養中母兄及び予の交互に病牀に見舞たる頃の書翰に過ぎざるも謙德にして予が家系に對して往事を忽にし玉はざるのみならず予に對しては特に溫情の細やかなるものあり則ち一二を採

つて世に傳へんと欲するの予の肆心に出づ

合屋文仲

丸岡藩醫たり廢藩後は同地に開業して盛名あり傍ら謠曲を能くし閑あれば常に之を歌ひて頗る長人の風あり又俳諧に遊びて蓑笠庵梨一（綿屋希因派）より十代の衣鉢を稟け立机式を擧げて大全庵瓦石と號す明治三十八年八月十四日卒す法名を成美院大全瓦石居士と云ひ臺雲寺に葬る

堀江藏信

第四節・二・三國醫人傳

杉山豫齋

名は篤信・通稱良藏字は子良・日州・九龍・豫齋等の號あり三國の人文政三年京都に移住し醫術に從事するや其療法精妙にして起死回生の聲譽を博し治を乞ふ者常に門前市を成せり同年八月大聖寺宮の御抱醫師に擧げられ天保七年十二月九日典藥醫師に補し從六位上に敍し日向介に任ず同九年七月天脈（仁孝天皇）御平日拜診仰用仰付られ同十年十月仙洞御所（光格天皇）御平日拜診御用仰付らるゝの光榮に浴す嘉永元年十二月十二日病を以て卒す其常に門弟に教ふるや醫唯在乎誠其意爾・養生唯在乎愼其

獨爾・診法唯在乎觀觀察爾を以てす則ち門人中名を遂ぐる者甚だ多し

杉山節齋

名は信達字は章甫・復堂又は節齋と號し晩年に至りて又梅窓と號せり幼名を嘉藏と云ひ文化十三年九月十九日三國大門町に生る則ち父豫齋に伴うて京都に移る時に僅に五歲旣にして嘉永三年十二月十九日典藥寮醫師に補せらる時に歲三十四同月二十七日從六位大隅介に任ぜられ安政三年二月五日正六位下に敍し同六年十月二十一日出雲介に遷任す文久三年正月二十二日從四位下出雲守の宣下あり同年八月天脈（孝明天皇）御平日拜診御用仰付られ慶應三年六月十八日天脈（明治天皇）御平日拜診仰付られ明治二年三月七日御東幸供奉仰付られて東京に移住し同九年九月三日少典醫に任ず同三年十月從來の地下官位を廢するに際し翌月改めて正七位に敍せらる同四年九月二十八日老衰に付隱居願出で京都に移住して悠々自適すること十三年にして卒す享年六十有八實に明治十六年七月三日なり

田中靖齋

靖齋は杉山豫齋の二男にして即ち節齋の弟たり名は恭藏字は信文・靑靖齋と號し醫を父に受く然れども叔父田中履堂嗣子無きを以て入つて之を襲ぎ田中氏を稱へ醫を以て曇華院宮に仕ふ性至誠孝順に

して夙に名聲高し京都町奉行將に之を旌表して恩賜の事あらんとす然れども靖齋之を洩れ聞き謙遜てし敢て當らずと爲し固辭す則ち事遂に止む以て其人格の高潔なるを知るべし

第五節　鯖江醫人傳

西島俊菴

名は玄仲字は俊菴天明七未年を以て鯖江藩主間部侯侍醫西島氏に生る俊菴幼にして學を好み英敏にして夙に西洋醫術の精確なるを知る乃ち藩主其英才衆に秀づるを察して大に望みを屬し醫學に竭すべきの命あり然れども幕府洋籍を學ぶを禁ずるの時なるを以て儒學を名として江戸に入り潛に修學せんと欲す時に歳十七則ち享和三癸亥年十月晦日江戸に着し木挽町杉田玄伯及び大槻玄澤の二氏に師事して蘭學を修め更に長崎に到り蘭醫に就て洋學を傳習し兼て解剖學外科學を研究し居ると三年十ヶ月大に得る所あり再び江戸に入る時に文化四年七月十八日なり偶〻翌五年千住骨塚原に於て杉田大槻の二氏解剖を行ふに方り俊菴是が助手たり其剖見記事を覽るに一筋一肉毎に附箋を付して之を有志の醫師に參觀せしむ實に叮嚀親切なるを知るべし同年六月二十六日江戸を發して歸國の途に就く玄澤別れを惜み息玄幹をして之を品川に送り特に送別の序を贈らしむ其七月九日鄕に歸り直ちに醫業を開くに忽ちにして患者四方より麕集したるも同僚中蠻術と唱して排斥する者亦甚だ多し而も俊菴毫も之を意に介せず傍ら子弟を養ひ以て名を擧ぐるに至る文化七庚午年正月十日卒す享年僅に二十有四・聞く者痛嘆せざるはなし同年門弟記念碑を建てしも今は雨露に磨滅して僅に　命竭力醫事聞之當時　官禁讀洋籍君窃研精其術始　唱此科于醫　の數句を讀下し得るに過ぎず惜哉

送俊菴盟兄序

南越西島俊菴將歸盟弟槻子追而送之品川之滸飲食之旦告曰凡官於醫子知其事乎蓋病之役非以役病也凡君之於醫者出其俸米傭之使司命於我也今我受其俸米怠其業者天下皆然豈惟怠之又從而盜之假令娶一婦於家受其衣食怠其家事又盜其財則必怒而出之矣以天下多類此而君之莫敢加其怒與出者何哉事不辨也事不辨而理均如病者何有理於達仁於志者不恐懼乎俊菴學醫于玆六年矣夙興而夜寢愧思而明辨處方平燎病均無論貴賤貧富其不虛受俸米也當矣其知恐懼而謹肅也的矣吾與子有交誼其分手也屬杯言之

又

吾幼也讀素靈之書私怪陰陽窮理者無所益於病而諸書往々有是言豈誠旨於昧邪及誦仲景子和文乃知雖彼不欲陰陽窮理與病對接然猶未能脫其意或爲索病因處方劑資論說於是有託而逃焉者也若香川氏子立四劑東洞萬病出一毒彼豪傑而模範于當世汲々每要救病其於外也固不暇尙何陰陽之託而窮之逃